

Lv.0の魔道士

蓮根畑

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——特典貰ったけど困難に正面衝突するLv.0の魔道士の冒険譚

## 目次

番外編	オリジナルキャラクター説明	1
1	いざ、妖精の尻尾へ	5
2	目の胎動	10
3	無の極み	19
4	訳ありの村	25
5	異変	32
6	嫌いなものは	39
7	師弟関係とは	50
8	のんびりからの急落下	57
9	睡眠からの戦闘中	64
10	トラップ	72
11	飛び交う弾丸、振るう刃	79
12	妖精の尻尾の魔道士	87
13	妖精女王と無の極み	96
14	S級魔道士の実力	103
15	魔法について	111
16	剣を作ろう	118
17	剣を作ろう	124
18	剣を作ろう	133
19	剣を作ろう	139
20	師匠もとい妖怪ジジイ	146
21	厄介事はすぐ起きる	156
22	裏蓮華	161
23	最も怒らせてはいけないギルド	169

4 7	善悪反転都市ニルヴァーナ ②	328
4 6	善悪反転都市ニルヴァーナ ①	321
4 5	終幕	313
4 4	それは竜と竜の戦い	307
4 3	竜の支配者	299
4 2	寝る子は育つと言うが起こされては意味がない	293
4 1	前日談	289
4 0	心の檻	283
3 9	君に幸あれ	273
3 8	運命の反転	264
3 7	星と竜	257
3 6	unlimited blade works	250
3 5	楽園の塔	244
3 4	すぐに始まる楽園の塔	240
3 3	人の力	233
3 2	人類悪 顕現	226
3 1	妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 7	217
3 0	妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 6	211
2 9	妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 5	204
2 8	妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 4	198
2 7	妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 3	190
2 6	妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 2	184
2 5	妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 1	178
2 4	戦前	175

## 番外編 オリジナルキャラクター説明

オリジナルキャラクター紹介

ジョニイ・アルバート

年齢17歳

身長：169cm

体重：60kg

詳細：今作主人公！何らかの原因で死んでしまいフェアリーテイルの世界に転生する事になった。ジョニイと名前についていたので某奇妙な冒険の主人公のように黄金の回転エネルギーとか使えるのかとドキドキしたが出来なかつたのがショックだったそうだ。

本来ならば記憶を消されての転生だったはずなのに何故か記憶を保持している。

性格は面倒くさがり屋である。ぶつちやけ彼は努力とか嫌いだが死にたくない一心でひたむきに努力してきた。その代わりに勉強を捨てた。

普段着は7000Jで売られていたジャージ。

理由は戦闘中に汚れても問題ないから、である。

戦闘スタイルは指につけてある簡易魔法術と神様から貰った刀をメインに使う。

SKILL

写輪眼：・ジャンプにて連載していた「NARUTO」で出てくる魔眼。

うちは一族と呼ばれる一族のみが開眼できる。その眼は、魔法（というか忍術）、幻術、体術の技を全て見極めコピーすることが出来る。発動すると目の色が赤になり、三つ巴が浮かび上がる。

開眼するためには絶望感や失意に苦悩することによって、脳内に特殊な魔力が吹き出すことよって開眼する。

主人公であるジョニイは、この小説の本編にて書かれた落ちてくる

木の葉1000枚を地面に落とさず全部斬る、という訓練があまりにも出来なすぎて開眼した。

写輪眼の上位版として万華鏡写輪眼と呼ばれるものがあるがそれはまた後に…

神様から貰った刀：・名前はない。某聖杯戦争ゲームのサーヴァントのようにビームは出たりしない。

ただ頑丈なだけ。しかしその頑丈さはエルザの持つ金剛の鎧に突き刺しても折れない。金剛の鎧も貫かれないが…そこら辺は流石神様が作った武器である。

メタになるが作者的にはこの神様から貰った刀が後の最強武器にしたい。というかどうかという能力を持った武器かは決めているが問題は作者がそこまでめげずに書けるかが問題である。

簡易魔法術：・魔法屋にて5000Jにて販売中！

シール型となっており指先に貼り付け特定の指の形を作り、そこに魔力を流し込むと簡易魔法術に記憶されている魔法が発動される。

主人公君は全4種コンプリート。

ラビットステップ：・フェアリーテイルに所属しているジェットを使う神速とはまた違う魔法である。ジェットの神速が全身のスピードを強化するのに対し、ラビットステップは身体の一部分だけ強化出来る。

消費魔力は少なめである。

刀身変化

神様から貰った刀の形状を変える魔法。

今のところ出ているのは双剣と籠手のみだがもうちょっと種類はあったりする。

普通の剣で刀身変化をやり続けると脆くなりやすいが神様から貰った武器なので超頑丈である。

無流……型、技がない型破りの流派。最終的な目標は振るう一太刀が一撃必殺。何処ぞの李書文である。

師範代曰く「技とは模範するものではなく、生み出すもの」との事らしい。

サクラ・アガートラム

年齢：17歳

身長：161cm

体重：×kg

B：77／W：56／H：80

詳細：原作では登場していない今作のオリキャラ。容姿はFGOの桜セイバー（沖田総司）そっくりである。

自称主人公の弟子であるが、主人公はそれを面倒くさがっている。性格は馬鹿みたいにポジティブ。行動力高めの子。村の掟で外に出るなど言われていたのに当たり前のように抜け出す凄みがある。主人公に気づかれないうように背中をとったりと隠密活動がしれつと上手かったりする。

サクラの両親は生まれた時には既に死んでいたのか親は見たことがない。運良くメルカス村のルチネスに拾われることになった。

SKILL

桜花七閃、一ノ型―天空桜……リンネ・アガートラムが使っていた7つの技のうちの一つ。カウンター技であり相手の攻撃を逆刃で流し、逆刃に相手の威力を乗せることで攻撃力と速さをあげ、自身の速さでさらに上乘せし、相手を下から上に切る。成功すると相手が大空まで吹っ飛ぶ。それは天空に舞う桜のように。

技の名前の由来として、桜花七閃はジャ○プで一時期連載していた剣道の漫画から、天空桜はRAVEにて登場した剣の名前。



# 1 いざ、妖精の尻尾へ

俺はバカみたいにデカイリュックと、キャリーケースを持ってとある国まで来ていた。

マグノリアと呼ばれる国はある漫画のファンならピンと分かるほどの国である。

人口は6万人と小規模だが町の賑わいは元俺が住んでいた東京にも負けない。

飲酒は俺が元々住んでいた日本と違い15歳からオーケーと言うが前世から「お酒は二十歳から」というのが頭に染みつき未だに飲んだことはない。というかあまり好きじゃない。

さて、俺がマグノリアに来たかという目の前にそびえ立つ木組みで作られたギルド。

名前を「妖精の尻尾」という。

俺は一度大きく呼吸をし、ギルドのドアに手をかけた。

中からは喧騒が聞こえてくる。

正に原作通りだな、と口元は笑っているが内心、心臓はバクバクとドラムロールのように響いていた。

履歴書はちゃんと持っている。大丈夫、完璧だ。

と言っても原作を見た限りだと履歴書もなにもいらなそうだったが…

ああ、そうだ。

説明し忘れていたが、この俺、「ジョニー・アルバート」は転生者というやつだ。

俺の説明をしよう。

俺は一度死んだ。比喩ではない。マジだ。

死因は覚えていないが日本の何処かの県に産まれて、のんびりと暮

らしていた。

それなりの人生を送っていた俺だったが、いつの日か真っ白な部屋にいた。

あの光景は鮮明に覚えている。

そんな白い世界の中に凄く偉そうな人が俺の前に立っていた。

それはとても美しい人だった。

モナリザという作品があるがそれを遥かに凌駕する美しく、綺麗だった。

そんな美しい人は俺を見て一言言った。

「——お前は死んだ」

でしようね。

と同時の俺は思った。

そりゃ、こんな白い世界にいたら誰でも死んだと思うわ。

俺は何か突っ立てるのも何だか恥ずかしかったので正座して話を聞くことにした。

で5分間ぐらい話を聞いてわかったのが

- ・ 真っ白な世界は死と生の境目の世界
- ・ 目の前にいる人は神様
- ・ お前は死んだ。
- ・ 死んだ理由？ そんなの知るかマヌケがア
- ・ 情けで何かやるよ。3つぐらい。
- ・ お前が行くのフェアリーテイル世界
- ・ 前世の記憶は消される

・・・途中で気化冷凍法でダイアーさん殺した人みたいな言葉使いが出たが気にしないで欲しい。

何故フェアリーテイル？と聞いたらサイコロで決まったとの事。結構軽く決めちゃってるのね。というかどんなサイコロ使ったのかが気になるどころだ。

どうしようもないので仕方なく納得し、特典とやらを決めようと思った俺だがフェアリーテイルの単語をふと思い出して頭を悩ませた。

フェアリーテイルって死亡率高くない？

フェアリーテイルは週刊少年マガジンに掲載されているバトル漫画である。

滅竜魔法を使う主人公、ナツ・ドラグニルとその仲間たちの熱い冒険だ。

だがバトル漫画だ。俺は格闘術なんぞ習ったこともない。そんな世界でどうしろと？

しかし決まっちゃってしまっている為、いまさら「男子高校生の日常の世界にして！」なんてことは無理である。

ありとあらゆる漫画知識を総動員させジャンプとヤンジャン、そしてラノベに出て来た必殺技や能力を思い出した結果。

・写輪眼

・凄武器

・もし万華鏡写輪眼が開眼した場合失明のリスクをなくしてくれという3つ。

最近見た漫画がナルトだったのが目に見える。

しかし写輪眼は凄いのだ。

相手の技をコピー（ただし出来ないものもある）、先読み、目を見ただけで相手を幻術に嵌めたり出来る超高性能の目である。目がえぐられたら即終了だが…。

他にも輪廻眼や、別作品ではあるが直死の魔眼などがあるが、前者は動体視力などには影響しないため却下。直死の魔眼は月姫の志貫君が「死が見えていたら正気でいられない」なんてことを言っていたから却下だ。

そして武器。この武器であるがこれは神様頼りだ。だって神様が作った武器って強そうだし。あと男のロマンというやつだ。

まあ三つ目は言わんでもいいだろう。

失明したらあの世界では行けていけない。

さて、この三つの能力を持った俺だが待っていたのは困難だった。

名前がジョニー・アルバートになったことは別にどうだっていい。

ジョニーと聞いて爪飛ばせるか試したが何も出なかったことは地味

にショックを受けたりした。

おっと、話が脱線しかけたな。

まず俺の困難その一は格闘術の経験がないことだった。

生前帰宅部だった俺に秘密結社の戦いや、世界をかけた死闘なんてもちろんなかったのでヒヨロヒヨロだった。

そしてその二。魔力が少ない。

主人公ナツの魔力を100とするなら俺は15しかない。

俺よりルーシイの方がおそらく魔力が高いとか言う悲しい真実。

しかし死亡率高めのフェアリーテイル。

俺は死ぬ気で頑張った。

俺の住んでいた家から近い実戦形式に近い格闘術を教わり、結構上の方の魔法学校も卒業した。

魔法学校を卒業した俺はフェアリーテイルに入団することに決めていた。

黒魔道士ゼレフだったかな？そいつが攻めて世界を滅亡させるような話までは見たからそれまでに力をつける。その点日頃から争いごとが多いフェアリーテイルがうってつけというわけなのだ。

日本のことわざでいうならあれだ。虎穴に入らずんば何たらをえず、ということだ。

…きつと意味が違うだろう。

そんなこんなで俺の回想は終わりだ。

神様のミスか記憶は保持していたが別段困ったことはなかったため良しだ。

さて、いい加減このドアを開けよう！

かっつとビングだ！俺エー！

「おじやまし「ぎげんじゃねえー！」

え？俺何で入る前から拒否されてるの？

泣くよ？泣いちやうよ？エシデイシみたいになっちやうよ俺？

と思っていたら目の前にふと影が現れた。

顔を上げてみると意外！それは人だツた！！

「——え？」

名前も知らない人が俺の顔面にぶち当たった。全てがスローモーションの錯覚を覚える。この時俺は前世でみたマンガのセリフである鋭い痛みをゆつくりと、というセリフを思い出していたりする。

そして俺は気を失った。

## 2 目の胎動

「——酷い始まり方だ」

「そうね。私もここで暮らして長いけど貴方みたいなケースは初めてよ」

につこり、と微笑むのはこの世界のファツション誌で有名なミラジエーン・ストラウスさんだ。

原作初登場の時は瓶の破片が頭に突き刺さるというある意味すごい人だったが本気になったらサタンモード(?)になり、敵を殲滅する恐ろしい人である。

つまり怒らせたらヤバい。ということだ。

さて、顔面にストライクショットを叩き込まれた俺だが鼻に絆創膏はるぐらいの怪我で終わり、現在はギルド内のカウンターに座り肘を机につきゲツソリとした様子でミラジエーンさんと話していた。

「あ、これ履歴書です」

「え? 要らないわよ?」

「ですよねえ...」

やっぱり無駄に終わった履歴書を空中に放り投げかなり炎属性の低級魔法をぶつけ消し炭にした。

そういえば説明していなかったがこの世界には大雑把に分けた五つの属性がある。

光、風、海、水、闇、土、雷、火

この上記八つだ。

ナルトの世界より結構多い

これら八つを自分で努力して覚えるのが「能力系」と呼ばれ、アイテムを使つてする魔法の「所持系」だ。

俺はもちろん能力系を使っている。

使う属性は主に風であるが、五つの系統から外れた身体能力向上系の魔法なども使う。

主に風と言っているが一応全属性は使える。

一番風の属性が俺にあっていると、言われたので努力した結果俺は

風属性使いになったわけだ。

「そういえば何故貴方はフェアリーテールに入ろうと思ったの？」

「え？えーと、それは…」

災厄が来るまでの鍛錬です☆

なんて事は言えるわけがない。

しかし嘘なんてついたら妖精の尻尾のマスターであるマカロフに気づかれて某海賊漫画のギア3じみた鉄槌が落ちて来ること間違いない。

うむ、困ったものだ。

「鍛錬ですね…。この妖精の尻尾には強い人がたくさんいますから。あ、勿論喧嘩好きじゃありませんよ？」

「目を見たら分かるわよ。貴方喧嘩なんて似合いそうじゃないもの。少し子供っぽい顔してるし」

「なっ!?? そんなこと今まで言われたことないっすよ!??」

学院の友人には「お前絶対彼女出来ないよなww」とか「お前が結婚出来ないに俺の金額かける」と馬鹿にされた俺の顔だ。

なんて優しい方なんだミラジェーンさん…！

惚れてまうやろオ！と脳内で叫んだ。

「そういえばこのギルドにいる滅竜魔法使いナツ・ドラグニルはどうしたんですか？見てないんですけど…」

「ああ、ナツね。2、3日前に出かけるって言ってから帰ってきてないけどもうそろそろ帰って来るんじゃないかしら？」

「へー、そうなんですか」

そういえばここにはルーシイの姿も見えない。

クエスト中なのかもしれないがそれならミラジェーンさんは「仲間と一緒にクエストに行った」とか言うはず。

つまり原作2話の地点なのか？

うん、考えたところでよく分からん！

そんな事は気にせずミラジェーンさんと仲良くティータイムだ！

ここから始まる俺のラブストーリーー！

俺の青春は始まったばかりだ！

「帰ったぞー!」

ドガン!と何かが吹っ飛ぶ音と共に人が乱入してきた。

反射的に振り返ると意外!目の前にあつたのはドアだった!!

「前回と同じパターンだと!??ひでぶつ!??」

ドアの角が俺の顔面に打ち付けられ俺は椅子から転がり落ちた。

細部まで覚えていないがドアなんて飛んでいたか!??

というかちよつと痛がってる間に喧嘩始まってんだけど何なのこれ!??

戦闘狂か!??目の前を通り過ぎたら反応して来るポケモントレーナーとかじゃないのかこいつら!??

「だ、大丈夫?すごい音したけど...」

「大丈夫です...痛いですけど...」

鼻のみならず額にも絆創膏をつける必要がありそうだ。

その時ふと隣に誰かの気配。

横を見て確認すると金髪で巨乳で巨乳(大事な事なので二回言った)な女の子、妖精の尻尾のヒロインであるルーシィ・ハートファイリア。

ハートファイリアで思い出したけど原作通りだと「幽鬼の支配者」が攻めて来るんだよなあ... さつき自分で鍛錬しに来たとか言ってたけど凄く嫌だなあ...

「...大丈夫ですか?手貸しますよ?」

「ああ、それはどうも...」

という事で一方的に知っているルーシィの手を掴ませてもらい立ち上がった。

手が凄いスベスベだった。もう一生この手洗えない。

「助けてくれてどーも。あ、俺の名前はジョニィ・アルバート。好きに呼んでくれ」

「私の名前はルーシィです。新人ですがよろしくお願いします!ジョニィさん!」

「いや俺も新人だし...」

ポカンとしたルーシィの顔。

何だその人を馬鹿にしているような目は。

「私と同じなんですネ… 歴戦の勇者みたいな顔だからつい…」

「そうかしら？ 私にはいかにも新人っていうような可愛い顔してると思うわ」

「いやいや、ルーシイの言う通りだと思えますよ」

俺の顔はお世話になった道場の師範代にぶちのめされた時の傷が至る所に残っている。

あの師範代絶対ヤ○ザだろって言いたいぐらい酷かった。

何だよ「感じるな、感じろ」って。

矛盾してんじやねえか。

「火竜の——」

「アイスメイク——」

「接収——」

「王の光——」

って後ろ見たら凄い事なってるぞ!?!?

いや、マカロフさんが来るから大丈夫か。

「って何呑気にコーヒー飲んでるんですかジヨニイさん!?!?」

「大丈夫だって。ワムウの神砂嵐が飛んで来るわけでもないし。あ、さん付けじゃなくていいよ」

「今はそんな事言ってる場合じゃないです! というかワムウって誰!?!?」

ズズツと一口。

美味い。

「止めんかバカタレどもオ——!!」

スピーカーから放たれる音を直接くらったような大音量の響きが渡った。

声の主を見ると予想通り巨人化したマカロフさんが圧倒的迫力で全員を黙らしていた。

原作知ってたけど素直にびびった。

「でかあああああ!!」

おお、ルーシイのツツコミが炸裂した。

周りがシンと静まっている中ナツだけは両腕を組み高らかに笑った。

「だーっはははは！みんなして黙りやがって！この勝負、俺の勝——」  
プツツ、とスナツク菓子を砕く感覚でナツがプレスされた。

体が下敷きみたいに薄くなつてそよ風に流され俺とルーシイの足元に落ちた。

「む、新入りかね…？」

巨人化したまま俺とルーシイを見る… というか睨みつけた。本人はそう思つてはないだろうが…

俺はともかくとしてルーシイは目を見開き口をパクパクさせ、何も言えなかった。

「フンヌウウウウ…」

すると空気が抜けた風船のようにマカロフの姿が小さくなり、俺よりも身長がかなり低い老人となった。

「よろしくね」

「あつ、はい…」

ペコリと頭を下げた。

とう！と声を出しカツコをつけたのか跳躍しながら回転し、二階の手すりに着地しようとして案の定失敗し頭をぶつけた。

しかし何事もなかったように懐から大量の紙を出した。

「ま〜たやってきてくれたのう貴様ら、見よ評議員から送られた文書の数を」

ペラリペラりとめくる紙はゆうに100を超えていた。

それを面倒くさげな様子で一枚手に取り読み上げた。

「まずはグレイ。密輸組織を検挙したのはいいが、その後素っ裸で街をふらつき、挙げ句の果てには干してある下着を盗んで逃亡…」

「いや、裸じゃまずいだろ」

「まずは裸になるな」

ナイスツツコミだと思う。

「エルフマン！貴様は要人護衛の任務中に要人に暴行。カナ・アルベローナ、経費と偽つて某酒場で飲むこと大樽15個。しかも請求先が

評議会。ロキ、評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。某タレント事務所から賠償請求が出ている」

もう疲れたという様子で読み上げているが次の一枚を見て更に溜息を吐いた。

「そしてナツ…デボン盗賊一家を壊滅させるも民家を4軒壊滅。チューリイ村の歴史ある時計を半壊。ルピナル城一部破壊。ナズナ溪谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオンの港半壊…」

やっと読み終えふう、と一息ついたがまだまだ請求書の紙が有り余っていた。

「アルザック、レビイ、クロフ、リーダー、ウォーレン、ビスカ…etc… 貴様等ア…ワシは評議員に怒られてびっくりじゃぞお…」

「だが、評議員などクソ食らえじゃ」

マカロフが空中に投げ捨てた請求書が全て燃やされた。

「よいか、理ことわりを超える力はすべて理ことわりの中より生まれる」

「魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある『気』の流れと自然界に流れる『気』の波長があわさりはじめて具現化されるのじゃ」  
「それは精神力と集中力を使う。いや、己おのが魂すべてを注ぎ込む事が魔法なのじゃ。上から覗いている目ン玉気にしてたら魔導は進めん。評議員のバカ共を怖れるな」

「——自分の信じた道を進めェい!!それが妖精の尻尾の魔道士じゃ!!!」

響く歓声。

これこそが妖精の尻尾だということを実感した初日だった。

「さあ！ 始まりました！ 今回のチャレンジャーは新人のジョニー・アルバート！ そしてその対戦相手は我がギルドの問題児！ ナツ・ドラグニル！」

「「「オオオオオオオオ!!!!」」」

どうしてこうなったのだろう。

いや、説明するのはとても簡単だ。

10行以下で終わる。

ルーシイ「ジョニーってどのくらい強いのか？」

←

ナツ「戦えば早い」

エルフマン「男は拳」

矢印含めても4行で終わったよ……。

俺はやりたくないと言ったがやろうやろうと騒ぎ立てる始末。マスターであるマカロフも外でやるならいいぞい、なんて事を言ってる。止めてくれよ（切実）。

「なあ、本当にやるのか……？」

「あつたり前だ！ 食後の運動も含めてな！」

ナツの打ち合わせた拳から炎が噴き出した。

やる気前回だよ。こんな展開某錬金術漫画のオマケで見たことあるよお……

チラリとルーシイを見たら本当に申し訳なさそうに俺に手を合わせていた。

「ルールは簡単よ！ 気絶したら負け！ あとは降参しても負け！ 以上！」

ちなみに審判はミラさんがしている。

何でこの人こんだけウキウキしてんだよ。

あ、この人確かSだったわ。

「それじゃ開始！」

ミラさんの腕が下り、試合が始まった。

「火竜の咆哮！」

「——は？」

開始数秒、いきなりブレス。

「チヨ!!?・ちよちよちよつと待て!？」

両手を地面につけ、目の前の地面を隆起させ壁代わりにすることで何とかブレスを回避した。

「おまつ、バカか!?!いきなりブレスするやつがいるかア!!?。」

「俺がいる!。」

ナツはそのまま俺に向かって突進し、両手に火を灯した。

「——ラビットステップ」

勿論、俺もブレスなんてされたくないから本気を出す。

風の低級魔法「ラビットステップ」。

名前の由来は知らないが、効果はシンプルだ。足元に風の魔力を生成し、移動速度を上げる。

本来ならば後に妖精の尻尾に入るウエンデイが使う「バーニア」という一度使えば持続するタイプの魔法を使いたかったが、バーニアはどんな教科書にも載ってない付加術なので使えなかった。

ラビットステップは1秒に俺の魔力75のうち0.5秒を持っていく。

空になるまで使っても150秒しかもたないので少々心許ないのだ。

その為、使うときに使い、使わない時は切る。

一步でナツの目前まで近づき、ラビットステップを切ると同時に踏み込み、力を込めた右腕を精一杯後ろに引っ張る。

「——ラァー!。」

右腕を強化。

消費魔力3。全身にまで強化を施したら俺は即魔力切れになる。

ブン!と音を立てながら放たれた拳はナツに当たらず空を貫いた。

「火竜の——」

ナツの拳に火が灯る。

——ここだ

振りかぶっていたナツの右腕を俺の左手で抑えた。それと同時に伸ばしていた俺の右腕を引く。

「クソッ！打てねえ！」

人間はパンチを繰り出す時に多くの人が振りかぶるのを知っているだろうか？

弓を射るように腕を後ろに引つ張るのは確かに強い力を出しやすい。

しかし腕を後ろに引つ張った時に自分の拳で相手の拳を止めたらパンチが出来ないのだ。

そして右腕を抑えこんだまま足を捻り、ナツの膝元に叩き込んだ。左手を強引に離され、一度距離を置く。

「強いな…！」

思わず言葉を漏らしてしまう。

ナツはスピードもパワーもある。一撃受けたら多分俺は白目剥くことになるだろう。

流石主人公。

「お前もなーけど俺が勝たせてもらおうぞ」

ニシシと笑うナツ。

叩けば叩くほど強くなるナツ。

きつと同じ手段はもう使えない。

「行くぞジョニー！俺はこれからだアアア!!」

炎がナツの気持ちを表したかのようにメラメラと燃え上がった。

もうこれは魔力切れとか考えてる暇はなさそうだ。

俺もガチに行かせてもらおう。

「それじゃ、俺もやらせてもらいますか」

両目を閉じ、魔力を集める。

ドクンと目に胎動が走った。

ゆっくりと目を開けると黒の瞳から一転し、日中でも赤く、妖艶に光り輝く目。

「行くぞナツ。今の俺はさっきの俺よりちょっと強いぞ」

### 3 無の極み

「凄いわね。ナツと張り合ってるわ」

「魔人」の異名を持つミラジェーンはぽつりと呟いた。

ついさつきギルドに入ったジョニー・アルバートはミラジェーンの目からみたらお世辞でも多いとは言えない魔力量だった。

おそらく妖精の尻尾ではほぼ最低に近い魔力。

それだと言うのに魔力の塊に近いナツに負けずに攻め続けている。

「ジョニー・アルバート…どっかで聞いたことが…」

横に座っていたルーシイが言葉を出しながら何か考え事をしていたのに気付き、審判を放棄しルーシイに質問した。

「ジョニーの事何処かで聞いたことあるの？」

「あるような、ないような…でも何かで見たことがあったような…」

うーん、と頭を悩ませ続ける。

「週刊ソーサリー…でも、モデルなんかじゃなかったはず…」

「問題を起こしたわけでもなさそうね。でもあの実力があればマグノリアの格闘大会優勝出来そうね…」

「マグノリア…格闘大会…ああ！分かった！」

それはつい先月の話だ。

各地を回っていたルーシイは月刊ソーサリーを買うために本屋に寄った時にそれを見つけた。

それは決して万人が読むわけではないが、週刊ソーサリーの横にまるで、ジョニーと知り合う運命だったかのように置かれていた。

「先月フィオーレ王国全域で行われた格闘大会の優勝者…」

ルーシイが表紙に書かれていた二つ名をふと思い出した。

「<無の極み>ジョニー・アルバート…」

ちなみにジョニーが優勝した年に開催されたこの大会の選手は、総勢18万人だったとか。

——写輪眼

それは俺が特典として貰った異能の一つ。

某忍者漫画の主人公のライバル……名前をバラすとサスケだが、そのサスケの一族である「うちは一族」という血を引き継いだものにか開眼しない特殊な目だ。

赤の瞳の中に3つの黒の勾玉模様が浮かび上がっている。

その目は体術・忍術・体術の全てを見通す能力を持ち、この目で睨んだ相手を幻術にかけたり、相手の技をコピーすることも可能だ。

とは言えども俺の魔力では5分も持たない。

幻術はお情け程度でかけられるが普通に解かれる。

しかも俺の写輪眼は完成していない。

まだ二つしか勾玉模様が出てないのだ。

しかしそれでも見えるものは見える。

普段の10倍増しくらいに視力が良くなっている。

「火竜の——」

——喉に魔力感知

おそろくブレス。

動きを先読みし、俺の腕はナツよりも早く動く。今の俺は早撃ちで有名なビリー・ザ・キッドに匹敵する……はず。

左手の薬指と親指の先端同士をくっつけ、右手は中指と親指の先端同士をくっつける。

これは指の形によって指定された魔法をつかう簡易魔法術と呼ばれるものだ。

左手の形は風の弾丸を作り出し、右手は水の弾丸。

4：6の割合で作り出された弾丸を重ね合わせる。

風と水が混ざり合い、相乗効果を得させる。

確かナルトでもやってた気がするな。

「——咆哮!!」

ナツの口からさつききの倍くらいある量の火を吹き出す。

それと同時に俺も風と水が混ざり合った弾丸を放った。

竜巻状となった俺の水はナツの火を防ぎ、水蒸気をまき散らした。

白い煙に俺は包まれた中周りを見わたす。

ナツは鼻がいい。だからきつと水蒸気で姿が見えなくても——

「火竜の鉤爪!」

攻撃してくる——!

背後からの攻撃であったがあらかじめ写輪眼で見つけていたので簡単に対処出来る。

足に炎を纏った状態で振り落とされる一撃を見抜き、半身になり回避する。

しかしカウンターの一撃を叩き込もうとした瞬間、ナツは空中でもう一度回転した!

「——二連撃!」

咄嗟に腕でガードしたがドツ!と腕から鈍い音がした。

凄い蹴りだ。師範代のイカれた蹴りを何発かくらったことがあるがそれに凌駕する。

というか熱い。やっぱり炎はずるいよ。

「くっ…!」

ナツの勢いで少し後退する。

目と鼻の先にはナツの拳。

「——写輪眼!」

ナツの目の前の光景が変わった。

そこにいたはずのジョニイが瞬間移動じみた速さで移動しナツの背後に回っていた。

「いつの間にもっ?」だけど——」

ナツの拳からボツ!と勢いよく炎が放たれ、空中で体制を変えた。そして向き合った状態で勢いよくブレスを——

「——夢は終わりだ」

ナツの視界からジョニーが消えた。

「なっ——」

「そして気付いた時はもう遅い！」

ナツは死に体。

胴がガラ空きだ。

身体強化、右腕。

ラビットステップ発動。

足を地面に叩きつけ力を込め、体に走った衝撃を右腕に一点集中。拳を捻りながら叩き込む。

「——セイッ！」

ドンツツ!!

大砲じみた音が俺の拳から放たれ、ナツを大空へと弾き飛ばした。重力に従いナツは地面に落ち、俺は魔力切れで地面に倒れこんだ。

「はは…指一本も動かねえ…」

うおおお、と歓声が響く中強烈な眠気が襲いかかったのでゆっくりと目を閉じた。

「じゃあ191号室ね。家賃は月5万！払えなかったら即退去だから」

「怖っ！まあ払えばいいんですよ。払えば…」

ニコニコとした笑顔の割にすっごい怖いことという家主さんに家の場所を教えてもらい、さっそく家の中に入る。

結局あの戦いの後ナツから再戦を申し込まれたり、＜無の極み＞とかいう変なあだ名みたいな言われ大変だった。というかナツ元気ありすぎだろ。俺の魔力はもう0よ！

「重い…！」

クソみたいに重い荷物を引きずりながら階段を上がる。

191号室で1階にあると思わせてまさかの3階である。

そして偶然なのか191。イクウ！なのだ。野獣先輩… 久しぶりに野獣先輩を思い出したな。

やつとのことで3階まで上がり、鍵を開けてようやく家の中に入り込む。

今日は疲れたから整理整頓は明日にしよう。

さて、我が愛しのベットにフライ——

「よっ」

「邪魔してるぜ」

「何でやつ!!?」

当たり前みたいに座っているナツとグレイ。

誰よりも早くベットに潜るつもりだったのに何であいつらが占拠してるのさ。

「ルーシイの家はもう行って来たから順番的にジョニイの家になった」

「ところで俺腹空いてんだけど何かねえか?」

「順番って!!?というか人の家無断に入っておいてただ飯要求かよ!!

?というかまずどうやって入った!」

「いいじゃねえかそんなこと」

「よくねえよ!!?お前ら絶対これからも俺の家無断に入ってくるだろ!」

「当たり前前だ!」

「そんな時だけ声を揃えるなアア!!」

こうして波乱万丈の一日を終えた。

二人の胃袋を満たすために持って来た金は空となって…

空となったサイフを見つめながら俺はギルドの椅子に座っていた。

「こりやまずい…」

やつらが飢えた獣みたいな速さで買って来た飯を胃袋の中に叩き込み、俺は全然食えなかった。だと言うのに俺のサイフは空である。

損しかしてねエ！

と言うわけなので来て2日目だが早速クエストに行こうと思うのだ。

取り敢えず昨日の損を無くすぐらいの簡単なクエストでいい。

出来ればアルバイトみたいにチラシ配るとか… まあないだろうが。

アラシグマ討伐、伝説の薬草採取、黄金の卵の捕獲… e t c…

何だこれは… ほとんどモンハンでありそんなクエストじゃないか…

「む…」

クエストの紙をどかして見つけたのはとある街に度々現れる珍獣の捕獲、または討伐のクエスト。

お手頃な値段で丁度いいし、なんと向こうの街にいたら宿泊用の宿と飯が付いてくるだ…？

中々いいじゃあないかあ… (ジヨジヨ風に)

「これだな。よし、早速荷物まとめて行くとするか！」

一人ギルドの看板にてグツと拳を握り締める俺であった。

目指せ！無くした金と来月分の家賃！

## 4 訳ありの村

マグノリア発の汽車に揺られること大体30分。俺はクエストの依頼が来たメルカスという村に向かっていた。

メルカスは原作では出てこなかった街だと思いが見るからに簡単そうなクエストなので主人公補正を持ってない俺が行っても1日ぐらいで終わるだろう。

さて前回にも話して… 前回？まあいい。

今回のクエストはメルカス周辺に出る謎の珍獣を倒して欲しいとの依頼。

謎の珍獣の詳細としては白い、デカイ、四足歩行。モンハンに出て来そうだな（小並感）。

まあ流石にラオシャンロンとかウカムルバスが出てくるわけではないと信じていた。

とぼんやり考え事をしながら汽車から降りて1時間歩いてようやくついたメルカス。

入り口には兵士が眠たそうな顔で警備していた。

「あのー、クエストの依頼を受けに来たんですけど」

兵士が俺の顔を死んだ目で見ている、と思った次の瞬間、カツツ！と音がつきそうなほどの勢いで目を見開き急いで立ち上がった。

「貴様！何者だ！？どうやってここまで来た！？」

「は？何言ってるんですか？俺はただ依頼を——」

「問答無用！貴様を捉える！」

「はあ！？何言って——」

30秒後…

「叩けばいいって思考は何とかしなきゃな…俺」

黙りそうじゃなかったので取り敢えず一発叩いたら気絶させてし

まった。

だって旧式のテレビだって叩けば治るでしょ？  
なら人だっていける！と思っただよ。

許せ名も知らぬ兵士よ。これが絶望だ。

「取り敢えず倒れてるの見つかると面倒だから椅子に座らせてと…。」

兵士の頭を引きずり椅子に座らせ一息つく。

さて…これからどうしようか…。

無断で中に入ったらさつきみたいに襲いかかって来るかもだし、行かなければクエストがなあ…

「おや、旅人さんですか？」

とRPGのゲームのように出て来たおじいさん。白髪で白ひげ、更に背中には小枝を担いでいた。

マジでRPGに出て来そうだな…

「俺はクエストの依頼で来た者なんですが…。」

「おお！それはワシが依頼したクエストじゃな！さき、こんな所で立ち話も疲れるんでワシの家に案内しましょう」

「あ、ありがとうございます。助かります」

「なあに、いいってもんよ。それじゃ行きましょう」

かくして俺は中に入ることが出来たが殴った兵士はこのまま椅子に座らせておけば大丈夫だよな…？

「まずはワシの自己紹介を。ワシの名前はルチネス・メヘド。好きに呼んでください」

「ではルチネスさんと…ええと、俺の名前はジョニー・アルバーンです。俺も好きに呼んでください」

ルチネスさんの家に案内され、正座で話を聞いていたが開始1分足らずで足がピリピリして少し後悔気味の俺は何とか顔に出さないようにしていた。

ルチネスさんの家はメルカスのほぼ最西端にある家であり木組みの家だ。

2LDKと中々豪華である。正直言つて俺の家より広い。

そしてこの家で俺は1日か2日ほど滞在することになる。やったぜ。

「ところで先程から顔をピクピクさせておるがもしかしたら正座がキツイのでは？崩していいんじゃないよ？」

「… お言葉に甘えて」

たった一分で正座を解くことになったが足の開放感が凄い。元旦に新しいパンツ履くのと同じくらい清々しい。

「さて依頼の件なのじゃが…」

「ええと、確か白くてデカイ四足歩行の生物の討伐ですよ」

「そうそうそれじゃ。だが… 困ったことにワシは本当にそいつであつているかは不明なんじゃ」

「… と言いますと？」

「年をとつたせいで記憶力がないせいなのか曖昧でな…」

… 思つたより長くかかりそうなクエストだな。

これじゃどれを倒したらいいのか分からん。

「他に覚えていることはありませんか？」

「ううむ… 確か、角が生えてたような…」

「なるほど… それだけ聞いたら後は自分で探しますよ」

角が生えて白い四足歩行、そしてデカイさえ分かれば… あ、記憶が曖昧だったわ。

「そうじゃ。まだ帰つて来ておらんがこの家には娘がいるからの」

「へ？そうなんですか…」

「木の下に捨てられてたんでな、ワシが拾つたんじゃ」

重い。思つたより娘の過去重いよ！

「お爺ちゃんただいま帰つたよー！」

ドタドタ！と派手に音を鳴らしながら居間に入って来たのは薄い桜色の髪をした俺と同じくらいの少女。

誰に似ているかと言われたらFGOの桜セイバーだと思う。

桜セイバーの髪の毛長くしたバージョンだな。

つまり可愛いということだ。

…桜セイバーといえば石100個溶かしても当たらなかったなあ。

「あれ？その人誰？」

「あれじゃ、ワシが依頼した…。」

「それじゃあ魔道士ってこと!!? 凄い！初めて見た！」

ト○口をみたメイちゃんの如き速さで俺の目の前に顔を近づけて来た少女。

すげえいい匂い。はつきり分かるんだね。

「私はサクラ・アガートラムです！よろしくお願いします！」

「よ、よろしくお願いします…あと顔近い」

女子力の高さが俺の精神を抉る。

くそ…ヒロイン以外でこんな可愛いキャラが出てくるなんて俺は知らんぞオ！

しかも顔桜セイバーって…いや俺は普通に腹ペコ騎士王が好きだからね？本当だよ？

…本当だよ（重要な事なので2回言った）

「これサクラ、アルさんが困つとるじやろう？」

「はい」

あ、アルさんって初めて呼ばれたな…まるで某錬金術漫画の弟みたいな呼び名だな。

「さてこれからどうしますか？夕飯までは時間もありますし村の店などを教えましょうか？」

「いえいえ、荷物はあらかた持つて来たんで大丈夫です。俺はその白くてデカいやつを探しに行きますよ」

「あーじゃあ私もついて行っていいですか!!?」

ビシツと手を伸ばすサクラ。

この子テンション高えな…もうお兄さん付いていくのがやっただよ。年ほとんど同じだろうけど。

「ダメじゃ。村の者は外に出たらダメと言われとるだろう」

「えー、お爺ちゃんだって出て行ってるじゃん」

「そんな決まりがあるんですか？」

「そうなんです。何故かは分からないけど出ていくなって…」  
意味不明な掟だ。

鎖国状態の日本じゃあるまいし…

そもそも何故そんな掟が… まあ俺の気にすることではないけど。  
「おつと話が逸れましたな。村の外に行きたい時は兵士にバレないよう  
うにお願いします。見つかったら面倒くさいんです。いざとなった  
ら首の後ろをトンと」

「…」

この爺さん中々凄い発言したな。

「貴様何… も、の…」

「写輪眼の悪用ね。暫く野獣先輩に犯される夢を見てな」

取り敢えず入り口にいた兵士に写輪眼で幻術をかけた。

1時間ぐらい犯される夢を見てもらって、俺を見たことを忘れても  
らう。

写輪眼って本当便利。

そして野獣先輩も本当便利。

流石素材の数だけ強くなる男だ。

村の外の森は木の隙間から日が入り込み、何処かピクニックをして  
るような気分だ。

実際俺は作りすぎて余ったおにぎりを食いながら歩いている。

「しかし足跡も魔力痕跡すら残ってないな…」

爺さんの話を聞いている限りデカイ事は確かなので足跡が残ってい  
るかなと思っただが全く行っていいほどない。

それに加えて写輪眼で魔力痕跡を捜しているが全く魔力痕跡もな  
い。

「困ったなあ…」

「何がお困りなんですか？」

「全く跡がなくて… ん？」

話しかけられて反射的に返事をしてしまったがここには俺一人のはず。

だというのに俺の後ろにはサクラがいた。

「何で… っっていうかどうやってここに!?？」

「ふふふ、このサクラさんは隠密行動ならお手の物ですよ！」

ドヤ顔を決めるサクラ。

く、くそお！いちいち行動が可愛いじゃねえか！

「まあ付いてくるのは勝手だけど俺はどうなっても知らんからな？ 知らんからな！」

「はーい」

ルンルンと鼻歌混じりについてくるサクラ。

俺は前世では非リア充だったので女子と喋るのは苦手なのだ。

だというのに美少女が後ろからついてくる… 嬉しいのか嬉しくないのか分からんぞ。

「む…」

「どうしたんですか？ 急に立ち止まって」

本当に微かだが魔力痕跡が残っていた。

しかもまだ新しい…。

けど小さすぎる。ウサギよりもまだ一回り小さい。

「この足跡… この森では見ませんね」

「へえー… 取り敢えず追いかけるか」

歩く事数分。

「足跡がなくなっている…」

つい数秒前までは道なりに進んでいた足跡が唐突に消えて無くなっていた。

もしかして爺さんが言っていたモンスターの可能性が、と思った時だった。

「プー…」

何ともいえない小動物の鳴き声が聞こえた。

しかし目の前には何もいない。

「アルさん…上」

「上?あ…」

サクラに言われ頭上を見てみると

「プー…プー…」

綺麗に罫に引つかかったRAVE、そしてフェアリーテイルのマス  
コットキャラ的存在であるプルーが俺とサクラの間をブラブラと揺  
れていた。

## 5 異変

「プーン・・・」

「よしよし、可愛いですねー。あ、チョコ食べます?」

「犬にチョコやったら早死するぞ」

全身は薄い青、黄色い角・・・というか鼻?

丸い顔にこれまた丸い目、肉球のついた手、尻尾の生えた犬みみたいな生き物。

触り心地としては人形に近いかな。

それが俺たちが捕まえたプルーである。

このプルーと呼ばれる生物はフェアリーテイルの作者である真島ヒロさんが以前に書いていたRAVEと呼ばれる作品に出て来たのが始まりである。

RAVEでは唯一レイヴ以外のものでダークリングを壊す能力を持っていたり、怪我した人をプルーの上に乗せて震える事で外傷の悪化を防ぐ超便利ペットである。

しかしフェアリーテイルでは精霊の一体であり正式名称は「子犬座のニコラ」であり、原作では戦ったりはしていない。

というかプルーってルーシィが契約しているはずなんだけど・・・どうしてここに?」

あ、でも確か精霊世界みたいなところに行った時大量のプルーがいたな・・・」

「プーン・・・」

「えー、でもポチが震えてますよ?」

「ポチって・・・犬じゃないんだから・・・あ、犬だったわ」

ドリルが生えた妙な生物ではあるがいちよう子犬座なのだ。

「糖分は控えた方がいいから・・・持って来た昼飯のあまりを・・・」

でつかいおにぎりに海苔をひたすら引っ付けただけの爆弾のようなおにぎり。

俺が日本で食べた時あまりの衝撃で忘れなかった一品である。

中身はおかか、明太子、鮭に似た何か。

味は大丈夫だ。

「ほれ」

「プーン…」

肉球で器用に掴みモグモグと食べ始めた。

…可愛い。

「私も欲しいです」

「お前昼飯食べてないのか？」

「いえ、食べましたよ？それが何か？」

「我慢しろ」

えー、と文句をブーブー垂れ流すサクラを放置して色々とプルー（仮名）を見る。

この世界ではプルーは精霊扱い。つまりプルーと契約した精霊魔道士がいるはずなのだが…

「プーン」

チャリンと金属音が鳴ったので見て見るとプルーの首には契約に絶対必須の鍵がネックレスのように飾られていた。

まさかまさかの精霊の放し飼いというやつなのだろうか…

「謎が多いなあ…ん？」

よくよく見ると鍵の根元には紙が結ばれていた。

取って中を見て見ると汚い字で何かが書き綴られていた。

「むう…読めんなあ…」

何か手がかりになる可能性があるので取り敢えず回収。

何にも手がかりがないので鬱憤を漏らすように寝そべる。

上空には鳥が3匹固まって飛んでおり、空は雲ひとつない快晴。

「あー、無駄に晴れていい天気だなあ…」

「お爺さんみたいなこといますね」

「プーン…」

改めて紙を出して読もうとしても全く読めない。

見ていると解けない数学の問題を見てるような気分。

出して数秒だが速攻ポケットに戻した。

「ここで寝ても仕方がないか… っておいサクラさーん？」

「Zzzzz…」

さつき返事をして何秒も経ってないのにサクラは寝ていた。

何処の○び太君だろうか…

「サクラー。寝てるとオークに触られてエロ同人みたいになるぞー」

「Zzzzz…」

起きない。

「サクラさああああん!!!」

「Zzzzz…」

全然起きねえなコイツ。

放置してさつきと行きたい所だが放置して攫われたりしたら…

「仕方ねえな。起きるまで待つか」

「プーン」

3時間後…

「むう…」

ようやく体を起こしたサクラの口元には寝てる間に垂れた涎。

目をゴシゴシと擦って大きく欠伸をしていた。

「やつと目が覚めたか」

「あれ… アルさん…」

「もう夕方だから帰るぞ」

「はあい…」

最後にもう一回欠伸をしてサクラは立ち上がった。

「プーン」

「勿論お前も忘れてないぞ」

プルーをつまみ上げ姿勢が取りやすそうな俺の頭に置いた。

帽子がわりに結構いいかも…

「あ、あとサクラ。涎拭いとけよ」  
「えっ!?!?先に行つてくださいよ!」

「貴様なにも——」

「——写輪眼」

「はふう…」

本日二度目の野獣先輩の幻術。  
たっぷりと犯されたまえ。

あの後30分歩くことでようやく戻つてこれたメルカス。

お腹はペコペコである。それはプルも同様のようであらう、と可愛らしい音をお腹から出していた。

「お爺ちゃん返つてきたよー」

「只今戻りましたー」

「プーン」

ルチネスさんの家に戻ると中からは香ばしい匂いがした。

匂いからするとおそらくシチュー。爺さんの癖に中々女子力が高いな…

「おおやつと帰つて来おつたか…あとは盛り付けだけなんで休んで起きなさい」

「ありがとうございます」

お言葉に甘えて床の間に座り、早速俺はポケットからあの紙を取り出した。

それと同時に写輪眼を発動させる。

実は写輪眼には解読能力も備わっていたりするのだ。

とはいえども未完成の俺の写輪眼では限度はあるが…

「こ、このむ…らで…ん…」

「出来たぞー。席に座れー」

「はーん」

紙をしまい、やつとの夕食。

シチューにサラダ、それにパン。

質素ではあるが腹がペコペコの状態だったらとても美味しそうに見える。

「それでは・・・いただきます！」

美味かった夕食も終えあつという間に夜中。

部屋の一室を貸してもらったがこの家は確か2LDK。つまり二部屋しかないのだがサクラとルチネスさんは同じ部屋で寝るのだろうか？

・・・ だとしたら何だか罪悪感があるな。

「まあ気にしても仕方ないか・・・ 解読の続きでもしよ」

写輪眼が発動させ紙とにらめっこ。

あまりにも集中していたせいで魔力切れにも気づかずいつのまにか眠っていた。

「なああああああにもねえええ・・・」

「プーン」

2日目。

色々と罨を張ったりしてみたが何にもかかってない。

今日も上空でカラスに笑われるだけだ。

「カラスに上空で流れた時には足と足の間から石を投げる・・・ だっけな」

試しにやってみるがカラスには届かず石は地面に落ちた。

「プーン・・・」

「なんだ？ 慰めてるのか？」

ポンポンと俺の足を叩くプルー。

何故か懐いたプルーを頭に乗せ連れて来たのはいいが特に役立つ

ことはしてくれてない。

まあ暇なときに触るけどさ。

「仕方ない。今日も解読かな」

昨日の内に読めたのはたったの1行。

あと4行ある。辛い。

「このむらで… おそろ… しい… こ、とが… ってなんかこの手紙ヤベエ気がしたぞ！」

実は今自分がとんでもない事態に巻き込まれてるんじゃないか…  
!??

この手紙の内容からして「この村でヤベエことが起きてる！助けて！」みたいな感じがする。しかも紙の質感からしてまだ新しい…。

この付近の近くの町はメルカスのみ。

そして異変といえば俺が入るだけで門番が俺を殺す勢いで見ていることも関係ある。

「俺… ヤバイクエスト受けたな…」

メルカスの村の中心には城のようなものが建っている。

城といえども大阪城みたいな感じ。中世感は皆無だ。

そんな所に俺は侵入していた。

何故と聞かれれば簡単。

メルカスの村の門番に余所者を入れるな、と命令したやつの懐に入るためだ。

さて、どうやって侵入したかというところジョジョ2部に出て来たワムのステルス能力、あるいはf a t eシリーズの騎士王アルトリアが持つエクスカリバーに纏わせている風の剣のように、空気の層を屈折率を変えることで透明化する事が出来る。

と言ってもそんな器用な操作は数秒しか出来ないなので城に入る時だけ限定ではあるが入ってしまえば俺のものだ。

ダンボール被ったあの人みたいにステルス能力を發揮するぜ。

「――」  
声ができる方に音を立てずに進んでいく。

「例の物が完成するのにあと何日かかる？」

「2日・・・見積もって3日。どちらにしろ邪魔はされないでしょう」

「そうか・・・くくく、楽しみだなあ・・・」

「そうそう。結界ですが今夜あたりまた男どもから魔力を徴収せなければなりません」

「チツ、これだからただの屑どもは・・・」

・・・ヤベエ事聞いちゃったぞ。

こんなの必殺仕事人に依頼しなきゃ・・・あ、この世界にいなかったわ。

とうか本当にどうする？

今から評議会に連絡してもいつ来るか不明だし、そもそも何を起こそうとしているんだ？

「取り敢えず・・・情報収集だな。隠密行動はメタ○ギアとアサシン○リードで習った」

## 6 嫌いなものは

「サクラ・アガートラムはいるか？」

午後6時過ぎ、ルチネス家の玄関が開き、低い声色が家の中に響いた。

この日はジョニイについて行かず家で家事をしていたサクラは着ていたエプロンを取り外し、玄関へと向かった。

玄関の前に立つ男は身長2メートルはあるのではないかと錯覚してしまうほどの屈強な男であり、腰には剣が鞘に収められていた。

「何でしようか？」

「長の呼び出しだ。拒否権はない」

「・・・はい？」

サクラは頭が真つ白になった。

この村の長が直々に呼び出し。勿論サクラは何もしてない。村を無断では出たが誰にも気づかれることはなかった。

「何故でしようか？」

「さあな。俺には聞かされてない」

表情一つ変えずにそう言った男は行くぞ、と呟き歩き出し、その後についてサクラも歩き始めた。

ドキドキとサクラの鼓動が大きくなる。

もしかして打ち首にされるんじゃないのか？はたまた拷問!??と悩んでいるとすぐに城についてしまった。

場内は堀池やシャンデリアと取り敢えず高価そうなものがズラリと設置されており一般市民であるサクラの目には余りにも高価過ぎて

居心地が悪くなったがそこは我慢。

「連れてまいりました」

「うむ。下がれ」

何階分の階段を上りきった場所に彼はいた。

「ようこそ我が城へ。私の名はナヘマー」

そのあまりの美しさにサクラは口を開いたままだった。

もしも神様を見たならきつとこんな感じなのだろう、と。

それほどまでに男の容姿は整っており、何も喋れずにいた。

「その驚いた顔は美しいぞサクラ・アガートラム。」

「…何の、話ですか…」

ズズツと頭が朦朧としている時に迫ってきており、気がつくど顎をクイと持ち上げられていた。

「この村で一番の女はお前だったからなあ…一番最初にやらせてやるよ」

「何を言って…!?」

男の美しい顔がドス黒く染まって行く。

サクラの中の警報がうるさく鳴り、逃げようとするがまるで体が固まったように動けなかった。

「ここまでの準備に半年かかった。これからこの村は完全に俺のものとなる！」

開いた片方の手で顔を抑えたナヘマー。

サクラは何がどうなっているか分からなかった。動けと命じても全く動かない自分の体。

真つ白な思考の中で考えれることはきつとこの後ナヘマーにやられるという事実。

「周りには見えない結界を張り！この村の女どもを掌握する魔法道具に魔力を補充するのに半年！その間いつ捕まるかと驚いたもんだがもうこつちのもんだ！」

「うっ…」

腕を引っ張られ、無理やりベットに倒されたサクラ。

恐怖が顔に現れ、体が震える。

それを見たナヘマーがまた笑みを浮かべた。

「いやっ…！」

「ククククハハハハハハ!!!」

「なあにエロ同人みたいな事してんだよゴミ野郎」

声がした。

それはサクラにとってここ最近よく聞く声であり、ナヘマーにとっては聞き覚えがない声。

サクラのポケットから光の玉が浮遊し、そこから音声が発せられていた。

「誰だ!?!」

「誰だと聞かれて答える正義の味方はいねえよ。というかアンタの顔見た事あるぞ? 何だっけ? 「女たらしのクリル」みたいな感じだったな... まあそれはどうでもいいとして——」

「おじやましまあああす!!!」

ドゴンツ!!と壁を吹き飛ばしながら入ってきたのはジョニイ・アルバーンだった。

あの情報収集開始から2日。

クエストの事は一旦中断して俺は城内を調べていた。

その結果分かったことが、この村の長がハーレムしようとしていることだった。

思わず目が点になってしまったがまあ気持ちは分からんでもない。

ハーレムつて一度は憧れるもの。

そしてここからがさらに驚愕。

なんと自分が村の長という暗示をかけ、村の外に出るなという命令。

更に村の男性を使ってハーレムを作る機械の為の魔力を集めたりもう... ゲスだな。

なんか腹が立ったのでそのまま俺が城に乗り込んだ... ということだ。

「貴様ア… 知ったからには覚悟しろ！」

ドタバタと階段から兵士が駆け上がった。きた。

その数およそ100。

だがこの程度ならば――

「行け！ぶつ殺せ！」

「「「オオオオオオ!!」」」

それぞれが武器を構えて突撃してくる。

俺はゆつくりと横に手を伸ばし魔力を集中させる。

「――喚装」

作中にてエルザ・スカーレットが使っていた魔法。別空間にストックしてある武器を取り出す魔法だが俺はその別空間に一つだけしか武器は置いていない。

それこそ第二の特典として貰った神様からの武器であり、俺の唯一の武器。

それが今俺が手に持つ黒い刀だ。

名前はない。ビームは出ない。いつから錯覚していた？みたいなことも出来ない俺の刀。

ただ頑丈だけが取り柄な俺の刀。

本当に神様が作ってくれたかどうかかなり不安だがゴミ共相手ではなんの支障もない。

「知ってるか？」

刀を構え、写輪眼を発動させる。

「ブツ殺す！と心の中で思ったなら、その時既に行動は終わっているんだ。ただし俺の行動だけだな」

ジョジョの名言を言いながら一閃。

殺すつもりはないので逆刃で叩きつける。

5人が吹き飛ぶ。

次々と迫ってくる敵に対しひたすら刀を振り続ける。

最短で最初で最低限に。

「どけえ！俺が行く！」

群の中から出てきたのはサクラを城に連れてきた屈強な男。

腰から剣を引き抜き、筋力で剣を叩きつける。

「刀身変化——双剣」

俺の持つ刀がグニヤリと柔らかくなり、二つに分解されると長さが半分程になった二本の刀。

俺はそれを握り名も知らない男の剣に当たるように素早く交差させた。

「なにい!?!?」

パキンと剣の半ばからスッパリ切られた剣に驚きが隠せない男のガラ空きになった腹に目掛けて強化した足を叩き込み、後ろのやつとぶつける。

左右から敵接近。その場で飛び上がり両足で左右の敵の顎にめり込ませた。

「攻撃が当たらないぞ!?!?」

「どうなっている!?!?」

そう言われると何だか嬉しい。

主人公になつてる気分だ。

「お前ら魔法を使え!」

ナヘマーの言葉にハツとした表情になった敵達は武器を捨ててを前方に構えた。

敵達の手元には炎、水、風と様々な魔法が発射されようとした。

「死ねえ!!」

計41発の魔法。

一般人なら即死だったろう。しかし俺にはこの眼がある。

刀を地面に落とし、指の形を変え簡易魔法術を発動する。

炎には水を、水には雷を、属性に合わせて弱点となる魔法を指先から打ち出すこと41回、空中にはただ魔法がぶつかり合った証拠となる煙だけが漂っていた。

「こいつ全部消しやがった...」

「はっ、師範代の鬼畜メニューの方がまだ楽だ」

落ちた刀を拾い直し刀身変化の魔法を解く。

魔力残量は数値的に29と言ったところ。ナツとの戦闘でほんの

少し魔力が上がったがそれでも充分には戦えないな…

「さあどうする？…まだまだ余力はあるぞ？」

嘘です。結構ピンチです。

ざわつく敵。いいぞ！早く諦めてくれ！後が楽だから！

「逃げるおおおおおおお！！！！」

バタバタと元来た方向に逃げる41人。残り59人は気絶している。

こうやって見てみると俺って何気に凄い事してるなあ…

「残り一人だ… 覚悟は出来てるな？」

「ひい!!?」

ナヘマーあたためクリルは、某ラノベの主人公にて脅されて泣き顔になったオベ○ロンみたいな顔をしていた。

ふと何か思いついたみたいにニヤリとキモい笑みを浮かべるとベツトに投げ出されていたサクラの髪の毛を遠慮なく掴み、腰から出したナイフを喉に当てた。

「こいつを殺されなくなかったから自殺しろ！」

「うわっ、雑魚臭が半端じゃないなお前」

あまりのテンプレ具合に思わず呆れていた。

何？サクラが髪の毛を掴まれてるから早く助けてやれって？

大丈夫大丈夫。すでに布石はうってある。

女の子の髪の毛は大切にしないとね。

「いいのかそんなこと言って!?!?こいつの命は俺が握っているんだぞ！」

「ふーん… やってみろよ」

「言ったなー！ならお望み通り殺して… や… る… !?!?」

クリルの体はピクピクと動くだけで、ナイフは喉に突き刺さろうとしなかった。

いや、喉に当てる以前にサクラではなかったが。

「体が… 動か、ないだとお… !?!?」

「ここに来てお前と目を合わせた時既に幻術にかけておいた。写輪眼には幻術の時間設定も出来るからな。そして…」

「今お前が今掴んでいるサクラはただのそこら辺に落ちてた剣だ」  
写輪眼による幻術は解除するが、肉体拘束は解かない。

クリルは驚きを露わにし、肉体拘束のせいかはたまた恐怖のせいから体が震えていた。

「た、助けてくれ…！」

「おいおいおいおい。こんな事やって今更命乞いか？この村の女の子全員とやろうとしたのにか？」

「宝をくれてやる！だから助ける！」

「…そんなの後でパクってやるから心配すんな」

何せ依頼を途中放棄し、これである。

来月の家賃分は頂く。

「分かった！お前にもやらさせてやる！それでどうだ！？」

「…俺の嫌いなことを教えてやろう」

あまりの話の変わりようにクリルは目をポカーンとさせた。

「3位から1位までだ。よく耳を澄まして聞きやがれ」

クリルから5メートル程距離を置く。

「3位。リア充。これは俺の前世から変わらないこと」

「2位。チャライ男。特にお前みたいなやつだ。どうせお前日頃からチャラチャラしてただろ？」

「そして1位は——」

残った魔力を総動員させラビットステップ、全身強化、刀身変化——  
籠手、の3つを発動させた。

音じみた速さでクリルに接近し、思いつきり拳を振りかざす。

「テメエみたいなやつがサクラみたいなの女の子に手を出す事だあ

ああああアアアア!!」

顔面に拳を叩き込み、地面に叩きつける。

木造建築であるこの城が勿論耐えられる訳はなく、城の一番上の階から地下室まで落ちて行つた。

そして何かの偶然かクリルは見事ハーレム装置なるものに直撃し、使い物にならなくしていた。

「ジョジョ風に言わせてもらおうと…アリーヴエデルチー！」

そしてこのジョニイ君はクールに去るぜ…宝をパクった後に。

「アルサーン…」

「はっ!? 忘れてた!」

あの子の話だ。

実はあの城の中にはもう一つの装置があり、それが魔法に関する事を忘れさせるというものだった。魔道士や魔法という存在は知っていても自分には使えないという暗示だ。

この魔法の影響を感じたルチネスさんは咄嗟に契約していたプルーを召喚し、何処かのギルドへの救助の紙を持たせたが畏に引つかかって失敗し、そのプルーを俺が持ち帰ったという事だった。

「もう行かれるのですか」

「ええ、あんまり長居しちゃうと居心地が良くて帰れなくなりますしね。それに…」

城をぶつ壊した翌日、俺が持ってきた荷物とは別に風呂敷に入れるだけぶちこんだ城からパクった金銀財宝。

「見つかったら困りますしね」

「ほっほほ、顔に似合わず結構悪いことするのお」

「金に飢えてますから!」

会心のドヤ顔である。

流石に金なしで帰るのは辛い。

評議員が来るのにあと数分、その間にさっさとこの村を出て宝を売る!

完璧な計画だ…！

これは某 夜〇月も驚きだ！

「あ、俺が城ぶっ壊したこと内緒でお願いしますね」

「勿論じゃ。ワシは何も出来んかったし、ワシとサクラ以外城がぶっ壊れた事以外知らんからの」

ハツハツハツと大笑いするルチネスさん。

なんていい人なんだ。

「ところでサクラは何処に行ったんですか？

まだ見てないんですけど…」

「さあの、ワシも見ておらん」

「プーン…」

その時丁度俺とルチネスさんの間に入ってきたプルー。

何だと思ったら俺のズボンを掴み、よちよちと登り俺の頭の上に乗ってきた。

「プーン」

「お、おいおい…」

「ニコラスが懐いとるな。そうじゃ。ワシからの報酬といっちゃあ何だがニコラスを貰ってくれねえか？」

「はい!? いやいや無理ですよ！」

そんなポケモ〇みたいなノリで話されても困る。ルチネスさんとニコラスの付き合いは長いはずだ。それを俺が貰うなんて…

「ワシはあと数年したらくたばる身じゃ。それなら新しいパートナーに出会ってくれる方が嬉しい」

「ルチネスさん…」

「プーン…」

ルチネスさんは大事に首に巻いてあるネックレスからプルーの鍵を取り、俺の手に握らせた。

「あんたはいい人間だ。だからこそ託す」

「…はい。ではありがたく頂戴いたします！」

託された鍵を大事に握る。

丁度外がザワザワしてきた。評議員が来たのだろう。

「それではありがとうございました！また会いましょう！」  
「プーン」

……

「間に合ったー！」  
「プーン」

まさか駅で弁当選んでいる間に汽車が出ようとしていたなんて結構危なかった。

ラビットステップにマジで感謝。

でもおかげでここ限定のカツサンドを買うことが出来た。

プルー・・・というかニコラス(?)にはRAVE同様飴である。

しかし何と呼べばいいのか・・・ニコラスって呼んだ方がいいのか？

「まあ帰ってから決めよ」

「プーン」

飴を食いながら返事をするプルー。

プルーは既にルーシイがつけてるからダメだよな。

「しかしこの宝で10年は持つんじゃないか？」

明日からご飯豪華にしよう」

取り敢えず肉。高いやつ。

それをキロで買って一人で食べる。

「へえ、いいですね。あ、勿論私にもくださいよ？」

「いやいや、これは俺一人で・・・は？」

あまりにも自然に会話に加わったので数秒気づかなかったが、顔を上げてみるとそこには最初からそこにいましたと言わんばかりの顔をするサクラの姿。

呑気にカツサンド食ってやがる。

「サク・・・ラ？」

「あ、カツサンド貰いましたよ」

「テメエ!? 何人のカツサンド食ってんの!!??」

「いやあ、そこに「私を食べて」ってカツサンドがいて仕方なく」

「嘘つけ！可愛い顔なら何しても許されると思うなよ！というか何故ここにいる!?!」

ゴクンとカツサンドを飲み込みキリツとした顔で一言。

「弟子にしてください!」

「何いってんだお前?」

一難去ってまた一難。

俺はただのモブキャラ的な立ち位置なのに何でこんな面倒なことになってるんだ?

## 7 師弟関係とは

月夜に照らされた城の一室。

100余りの敵に対するは一人の魔道士。

いくら有名なギルドと呼ばれる妖精の尻尾の魔術師でも負けてしまふのでは？と思つた。

しかし魔道士は片手一本にぶら下げた刀を自由自在に、それこそ手の延長のように操つてみせた。

技の一つ使うことなく、ただ無骨に、勝利するために、最短で最小を持つて最大の攻撃をする姿はさながら武神のようだった。

サクラはその姿に見惚れてしまった。

良くも悪くもそれは恋ではない。

こういう風になりたいという憧れになっていたのだ。

「というのが経緯です」

「いやいや、なんか俺が武神みたいとか言ってるけどさ、それ言ったら俺の師匠どうなの？超武神になっちゃうじゃん」

メルカスの村から無事にマグノリアに到着したのはいいがサクラが飼い主についてくる犬みたいに俺についてきた。

しかも荷物もちゃんと持つて。

何だよ、いきなり原作とちがってくるじゃあないかあ…

俺はただ死ななかつたらそれでいいのに何で弟子にしてください！とかラノベみたいなきっかけで起きてるんだよ。

「というか俺に弟子にしてください！って頼むなら別の所いけよ。そっちの方がまだいいぞ？」

「いえー私はアルさんの剣に憧れたんで！」

もう何だよこの子お… 超純粋じゃん…

断るに断れないよお… いや、ここはビシッと断らなくては。

それが漢というやつだ。あ、今のエルフマンみたいだったな。

「帰れって言っても?」

「帰りません!」

「カツサンドやるから帰れって言っても?」

「帰りませ… やつぱり考えます」

「そこは帰りませんと言え」

この子もしかしたらアホの子なんじゃないか?

「なっ!?アホじゃありませんよ!」

あ、声出てた。

「この私は天才無敵の——」

「おいおい、天才で無敵なやつが変態に拘束されるのか?」

「んなあ!?そこを言うとは何と卑怯な!」

やつぱりこの子アホの子だったわ。

「そもそもあれは仕方なく付いて行ってやっただけです。このサクラ

さん——」

「はいはい。凄い凄い」

適当に流しながら歩くこと10分。

我がギルドである妖精の尻尾に到着した。

「おお!凄いです!これが本物の妖精の尻尾…!」

「感心するのはいいけどそのドアから離れろよ」

ギルドの入り口のドアで立つサクラを後ろに行かせ、俺が前に立つ。

今までの経験上だが何となく嫌な予感がするのだ。

「漢おおおお!!!」

予感的中。エルフマンがドアを弾き飛ばしながら俺に向かって突撃してきた。

あらかじめ体制に入っていた背負い投げをエルフマンの飛んでくるスピードに合わせてぶん投げる。ドオンと音を立ててエルフマン白目を剥いた。

「ただいまー」

「アルさん!?この人白目むいてますよ!?」

「大丈夫大丈夫。その内生き返るから」

何だかこれが普通みたいに思えてきたな…よくよく考えたら突撃したのは向こうだけで背負い投げでカウンターって普通じゃないわ。

「あら、おかえりなさい。初クエストはどうだったかしら？」

ニコニコと笑みを浮かべながら頭にビンの破片が突き刺さったミラさん。

この人ビンに愛されてるんじゃないのか…？

「犬連れて帰りました。2匹。あとビンの破片刺さってます。

「プーン」

「私も犬扱いですか!?？」

プルーは犬、そしてサクラも犬。

プルーとサクラ、どっちが犬？と聞かれたら多分サクラの方が犬。

「確かあなたが受けたの討伐クエストだったはずんだけど…」

「それが…色々あつて今に至るわけです」

「そうなのね。所で隣の女の子は誰？」

「わ、私はサクラ・アガートラムです！妖精の尻尾に入れてもらいたくて来ました！」

腰を90度曲げほぼ謝罪に近いサクラ。

そんな姿を見てミラさんはクスリと笑った。

可愛い。

「分かったわ。取り敢えずテーブルに来てくれるかしら？」

「り、了解です…！」

凍えた犬みいだ。

「どうしましょう!?？勢いで言ってしまったんですけど首とか斬られませんかよね!?？」

「斬られるか！」

挨拶しただけで首斬られるとか残酷すぎだろ。

ロボット歩きみたいにぎこちない動きでテーブルについたサクラだが体の震えは止まっていない。プルーかな？あ、よく考えたらプルーの名前考えないと。

「はい、手を出して」

「?こうですか...」

ミラさんのギルドマークをつけるハンコが何なのか気づかず手を出したサクラ。

その手のひらにポンとハンコを軽く押すと桜色の模様が浮かび上がった。

「おお、おおお...!」

「プーン...」

「お前も押して欲しいのか?」

「プーン」

コクコクと頷くプルー。

しかし仮に押すにしても今使ったハンコじやデカイよなあ...

「小さいタイプもあるのよ?」

「プーン、プーン...!」

ピョンピョン跳ねるプルー。

そんなプルーにミラさんは、人間で言うところの手のひらにポンと。

「プーン!」

「良かったな」

「これで私も...!」

サクラとプルーも大喜びで何より。

「そういえばさつきマスターに聞いたのだけどメルカスの村にある城が両断されたって」

「ヘエソウナンダア」

評議員の仕事早すぎィ!

「さあ!私に教えてください!」

昼過ぎである。

ミラさんに聞いたところナツとルーシイは初の夫婦作業(?)のクエストに行っていた。

詳細までは覚えてないがマカオ(?)の父親を探しに行く... だったはず。

まあ俺には関係ないので売っぱらった宝を金にして一週間分の飯を買ってグダグダしようと思っていたらサクラが寄り道するとか言ってこの段落の冒頭に戻るわけだ。

「あのな... 教えて! って言ってるけど何を教えたらいいんだ? 料理か?」

「女子力を鍛えたいわけではありません! 私に魔法やら必殺技を教えてください!」

「...」

なんてわがままなやつなんだろうか... 俺が師範代だったら首を跳ね飛ばされてるな。

ついでだが俺の師範代はクソがつくほど厳しい。練習が只の殺し合いに等しいぐらいかな?」

「俺の使う魔法は店で売ってる。それ買え」

「剣は!? 必殺技は!?」

「ない」

「いやいや、流派には必ず技があるじゃないですか。アマカケルリユウノヒラメキとか...」

「そりゃ他作品だ。やめなさい。いいか? 俺の流派はだな...」

俺の通っていた道場の名前は<無流>。「なしりゆう」と呼ぶのではなく「むりゆう」と呼ぶ。

俺の住んでいた町の端の方にあり、寂れて人も俺と師範代以外いなかった。初期のイナ○レ感が半端ではなかった。

そんな俺の流派だがこの世界で生き残ると誓った俺はオンボロ道場に入門することに決めた... のだがやばかった。

まずは筋肉をつけるためジャツ○ー・チエンも思わず白眼になってしまうほどの筋トレ。

出来なかつたら竹刀でしばかれた。

そして次は身体を鍛えるため柔軟、格闘と言った動きをし、剣を握ったのは3年目だったか…。今思い出したら死ぬかと思った。

それほどキツイ俺の道場だが他の道場にあつて、俺の道場にはないものがあつた。

それは「技」だ。

さつきサクラも言った通り某侍漫画では天翔龍閃やら龍翔閃と言った技があるが、俺の道場にはそんなものない。

師範代曰く「技というものは己が望み、己がにいかにか合うようにするもの。今に至るまでの技を模範したところでそれは自分が生み出した技ではない。だから一瞬の隙が生まれる。だいたい必殺技とやらがあるが必ず殺すと書いて必殺技だというのに殺せなくてどうする?」との事。正直俺には意味分からんがつまりのところ俺は技は持っていない。

そのため俺は馬鹿みたいに剣を振るうことしか出来ない。

「ということだ。分かったか犬?」

「犬じゃありません!」

「つてことだ。天翔龍閃やりたかったら一人で頑張りな」

正直教えるのはダルいので適当に無視して帰ろうと思つたがいつの間にかサクラが俺の目の前に。

「それでも!それでもいいので教えてください!」

「ええー…つていうか今思つたんだがお前家どうすんだよ?金持つてないだろ?」

「泊めさせてもらいます!」

「おい」

「だから教えてください!」

「だから、の使い方もう一回学んでこい」

右に左に俺が行こうとするがサクラがそれを行かせない。  
どうしようかと考えた時、ふと俺の脳内に閃きが生まれた。

「分かった。弟子にしてやろう」

「本当ですか?!?!」

「ただし——」

風魔法を発動させ、小さな竜巻を手の上に作り上げ、それを地面に投げる。

竜巻は放射状に拡散し落ちていた木の葉を舞いあげ俺の後ろにドツサリと積もった。

ついでにそこら辺に落ちていた木の棒も回収し、サクラに渡す。

「落ちてくる木の葉を一枚も落とさず、斬ればの話だけだな」

「なっ!?!」

「はっはは、では頑張りたまえ」

ついでにこの修行法。

俺が道場に行き、初めて剣を握った後の最初の練習であり、クリアするのにおよそ半年かかった。

## 8 のんびりからの急落下

サクラの修行開始から早1週間。

とつくにナツたちは帰ってきているが、修行は終わらず俺は今日も空に浮かんでいる雲の数を数えている。

「はっ、せいっ!」

いいね、いいねえ。年頃の女の子が頑張るのは。何故か知らないけどラ○ライブ思い出したよ。

一話とかあんな感じだったわ。

あ、落ちた。

「はいやり直し!」

「ああああ!!」

バターンと地面に倒れこむサクラ。

1000枚中300枚ぐらいは叩き落とせれてるような気がするがそれでも300なのだ。

俺もかつて絶望した。

分かる分かる。

「これ本当に出来るものなんですか!?!?」

「出来る。だって俺が出来たんだもの」

前世では折り紙の鶴も折れなかった不器用の極みである俺が出来たのだ。

つまり根性でどうにでもなる。

「アルさんも確か今私がやっているのと同じ事やったんですよ?その時何かきつかけみたいなのありましたか?」

「どうかな...俺は馬鹿みたいに回数やって動きを覚えたからなきっかけはなかったんじゃないか?」

「そうですね...仕方ありません。こうなれば根性です!」

まあその時の練習で写輪眼が開眼したこともあったがそれを言うどズルとか言われそうだしな。

「そうか。がんばー」

「むっ、ちゃんと応援してくださいよ」

「頑張れー。期待してるー」

俺の風魔法で小さな竜巻を起こし木の葉を舞いあげ、少し離れたところにいるサクラの所に落ちる。

ちなみにこの魔法は俺の魔力を三分の一ほど削って使っているので持続力がかなり長かったりする。

一回発動してしまうと3時間は消えない。そして3時間もあれば俺の魔力が元通りになるので実際には消えない竜巻なのだ。

「とおーせいっ！やあー！」

しかしサクラは筋がいい。

メルカスの村でも隠密行動とか上手かったし元からそういう才能があつたのかもしれない。

正直な所サクラが俺を抜くのは時間の問題なのかもしれない。あいつガチな方で天才剣士になるかも。。。怖い。

「しかし次の話って呪いの笛みたいな話か。。。ってことはエルザ登場か」

エルザ・スカーレット。

妖精女王（ティターニア）の異名を持つ、妖精の尻尾最強の女魔道士。

戦闘スタイルは俺がナハマー（笑）と戦った時に用いた換装と呼ばれる、別空間にある鎧や剣を取り出す魔法を得意としている。

貯蔵している数が無限じゃない「無〇の剣製」みたいなの？

「ま、俺が行くわけじゃないし暫くのんびりしとこう」

「プーン」

今更ではあるがプルー（仮名）はサクラがメルと名付けた。

由来はメルカスの村から。

「プーンプーン」

「何だ？お前もやれよって言いたげな顔だな」

「プーン」

コクコクと頷くメル。

やなこった。俺は寝ると決めた。

「雲ひとつない青空。そよ風（俺が作り出した竜巻の余波）もいい感じ。」

絶好の昼寝日和である。

そして俺は今眠いのだ。

「映画 酔○でも師匠寝てただろお・・・」

誰にも分かりっこないことをいい目を閉じる。

すぐに眠気は俺の脳の活動を停止させ夢の中にダイブさせた。

「プーン」

「むう・・・ 何だよ」

メルに体を揺さぶられ強制的に起こされてしまった。空の色はまだ青く一時間も経ってはいないだろう。

風魔法が解けるには早いし、何だと思いい顔を上げてみると目の前にはデケエ胸があった。

「これが天国か」

「えっ？何？」

「いや、何でもない」

乳から顔を上げるとルーシイがいた。

まあ何となくデケエ胸でルーシイだな、とは思っていたが・・・。しかしデケエな。

「んで？何の用だ？」

「あ、うん。急で悪いんだけど明日って暇？」

「明日？明日はフリーだな」

ルーシイがパンツと某錬金術漫画みたいに手を合わせて俺に頭を下げた。

「クエスト着いてきて！」

「・・・取り敢えず理由教えてもらっても？」

「あ、早とちりだったわね。そう、あれは・・・」

説明が面倒なので簡単に説明するとルーシイが俺にお願いしたのはエルザ初登場であるララバイ(?)編のクエストだ。

理由その1. ルーシイ一人じゃあの二人(ナツとグレイ)を落ち着かせることが出来るわけがない。

その2. 単純に強い。ヘルプ  
その3.

エルザ「何?ファイオーレ格闘大会の優勝者だと?それは頼りになる。連れてこい」と

以上3つが理由。

というか俺の知らない所でエルザにターゲットにされてるんだけど。更に言うと俺とルーシイでもナツとグレイを抑えられるわけない!

エルザ一人で充分だろ!!

俺はのんびりしてたいんだ!

後加えて言うがマカオ(?)のクエストからまだ2日しか経ってねえだろ!早いわ!!

と言うのが俺の文句である。

しかしここはジェントル→マアン←な俺はそんな事は言わないのだ。

「と言う事なんだけど...」

「妖精女王がいるんだろ?俺絶対いらねえだろ...あと俺サクラの修行見なきゃいけないし」

「見てるだけじゃない」

まあその通りではあるが...

「いやいや、俺には酸素を取り入れ、二酸化炭素を排出する作業があつてだな...」

「ただの呼吸じゃない!」

チツ、バレたか。

しかし何て言って乗り切ろうか...だって俺いなくてもバーサーカーみたいな3人でララバイぶっ飛ばしてたじゃないか。

俺が行ったところで市販の魔法弾を撃つのと、近所の店で買った少し頑丈の刀を振り回すしか能がないのだ。

「ルーシィ、考えてみる。ナツ、グレイ、エルザ：。無敵じゃないか」  
「確かにそう見えるけどさ：。あ、そうだ。これ預かり物」

はい、と手渡されて反射的に受け取ってしまう。

このような展開を俺は知っているぞ。

あれだ、中にめっちゃ怖い事書かれてるやつだよな。

「誰から？」

「エルザから」

「返す」

「見なさいよー」

エルザってだけで凄く嫌。

テストの返却より嫌だ。

しかし現実と言うのは非情である。

俺は仕方なく開けた。

「……」

「……」

「………行きます」

「何があったの!?？」

その日の晩、俺はサクラと飯を食っていた。

勘違いされないように言っておくが同居ではない。俺の部屋の真正面の部屋に住んでいる。

サクラの家賃も俺が払っている。ヤバい。俺優しい。

サクラは同居でいいと言ったが絶対嫌だった。

いや可愛いんだよ？可愛いけど家にいたら俺絶対ルパンダイブす

る自信があるもん。

何？主人公だろって言いだけな顔だな。

残念ながら俺はモブ役だ。

故に漫画の主人公のように純粹ではない。というか汚れまくっている。

とまあ俺の痴態はこれまでとして話に戻ろう。

「サクラ、俺は明日クエストに行くから大人しくしとけよ」

「犬ですか私は…」

ハムツと自然なのかそれともわざとなのか知らないが可愛い食い方をするサクラ。

ちなみに今日の夕食はシチューである。

メルも少量ではあるが食べている。

「二日で終わるクエストですか？」

「どうだったかな…確か…」

脳内でララバイ編のクエストを思い出す。

ナツが上昇気流でパワーアップしたり、ララバイとの戦いで見開き1ページ使ったような記憶はある。

「多分一日だな… ああでも帰りは遅くなる」

今思い出したが確かララバイ倒した時周囲の被害が凄かった筈である。

くそつ、ちゃんと原作見とけばよかったな。

「それじゃあ明日は私も休みですね」

「そうだな… 出来れば毎日やって貰ったほうがいいけどな…」

流石に一日継続する竜巻を作り出すことは出来ない。

いや、出来ないことはない。

とっておきを使えば簡単に出来るのだが、それは使わざるを得ない時にだけ使用すると決めた。流石に修行で使うのは勿体なさすぎる。

「代わりに逆立ちで街300周でもしてたらどうだ？」

「私を殺すつもりですか」

「おいおい、かの有名なロツ○・リーだってやってたことじゃないか。私も付いて行ったらダメですかね？」

「ダメだ。今回は特にダメ」

何せララバイが関わってくるのだ。

失敗することはないだろうが死が関わってくる。

サクラはまだ未熟。ポケモンで例えるならムツクルぐらいなのだ。

「大人しくメルと留守番しとけ」

「ブーン」

「・・・」

終始口を膨らませたままのサクラ。

それを無視して俺はシチューを食べるのであった。



何でこいつら出会い頭から喧嘩してんだよ…。

喧嘩するほど仲がいい、というのはこの事なのか。

「だいたいエルザ一人で充分だろーが！」

「知るかそんなもん！」

うるせえ…！

朝から元氣過ぎるだろ。

「ほらルーシィ、お前の出番だぞ」

「えっ!? 私!? ええと… あ、エルザさん！」

「俺たち超友達!!」

よく効くなあ…

「すまない、待たせたか？」

と思ったその時バカみたいな量の荷物を荷台で運んでいる妖精女王ことエルザ。

まだ初期の方なので鎧は着ている… が！超美人だ。

ルーシィがご丁寧に挨拶してるうちに何というか考えなければ…

そうだな… 「結婚してください」とかどうかな？

アウトや。

ああこんなことしてる間に俺の番があ！

「そして君が…」

「はいっ！ ジョニー・アルバードです！ 年齢17歳！ 独身です！」

しまったああああ!!

独身ですって！ そりゃ18にもなつてねえから結婚も出来ねえだ

ろ！ 俺の馬鹿！

「最後いる？」

「エルザへの求婚？」

「おい青猫！ 変なことは言わないでくれ！」

ズビシィーと音になるほどのスピードでハッピーに指をさした。

「ふむ… まあ考えておこう」

「考えなくていいんですよ？」

何でナツといいグレイ、そしてエルザにまでツツコミを入れなきやならないんだ。

ルーシイの気持ちが変わった気がする。

「ジョニー・アルバード。お前の名前は聞いているぞ。丁度お前が出た大会を見ていたからな」

「こ、光栄です…」

「今回は危険な橋を渡るかもしれないから頼りにしてるぞ」

「え？危険な橋って聞こえたんだけど」

とまあナツがエルザに帰ったら俺とデュエルしろ！といい汽車に揺られる。4人1組の席なので俺は1人別席で座っている。

悲しい。あ、ナツがエルザに無言の腹パンされた。きつとあのパンチはユー○よりも強力なはずだ。

ちなみに無言の腹パンが何なのか知らない人なWEBで！

「はあ…」

しかし暇だ。

というわけで寝る。

原作あんまり覚えてないけど何とかなるだろ…

「キーツク」

ボコつという音と共に俺は目覚めた。

変な体勢で寝てたせいか妙に首が痛い。

首の骨をパキパキと鳴らして、隣を見てみるとナツが蹴りを喰らっていた。

…なあにこれえ？

何で起きたらこんな事になってんだよ！

エルザは!?？グレイは!?？ルーシイは何処に行った!?？

まあ蹴りいれてる時点で敵だよな…

「おいおいシカトは闇ギルド差別だよ？」

「——おい」

あ？と言つて振り返つた男の腹に強化した拳を叩きつけた。拳を捻りながら当てて、すぐ引く。これが殴る時のポイントだ。

「つてめえ！お前もハエの——」

「ナツ、やるよ」

名前も知らない男の服の袖を掴みナツの方に投げる。

地面をバウンドした先にいるのは鬼のような顔をしたナツ。

今は汽車は止まっている。なら——

「さっきのお返しだア!!」

火炎を纏つた拳が男に直撃した。

再びバウンドして俺とナツの間で転がる男。

「なあ、ナツ。これはどういうことなんだ？」

「知らん！けどこいつはギルドを馬鹿にしやがった！」

「なるほどな……」

『先程の急停車は誤報によるものだと確認出来ました。間も無く発車します』

「マズ…… ジョニー！後は任せたぞ！」

「何が起きてるかよく知らんが任された」

汽車から飛び降りたナツ。

異常なまでの乗り物酔いだから仕方ないのだろう。

「ハエがあ……！」

「取り敢えずこの状況を何とかしないと……」

写輪眼を発動させる。

汽車の中は非常に狭い…… 神様からもらつた刀を使うには流石に狭すぎるし…… となると

「拳、一択だな」

まあ刀身変化で籠手にするけども。

換装で刀を取り出し刀身変化を発動させ両腕に擬似的な籠手を取り付ける。

籠手になろうとも異常な硬さを保つたため攻撃、防御においてもかなり便利である。

「さあ来い。お前が馬鹿にしているハエが今からボッコボコにしてやるからよ」

「ほぎけハエがあ!!」

男の影が鋭利な刃として伸びてきた。

写輪眼で影に魔力の変化がすでに見えたのでそれを難なく回避し一度距離を取る。

「影を操る魔法か… 何だかシカ〇ルっぽいな」

「誰だよ〇カマルって!」

シカマ〇はシカマルだつて。

と言つても影縛りや影真似ではないが… どうやって戦つたものか。

「ん? いや待てよ…」

よくよく考えれば幻術にかけてしまえばお終いだよな…?

「んん…」

どうするか… 俺としては幻術かけて終わらせたいところだがそんな事をすればララバイ編が即終了してしまう。

やっぱり2, 3話はしなければな… という事で。

「よし、直接相手にしてやろう。無の極みとかいう結構厨二な二つ名の俺の拳は痛いぞ?」

「調子に乗るな!」

影が伸び汽車の天井や座席を伝って俺の元に伸びてくる。

伸びてきた影を籠手をつけた手で殴りつけ弾く。

弾けないものは体をそらし躲す。

気づかれないように後ろから来ていた影も難なく躲す。

「クソツ! 何で当たらない!?」

「目が特別製でな!」

汽車の中での影の攻撃は非常に見えづらくなる。座席の下や、天井、影を細く先行させれば捉えにくい。

が、こちらは写輪眼。影に魔力が通っているため難なく分かる。

「こんな! 魔法使えるならさ! 正規のギルドに入ればよかつたのにな!」

「正規のゴミギルドになんか入れるか！」

それが男の琴線だったのか、青筋を立てて影を密集させた。

よって集まり絡まって作られたのは8体の蛇。八岐大蛇というやつだろう。

「死ねえ!!」

8体の大蛇が同時に攻めて来る。

「刀身変化——双剣」

籠手がグニヤリと曲がり手のひらに二本の刀が収まった。

激突まで残り0.5秒。

「——ラビットステップ」

シユルリと腕全体に風の力を宿らせ、身体強化でさらに腕を強化。全ての工程が終了し、刀を振るう。

空中に8つの斬撃を残し、大蛇の首は全て落ちた。

何席か破壊をしてしまったがこれは仕方がないと納得する。

「馬鹿な……いつの間に……！」

「さあどうする？もう一度向かってくるか？」

「クソツ……！」

男の視線がふと右下に動いた。

それにつられて俺も見てみると鞆の中にドクロが先端についた楽器。

つまりゼレフが生み出した呪殺魔法ララバイであった。

「う、おえ……！」

それを見て吐き気がする。

ゼレフが生み出した呪いのせいなのか、見るだけで吐き気がする。写輪眼のせいでララバイの呪いがハッキリと見えてしまうのだ。

思わず床に手をついてしまう。

その隙を狙ってか男が鞆を抱えて前の車両に移った。

「待てっ……おrrrr」

俺の胃からキラキラした何かが溢れ出した。

ララバイヤバイ。今の絵面だとかのお祭り男の牛乳祭りの再現ではないか。

ゲロを吐いてしまった俺は立ち上がり追いかけようとしたがガン！と言う音と共に俺の乗ってる車両が失速し始めた。

「あいつ車両を切り離しやがった…！」

既に身体強化して、ラビットステップを発動してのジャンプでは追いつかない程の距離。

どうするか迷っていた時クラクションの音が響いた。

「ジョニーー!!こっちだー！」

魔導四輪をエンジン全開で運転するエルザ。

その後部座席ではグレイが俺に大きく手を振っているが…

——それ4人乗りだろ！

「ああークソツッ！着地任せたぞー！」

身体強化した足で大空に飛び上がる。

軌道よし、角度よし、風向よし。

「おりゃあー！」

スポンツ！と音がなってもいいほど綺麗にシュートインした。流石俺。

というか着地任せたぞとか言ってたけど必要なかったな。

「んで、何処に向かっているんだ？」

「駅よ！あいつら駅でララバイを放送するつもりよ！あつ、ララバイって言うのは——」

「知ってる知ってる。あれだろ？ピーピー吹いたら人殺すやつ」

「めちやくちや雑な説明だな」

でもあつてるだろ!?とツツコミを入れルーシイの説明を聞いた。簡単にまとめると

1. ララバイ盗んだのは闇ギルドである鉄の森

2. 駅でララバイ流して大量殺人

だ、そうだ。原作があやふやなので言い切れないが何か他の目的があつたようななかったような…

「どうしたんだそんな深刻そうな顔してよ」

「いや… 奴等の目的を考えたんだが… あいつらって何のために大量殺人するんだ？」

「それは… 流した後にお宝を盗んだりするんじゃない?」

「闇ギルドだったらそんな面倒な事はせず直に盗むと思うんだが…」

何だったかなあ… ま、原作54巻まで出てるから特に俺が何もしなくてもクエストクリアだろう! 多分!

## 10 トラップ

「おい！中の様子はどうなっている！」

「えっ!?？誰だ貴さ——」

ドゴンツ―と警備班の人にエルザのヘッドバット。

「見るルーシイ。あれがS級の魔道士だぜ」

「・・・凄いわね。逆に」

ちなみにエルザのヘッドバット数は既に10を越した。

石頭過ぎ・・・。

「ふむ、面倒だな。手っ取り早く中に入るか」

「ヘッドバットの意味・・・」

「黙ってた方がいいぞジョニイ。お前までやられるぞ」

グレイの忠告を素直に受け取り今度から胸の中でツツコミを入れようと思った。

ということがあり駅の中に無断で乗り込むと気絶した警備班数十人。

その奥には鉄の森とかいう闇ギルドの魔道士sが・・・

「ハエがご到着か。随分と遅かったじゃねえか」

「何だあのキモい面してキモい鎌持った男は？」

「自重しろ！」

俺の言葉にルーシイがツツコミを入れた。

いやだって事実だし・・・ 漫画の初期に出てくる悪役そのものじゃないか。

「いやルーシイ、ジョニイの言う通りだ。俺たちのギルドをハエ呼ばわりしたナルシスト野郎にはそのぐらいが丁度いい」

「同感だな」

珍しくナツの言葉にグレイはうんうんと頷いた。

あんまりにも悪口言ってるせいとか向こうの親方みたいなのがひたいに青筋を立てた。

「貴様らア…！」

「おいお前ら！このハエ共の相手しとけ！」

「親方みたいなやつは駅に開いた穴から風魔法を使って外に抜け出して行く。」

「… あいつ風魔法の使い方上手じゃないか…」

「ちよつと羨ましいじゃないか！」

「ナツとグレイは奴を追え！」

「俺は？」

「手伝ってもらおう」

「いや絶対俺いらねえだろ。」

「と思うが愚痴をこぼすとヘッドバットなので素直に空間から刀を取り出す。」

「写輪眼を発動させ、身体強化で両足にだけ強化をかける。」

「無の極みと呼ばれたお前の剣技、ここで見せてもらうぞ？」

「そんな過大評価されても困るっていうか——よつと」

「音もなく背後から攻撃を仕掛けて来た男の顎に刀の逆刃で叩きつける。」

「それが合図のように総勢100を超える魔道士が俺たち2人に向かって突撃して来た。」

「エルザみたいにロングスピアとか斧とか使えれば楽だが、俺は硬い刀一本！」

「それをただひたすらに振り回す！」

「この2人… バケモノだ！」

「おいおい、俺は至って一般人だぞ。」

「逆刃で叩きつける。」

「蹴って、殴り、いなし、躲し、逸らし、払い、防御する。」

「絶え間なく動き続ける俺の体はダンスをしているかのようなだった。」

「伏せろ!!」

「戦場の中でも凜と響く声。」

「ほとんど反射でその場に伏せると俺の真上に円状に並んだ剣が通り過ぎた。」

出た！サークルソード！

内心で叫びながらまた刀を振るう。

俺が40人ほど倒したところで敵魔道士は全員床に伏していた。俺が40、エルザが60人……修行不足だなと思う。

「私の勝ちだ」

「ああ……そして私の敗北だ」

「え？勝負してたの？」

某エ○ヤと衛○の戦闘後の会話みたいなことをして一先ず終了。はつきり言ってしまうばかり楽しかった。

流石エルザ。絶対喧嘩したくない。

「さて、こいつらから情報を聞き出さないと」

「あ、それなら俺が……」

一番近くに倒れていたヤツの目を開かせ写輪眼で幻術をかける。写輪眼の幻術には相手の記憶を見ることが可能なのである。

ついでに加えると相手の技をコピーすることが出来る。

「さて、と……」

記憶を探る。

最初に移ったのはギルドだろうか？

俺が幻術にかけてた男が座るテーブルに2人も腰掛ける。

『お前この戦いが終わった後どうするんだ？』

『俺……この戦いが終わったらアイツと結婚するんだ』

『そりゃよかったじゃねえか！』

『『ハハハハハ!!』』

……なんだかごめんって言いたくなるな。

大体そんな死亡フラグじみたこと言うなよ！

「俺は何もしら——」

「フンッ！」

振り返るとドゴ！つと言う音と共にエルザのヘッドバットが炸裂していた。

写輪眼よりヘッドバットの方が手早くすみそうだな。

「どいっつー」

「いや、ダメだな…幹部レベルにならないと伝えられないのか…？」

「どうやらその通りだな」

カツカツと歩いてくるエルザの手にはほぼ瀕死状態の敵。

幹部だったのか、他の魔道士より手荒に情報を聞き出されたみたいだ。

南無三。

「た、たしゆけて…このおん、な…ばけ…も、の…」

カクンと、電池の切れたロボットのようになんて男は気を失った。

「…」

「む？どうした2人とも」

「なんでもないっす」

「私も」

取り敢えず俺は瀕死した男が生きていることを願った。

色々あつて外に出ようとしたら竜巻は駅周辺に竜巻が現れたり、その竜巻を解除しようとして魔法解読にたけたカゲムネをリンチし解かせようとしたが案の定カゲムネが仲間に背中から刺された。

致命傷ではないが当分は気絶しているだろう。

「さて…この竜巻をどうするかだな」

「ジョニイって風魔法得意よね？突破出来ないの？」

「無理無理、俺の風魔法は対人用が多いからな…悔しいけどこんな高等魔法は使えない」

ついでにこの駅周辺に起きてる竜巻、俺がサクラの訓練用に使用した竜巻のおよそ100倍以上の魔力消費量である。

つまりこれぐらいの竜巻を俺が起こそうとしたら死ぬ。

「魔力量から見て竜巻が消えるのはざっと5時間後だ」

「そんなチンタラしてられるか！こうなりや気合いで——」

「よせ馬鹿者。そんな事をしても怪我をするだけだ」

原作だとどうやって突破したのだったか…

思い出せんな。

「地面をぶつ壊されたなら穴掘って向こうまで行けるんだけどな」

「ああ！思い出した！」

「何よ？」

グレイの言葉にハッピーが何か思い出したのか背負っていた鞆の中をゴソゴソと漁り始めた。

中から出したのは金色に光る鍵、世界に12本しかない王道12門の屋霊の1つ。

ここまで来てようやく俺は脱出方法を思い出していた。

「急ぐぞー！」

ナツは先に空を飛んでエリゴール？を追いかけに行つた。

魔導四輪を拝借と言う名の盗みを行いいざエリゴールのもとに向かうところであつたが…

「ああー、先行つてください」

「え？何で？」

タアンと高い音が響いた。

それと同時に刀を抜き、飛来してくる物体を叩き斬つた。

空中で二つに分かれ地面に金属片が落ちる。

「っ、残りがいたのか」

「ご名答。あんたらには悪いけど依頼なんでね」

建物の影からズツと出てくるのはオレンジ色の髪の毛をした男だった。

全体的に黒色の服装に、これまた黒のローブを羽織り、手の中にはハンドガンが握られていた。

「依頼だと？鉄の森に所属しているわけじゃないのか？」

「おうさ、俺はあくまで個人で働く主義なんでね。群れるのは嫌いなんだよなあ…」

そう言つて頭をポリポリとかく男には緊張感というものがなくいささか戦場というものが不似合いな男だった。

「オーダーは足止めだからな。取り敢えずその魔導四輪破壊させてもらいますよつと」

撃鉄を起こし、弾倉を回転させる。

狙いを決め、撃つ。

コンマ一秒で行われた行動に対処出来たのは写輪眼を持つ俺だけだった。

写輪眼は未来予知に匹敵する洞察力を持つ。

故に弾丸の軌道も読める。

「先に行つてください……こいつは俺が何とかします」

「…任せたぞ。行くぞルーシイ、グレイ」

ルーシイは俺に頑張つてとだけ伝えると魔導四輪に乗り込んだ。

「死ぬなよー」

「バーカ、誰がこんな所で死ぬかよ」

グレイはそんな事を言った。

魔導四輪が激しく唸り、時速100キロに迫る速さで駆け抜けた。

男はやれやれという態度で肩を上下させた。

「お前… 依頼つて言つたよな？ その依頼金以上金渡すつて言つたら俺たち側につかないのか？」

「残念ながらそりや不可能。俺は一度請け負つた仕事は最後までやる主義なんでね。あと俺に依頼したいなら前払いだ」

「なるほど、そりや無理だ」

俺は刀を抜き、奴は銃を構える。

右手にリボルバー式の拳銃、左手には散弾銃という歪な組み合わせだ。  
だ。

「俺つてばあんまり向かい合つての戦いにはなれてないんでね、お手柔らかに頼むよ」

「そうかい。それじゃあ遠慮なくぶちのめさせてもらおうよ」

武器的に見ると俺の方が圧倒的に不利だがそれを覆るのが俺だ。

…  
ところで原作でこんなやついたか？

## 11 飛び交う弾丸、振るう刃

撃鉄を起こし、弾倉がクルリと回転。

狙いを決めトリガーを引く。

その瞬間には5発の弾丸を空を舞っていた。

「——ラァー！」

刀身変化させ双剣にする事で俺に飛来する弾丸を全て叩き落とそうとするが完全には弾けきれず軽く頬を刺っていく。

写輪眼があつても弾丸の速さについていけないほど俺の腕は早くはない。

両腕に身体強化、ラビットステップをかけていてもこれなのだ。

「流石に連発になると対処出来なくなるか……よかったよかった」

ヘラヘラとした声で話しかけるのを無視し、頬を伝う血を手で拭う。

大した傷ではないが痛いものは痛い。ヒリヒリする。

「けっ、これからだぜ。俺には隠された奥義があるからな」

そんなものはないが強がってみる。

「そいつは結構。俺も——」

纏っていたロープのボタンを外すと風に煽られ中が見えた。

その中には数えるのもしんどいぐらいの拳銃がぎっしりと詰まっていた。

「たっぷりとあるからな」

後で知った話だが俺が交戦した男、ロビンと呼ばれる男は最近名を上げてる用心棒だったそうだ。

戦闘スタイルは旧式から現代に至るまでの銃。アサルトライフルからロケットランチャーまで持っているとの事。

常に空間にしまっているが戦闘になると換装して取り出すというエルザによく似た戦法を取る。

しかし魔法も使わない彼が名を上げたのかというところ——  
どんな魔法よりも銃弾の方がずっと早いからだ。

「うおおおおおお!?」

バラバラ!!と凄い勢いで弾丸が放たれる。使っているのは前世にて俺もやっていたゲームに出てきた銃の一つであるP90だ。

全長50cmの長方形をえぐった形をしており強くなさそうに見えるが、一個のマガジンで50発撃てる中々ぶっ壊れ性能を持つ銃だ。

ドアを蹴破り家の中に転がり込んで机を背にして座る。

不法侵入?バレなきやいいんだよ。

マジでエルザが住民撤退させていてよかった。

じやなきや今頃俺犯罪者だぜ。

「というかこの世界にあんな近代的な銃や置いていたのか?」

妖精の尻尾でも銃を使うやつはいたが西部劇で登場するようなやつである。

「取り敢えず…」

簡易魔法術を発動させ、水の弾丸を指先に練り上げる。

それを軽く発射し、机より少し上を行つたところで縦に広げた。

これで水に反射して机の向こう側の様子が見える。

ぐつと目を上げて見て見ると——

なんと

——対戦車ライフルを構えてやがった。

「はっ！」

トリガーが引かれ、竜の咆哮じみた発射音。

12・7ミリ弾は音を超えた速さで俺のすぐ真横を机ごとぶち抜いていた。

ついでにSAOで見たのだが対戦車ライフルはかすっただけで体が両断する威力らしい。

それを10メートルも離れてないところで撃ってきた。

つまり、あいつは――

「馬鹿かつ!!うおおお!!?」

顔を出した瞬間みんな大好きAK―47を撃ってきた。

縦がわりにしているこの机もいつまで持つか…

「流石に銃相手になるとな」

S級魔道士やナツやグレイ辺りならなんとかしそうだが普通魔道士でも銃には勝てない。

盾はない、刀だけでは限界がある…

「有効な魔法もないしなあ…」

そう言ってる側からジャコンと音が聞こえた。

「3カウント待つ。それまでに降伏するなら撃たないぜ」

考える…

「3」

簡易魔法術による迎撃は不可能、刀による攻撃は難しい、ラビットステップでの高速移動は一度撃たれたらそこまで、写輪眼による先読みもやや厳しい。

「2」

脳内を高速化させる。

選択し、考え、選び抜く。

思い出せ。

この目はなんのためにある?のこ魔力はなんのためにある?俺の実力で何が出来る

「1」

過去から今まで、全てを総動員させろ。

「0」

思い浮かんだ。

というかついさつき見たばかりだった。

写輪眼は相手の技をコピーすることが出来る。

ならば――

「うおお…！」

初めて使う魔法はどれだけ魔法を使えばいいか分からないため通常よりも多くの魔法を使ってしまう。

俺の魔力の3分の1を使って発動させた魔法は俺の体を影にした。

(よしっ！決まった!!)

汽車の中でシカ○ルみたいな男が使っていた魔法。

自身で使って見るとかなり便利な魔法だ。

なんせ狭い所も自由自在である。

俺の体全体が影になった途端、机が爆発した。

影から覗いてみると男は満足そうな顔でロケットランチャーを担いでいた。

だが残念。そこに俺はいない。

天井を伝い、相手の目に見えないように影を細くして後ろに回り込む。

ゲツへへ、後は元に戻って首トンで終わりだぜ。

「チエックメイ――」

ドオン！と、相手の脇の下から爆発音がした。

一瞬遅れたらやられていた。

男はそのまま右足を一步後ろに踏み出し、それを軸に体を回し裏拳をかましてくるのを、俺は屈みこんで避ける。

その状態で俺は足払いをし、バランスを崩す。  
バランスを崩したことで死体。

左腕を強化し、背中から心臓目掛けて拳を放ったが軽業師のごとく空に飛んで躲された。

「お前…銃だけじゃないのか」

「銃だけでこの世界やっていけるほど甘くはないからね」

だとしてもあの腕前俺と同じくらいなんだけど…ズルくね？

いや、ここで怖気付いたから負けだ。

勝つ気でいかなければ。

「ふうー…」

一度深呼吸をし、目を開く。

澄み渡った酸素が俺の脳をクリアにしてくれる。

と言ってもさつきまでの状況とは何の変わりようもない。

「行くぞ——！」

ラビットステップを発動させ、一步目だけを加速させ、その勢いを利用する。

他人の家を思いつきり荒らすことになってしまい申し訳ないが。

ヤツはいつの間にかローブを脱ぎ捨てていたのだがそれはどうでもいいだろう。

「我が手<sup>セツ</sup>に収まれ<sup>ト</sup>」

我が手に収まれ、この魔法は至ってシンプルであり固定した武器や防具を離れたところから持ってくる魔法。

机で銃弾をガードしていた時に置いていた刀が俺の魔法に反応し、クルリクルリと回転し俺の手の中に収まった。

「刀身変化——ナイフ！」

神様から貰った武器が変形し、5本の小さなナイフとなった。

それを俺は全力でヤツに投げつける——！

「おっと危ない危ない」

飛来するナイフを簡単に避けたが、続く俺のことを忘れて貰ったら困る。

「オオラア!!」

空中で回転することで威力がアップした蹴りを直接頭に叩き落とす。

「甘いね！」

ヤツは腕を蛇のようにうねらせ、俺の蹴りをいなした。

こいつマジでやるな。

「――戻れ！」

俺の言葉を受け、壁に刺さったナイフはグニヤリと曲がり始め一つになると俺の手の中に再び入ってきた。

それを返しの太刀で上に床ごと切り上げるが、そんなの分かっていたみたいに躲かれてしまった。

ヤツは腕を横に出し、その手の中にゆっくりと銃の姿が表す。

ドオン！と勢いよく放たれた弾丸は散弾。

空中に散らばるのは一発一発が致命傷の鋼の弾。

迎撃は不可能なら躲すしかない。

身体強化、ラビットステップ、共に両足に――！

瞬間移動じみた速さで散弾を躲し、そのままの状態でヤツに接近し始めた時に散弾は後ろの壁に当たった。

「ゼアアア!!」

「グッ」

刀を捨てながら急接近し、足を腹に叩き込み、踏み込みからの正拳突き。

前世だったら俺のパンチは相手をちよつと後ろに押すぐらいであるが、この世界の俺のパンチは軽く大砲である。

家の壁を突き抜け、砂埃をあげる。

それを追いかけるように俺はまた飛んだ。

「我が手に収まれ！」

家の中から刀が飛び出し、本日3回目の俺の手に収まることになる。

上空から地上に向かうその途中、砂煙を裂き4つのミサイルが迫ってきた。

だが所詮はミサイル。まだ小さな弾丸に比べればマシである。

「ハッ」

空中で1人笑い、全てのミサイルを半分に叩き切った。  
俺にあたることなくミサイルは空中は飛んでいき空で軽く爆発を  
引き起こす。

ミサイルの爆風で砂煙が晴れる。

その中では男がマグナムを構えていた。

「喰らいやがれ！」

ドドドドドと残り一発を残して打ち出す。

「くう…」

刀を振るうが全ては切れず、1発は肩に命中した。

ミシミシと俺の肉体をえぐり肩から鮮血を溢す。

だがもう全ての布石は整え終わった。

「これでトドメ」

ヤツの依頼は足止め。

故に殺す必要はなく狙いは俺の足だった。

肩の痛みで上手く魔法が発動出来ない。

ヤツは勝利を確信した顔つきで引き金を引いた。

——ただし残弾がないマグナムの引き金であるが。

「なっ!??!?んな馬鹿な!??!?」

「隙あり」

前を向いた時にはもう遅い。

俺の拳は鳩尾を正確に狙い撃ち、続く蹴りは膝を的確に穿つ。

魔力を込めた一撃は鍛えたと言えども男を制すことは出来た。

「うっ… あの時残り一発あつたはず…」

「ああ、それはな… 俺がかけた幻術だ」

そう、最後に俺が飛んでいた時に目が合った瞬間に写輪眼による幻術をかけていた。

マグナムの装弾数は計6発。

ヤツは全部撃つたが、俺の幻術によって六発目の銃声と、記憶を軽

く操作した。

あの一瞬でよく出来たものだと思う…

「いっつう…!!」

緊張が解けたせいで痛みが回り始めた。

肩に命中した弾丸が超痛い。

正直泣き叫びたい。

「うう…！」

痛みを耐えながら指を傷跡に入れ、弾丸を摘まみ出す。

血が指に付着して非常に気持ち悪い。

ヌルつと、生暖かい血が付着した弾丸を地面に捨て、傷口を回復魔法で回復したいところだが出来ないので放置。

「今回だけは見逃してやるからな。次に敵対したらお前の銃全部パクって売却してやるからな」

「ハハ… そりゃ勘弁」

最後まで敵意があったのか分からない男をその場に放置。

さっさとエルザ達の元に戻るために魔導四輪を探したが重要なこと思い出した。

「俺未成年で死んだから車の運転の仕方分からねえ…！」

ガクリと思わず膝をついてしまう。

こうなれば走っていくかと思つて前を見た時だった。

少し離れた所に空を飛んで移動する物体を発見した。

「むっ… あれは？」

遠見の魔法を使い物体をズームアップ。

傷を負った男が何かを呟きながら空を浮遊している謎の光景だった。

「確かあれは… 今回の犯人であるエリ… ンボー(?)だったか」

今更エルザ達の元に戻って間に合わないだろうしなあ…、と考えたところで俺は悪魔じみた方法を思いついてしまった。

後ろで倒れている男に俺は満面の笑みを浮かべた。

「なあお前、対戦車ライフル貸してくんね？」

## 12 妖精の尻尾の魔道士

「クソッ！あのハエごときに撤退する事になるとは……!!!」

街の上空、ナツとの戦闘により撤退を余儀なくされた闇ギルド鉄の森のマスターエリゴールはギリと歯をくいしばった。

傷を負い、魔力も大量に使ったせいかわ彼の得意であるはずの風魔法もそよ風のように何処か頼りない。

「いつか……あのクソ野郎に復讐してやる……！」

復讐を新たに誓った彼。

しかしその野望は夏場に放置したアイスクリームのように溶けることになる。

全てが終わった後の話だが彼は、彼自身が雇った用心棒を舐めていた。

魔法と科学では、魔法の方が上と決めつけてしまった。

だが思い出して欲しい。

用心棒であるロビンは全ての銃を持つもの。

たかが風を鎧にして纏う魔法と、戦車の装甲ごとぶち抜き、人に当たれば即死は間逃れないライフル。

どっちが強いと思うか？

ドオンと遠くから音が聞こえた。

「何だ——？」

不思議に思ったのも一瞬。

何もなかった足に穴が空いた。

火竜の異名を持つナツとの戦闘で食らった攻撃とは比較にならない一撃。

足の甲が貫通し、痛みが全身に巡ることで持続させていた魔力を止めるにはうってつけの一撃だった。

「ギヤアアアアア!!」

未知なる痛みに恐怖し、魔法を解いてしまう。重力に従い10メートルの落下を終えると、地面に這うように動き始めた。

「誰だ…こんな魔法…俺は、知らない…!」

ロビンは転生者であり全ての銃を持つもの。

この世界の住人が知るわけではない。

エリゴールが這う先に見えるのは2つの人影。

エリゴールが落ちた衝撃の砂埃で顔が見えないがゆつくりと距離を縮めていく。

「我ながら…うまい狙撃だった。やっぱ写輪眼っていいね」

「おたく本当に銃初めて撃つのか？歴戦のスナイパーみたいだったんだが…」

「ああ、バトル○イールドとC○Dで覚えた」

呑気に会話しながらエリゴールの前まで迫った2人。

片方は全身真っ黒男、そしてもう1人がジャージ姿の男だった。

「貴様ア…俺を裏切ったのか!!」

殺意のこもった目で睨みつけるが黒男は飄々とした態度で返事を返した。

「いやあ、俺ってばこの人に負けて脅されちゃってですねぇ…そもそも足止めなら十分したじゃないですか」

「ふざけるな!!これの何処が——」

ドオン!!と銃声が響き渡った。

音と同じくらいの速さで飛んだ弾丸はエリゴールのすぐ側を抉った。

「なっ…ああ…」

魔法銃による攻撃は見たことがある。

だがそんな物の何十倍の速さで飛んでくるものを見たら人間誰だって恐怖する。

銃を撃った本人は拝借したハンドガンのエリゴールに見せつけるように突き出していた。

「御託はいい。それより俺からの依頼だ」

ジャージ姿の男の手にはエリゴールが憎くて憎くてたまらない妖精の尻尾のギルドマークが刻み込まれていた。

「はっ！誰がハエなんかの——」

ドオン！と銃声が響く。

「次は両腕を撃つ。これは警告だ」

「・・・!!」

エリゴールは心の底から冷えるような恐怖を久しぶりに見た。

例えるなら魔法も使えない一般人が逃げ場のない山で熊に遭遇した恐怖。

男の目には赤く染まり二つの巴印が浮かび、目の中心には燃え盛る炎のように黒いナニカが浮かび上がっていた。

（ま、間違いない・・・！こいつ、ヤルと言ったらヤル男だ・・・！）

そこに油断や、情などない。

向けられる視線は養豚場の豚でも見るかのようにただひたすらに冷たい目。

小さな子供が見たら泣く確率100パーセントだろう。

「返事は？」

「く、クソツッ！ハエごときに利用されるかツツ!!!殺すなら殺しやがれ!!」

「いや、あんた金がかかってるし殺しはしない。まああんたが何言おうと俺の足になってもらうけどな」

エリゴールが男の赤く光る目を見た時、意識が完全に落ちた。

『カカカ・・・ どのいつもこいつも根性のねえ魔術師どもだ・・・』

夜になり、空には雲が多く闇の一角。

エルザ達はララバイの笛を追跡して、各ギルドマスターの定例会場に着いた時には鉄の森のカゲヤマはララバイの笛を手離していた。

そこに響いたのは地獄からの使者のような低い声。

声の元凶はララバイの笛からだった。

先端についてあるドクロから黒い瘴気が空に舞い上がり寄って集まり異形の怪物と化していく。

『もう我慢できん…ワシが自ら食ってやろう…貴様らの魂をな…』

瘴気が収まる頃には高さ10メートル、横5メートル程の悪魔が産まれていた。

ララバイは吹くことにより人の魂を食らう化け物。死にたくても死ねないゼレフが自らを殺すための悪魔の一端。

「いかんー吹かせたら近辺にいる住人が！」

誰よりも早く行動を始めたのは妖精女王のエルザだった。

天輪の鎧を纏い、自分の周りに10の剣を出現させ、全ての剣を円状に並べララバイに向かい放つ。

高速回転しながら迫る剣はララバイの人間で言うところの脇腹に直撃し大きく体を抉った。

「うおおおおおおお!!」

ナツはゼレフの体を伝い頭にまで近づく。

こんなに早く登るのは可能かと誰もが思ってしまうが人間のクライミング能力は猿よりも優れている。

「左手と…右手の炎を合わせて…！」

炎と炎の相乗効果。

両腕に灯った炎は片腕のおよそ2倍。

「火竜の焔炎!!」

バンツ!と手を打ち鳴らすと膨れ上がった炎がララバイに直撃し、ララバイを大きく動かした。

『小癩な!!』

ララバイが腕を振るうと呪いが込められた魔弾が放たれた。

属性も何もないただの魔力がこもった一撃であるがララバイの魔力故に非常に強力だった。

その弾丸は無秩序に放たれ近くにいたギルドマスターの方へと飛

び、直撃すると思った時だった。

「アイスメイク——大盾！」シールド

グレイが前へと飛び出し、魔力を氷へと変換させ前方に縦2メートルの集めの盾を作り上げた。

魔弾が爆発。

しかし氷が多少砕けただけでグレイやギルドマスターには傷はない。

ルーシイはゼレフが生み出した魔物と戦う3人を見て圧感に包まれていた。

「ナツ！グレイ！次で決めるぞ!!」

「おう！」

ナツは先よりも巨大な炎を、グレイを氷を、エルザは無数に舞う剣達を——

「火竜の——」

「アイスメイク——」

「舞え！剣達よ——」

これが——

「煌炎!!」

アイスゲイザー

「氷欠泉!!」

サークルソード

「——循環の剣!!」

——妖精の尻尾の魔道士！

多大なる魔力を持つララバイも大きすぎるダメージを止めきれず、その行動を停止しようとしていた。

自重に従い崩れる先には定例会場——

「定例会場がああああ!!」

妖精の尻尾のギルドマスターであるマカロフの頭に定例会場が壊れた後のことがふと思い浮かんだ。

書かされる始末書、修復代、そして「あれ？これって評議会に呼び出されるんじゃないかね？」と。

散々問題を起こしてきた妖精の尻尾。

ついに呼ばれるのかと涙が溢れそうになったその瞬間だった。

「刀身変換——双剣

身体強化、ラビットステップを全身に

そんでもって八門遁甲、第一門開門——！」

崩れ落ちるララバイに無数の切れ目が入った。

ララバイが崩れるのが一瞬止まったのと同時にヤツは来た。

「すいませんマスター。遅れてしまって」

片手に紐でグルグルにされたエリゴールを持ってジョニー・アル

バートは来た。

「なんかヤバそうだったんで切ったんですけど大丈夫ですよね？」

その言葉を言った途端ララバイはバラバラに崩れ落ちた。

「スゲー!!おいジョニー!今のどうやったんだよ!!」

マカロフとジョニーの間に入ってナツがドカドカと入り込んで来む。

ララバイが一瞬にしてバラバラになったのだ。そりゃ誰でも気になる。

「えっ?ただ早く斬っただけだけど?」

「早すぎじゃない...?」

「正直私にも見えなかったぞ」

「というかそんなに動けるなら俺と戦った時手え抜いてただろ!」

ジョニーが妖精の尻尾に入った初日にナツと戦った。

その時は相打ちとなって終了していたがこれだけ早くは動いていなかった。

「いや実はこれ体の負担が...」

言葉の途中、ジョニーは電池の切れたロボットののように地面に倒れこんだ。

咄嗟にナツが体を支えたがその途端にジョニーが叫び声をあげた。「どうやら相当体の負担がかかるようだな...」

「おい！ジヨニイ！生きてんのか？？」

「チーン」

「ジヨニイイイイイイイイイイイイイイ！！」

「いや死んでないから」

後日談、と言うか今回のオチ。

翌日僕は火○と月○に起こされ――

え？物語シリーズのオチはいらない？

何だよ冷たいなあ…。

まあ簡単に話をしておこう。

原作だと確か潰れていたはずの定例会場は俺の手によって阻止された。

これにはマカロフ大喜び。

そして原作ではナツから逃れたエリゴールは、俺の手によって魔力をすっからかんにされた状態で捕まった。

エリゴールには指名手配がかかっており捕まえた実績として俺には金が贈呈されることとなった。やったぜ。

まさかまさかの350万Jである。

やっぱ金儲けって楽しいねえ（ゲス顔）

まあほとんどナツが仕留めたのであるがそれはそれである。

捕まえたの俺だしー？

どうせアニメでも再出てきても秒で倒されるしー？

呑気に空飛んでるヤツが悪い（白目）

俺はと言うとエリゴールを長時間幻術にかけたせいで、八門遁甲を開いたことでの負担が大きい上に、魔力がすっからかんだったため一日動けず病院に連れていかれた。

結局2日で帰ることになってしまいサクラには申し訳ないがまあ許せサスケエ方式で頭小突いたら問題ないだろう（すつとぼけ）。  
とまあ原作と違うのはこんな感じ。

あ、後この後行われるであろうナツ対エルザとの戦いで評議会が来ないことである。

ナツとエルザの戦いは俺たちが帰って三日後に行われるとの話を聞いて俺は妖精の尻尾を後にした。

今日の晩飯は怠いからレストランで済ますかと思いついている時だった。

ビュオオと風が吹き荒れる音。

男子○校生の日常的に言うなら「今日は…風が強いな」「でもこの風、泣いています」みたいな感じだ。

それだけなら俺は普通に通り過ぎた。

しかし俺が足を止めた理由がある。何故ならそこはサクラを鍛える時にいつも使っている場所の近くだからである。

美味しい店の匂いに誘惑されていつてしまうのと同じように俺は歩いていった。

一歩踏み入れるたびに風の音は強くなる。

そして視界の開けた場所に出ると、一陣の風と化し落ち葉を叩き斬るサクラの姿が見えた。

動くたびにパンパンと的確に、そして無駄な動作は一回もなく、一分する頃には木の葉は全て斬られていた。

「嘘やろ…」

思わず関西弁になるほど驚愕だった。

—— 幾ら何でも早すぎる…！

俺が落ち葉千枚叩き斬りの修行が成功したのに何ヶ月もかかったと言うのに… たったの三日!?!?

ナ○トの中人試験でロ○クリーに手も足も出なかったのに本戦になるとごつつい強くなってるやつの再現かこれはッ！（分かりにくい例えですいません）

「あつ！アルさーん!! 見てました今の!?!? 私これで弟子ですよねー！」

「…」

我輩思わず白目。

「サクラがマジで天才剣士沖〇さんですよー！と言っても問題なくなってきた。」

ふと目を下に向けると雑草の上で死体みたいに横たわっているガジルの嫁であるレビイが倒れていた。

「…どったの？」

「サクラちゃんが、私に…小さい竜巻作って…ってお願いされたから作ってたんだけど…魔力が…」

それ以降レビイは喋らなくなった。

アーメン。

「それでどうなんですか!??弟子ですよね!??もうこれって弟子確定ですよね!そうですね!!」

「…そうだね(白目)」

才能って羨ましいと思った俺だった。

こうしてララバイ編は終わりを告げるのであった。

### 13 妖精女王と無の極み

太陽が出て早6時間とちよつと。

春風がふわりと肌を撫で、妙に湿っているのか湿ってないのか分からない中、俺は自称弟子から弟子にランクアップエクシーズチェンジしたサクラの鍛錬に付き合っていた…。というか付き合わされていた。

これを話すには6時間前に遡らなければならない。

そう…。あれは朝の6時だった。

『アールさん、朝ですよー』

ゆさゆさと体が揺さぶられる感覚。

何故サクラが部屋の中に入り込めているのか不思議ではあったがその時はそれ以上に眠かった。

声を無視して布団に潜る。

布団はいい文明。はつきり分かんだね。

『もう、起きないと…。こうだー！』

グサツ!!と頭に何か突き刺さった。

こう…。包丁じゃない。コンパスとかドライバーとかで刺されたような気がする。

俺の頭蓋骨からメシツ!と聞こえたのは気のせいだと信じたい。

そんな事されて起きない訳もなく布団から飛び出しニコニコと笑うサクラに近所迷惑も考えずに叫んだ。

『お前！馬鹿かつ!??とかなかに突き刺したんだよ！』

『プーン』

サクラの手の中にはプルプルと震えるメル。原作でいうならばプルと呼ばれる鼻(というかドリル)の先端に真っ赤な鮮血が付着していた。

『メルを武器に使うなアアアアア!!』

そして冒頭に至る訳だ。

というかメルで頭に攻撃するってRAVEでもあったよな。

というかふと思えばRAVEとフェアリーテイルの関係性はどうなっているのだろうか？

エルザの鎧はハートクロイツ製と呼ばれるものであり、RAVEでも同じくハートクロイツという単語が出てきたり、ジェラルルの使う魔法も出てたり、更にはエーテリオンという単語もある。

更に考えればエドラスエルザはRAVEの主人公であるハルが使う武器テンコマンドメンツもあるしなあ…

とそんなことをぼんやり考えつつサクラの振るう木の棒を、同じく木の棒ではじき返している。

「一秒を切り刻め。早く鋭く。足と手も使え」

「はいー」

サクラの動きはまだ無駄が多い。

足の幅も広すぎたり狭すぎたりするし、手の振りだつて大振りで隙が多い。

正直なところ俺が本気を出せば5秒で5回は殺せてる自信がある。

いや、しないからね？そんなサイコパス見るような目やめて。俺に効く。

という感じで朝から四時間。

休みを入れながらひたすら木の棒で撃ち合っている。

「やあー」

上段から斬りおろしてきた木の棒を体を回転させることで避け、サクラの踏み込んでいる足をちよいと前に押してやるとそのまま転び地面にドサリと倒れこんだ。

「ああー！また負けちゃいました…」

「お前さ… 本当初心者なの？」

「初心者に決まってるじゃないですかー」

いや嘘だろ、と俺は思った。

だって師範代みたいにエゲツないほどキツイ練習をしてるわけ

じやないのに初めて俺が剣持って3ヶ月ぐらいの動きをしてるんだぜ？

疑っちゃうよね！

「何ですかその疑いの目は…。」

ムスーと頬を膨らませるサクラ。

嘘をついているようには見えない…。と言うか可愛い。剣を握ったことがあるとかないとかどうでもいいくらい可愛い。

「プーン」

「あ、そうか…。もう昼だな」

「話逸らしましたね」

メルがガクガクと震えながら時計を指したのを見てようやく昼だと気付いた。それを利用して視線から逃れる。我ながら上手い作戦だ（上手くはいつてはない）。

持ってきたバスケットから買ってきたパンを取り出しサクラにパス。そしてブルーには店で売っていたアメちゃん（カレー味）を。

木陰に入り食べる頃には12時30分。

本来ならこのぐらいまで寝ていたのに…。クソツ！

「やっぱり運動の後の食事は美味しいですね…。」  
「プーン」

俺は心の中で愚痴を唱えながら某モナリザの手を見てエクスカリバー（意味深）を大きくさせた変態殺人鬼のように木にもたれてスタイリツシュにパンを食う。

メルは何事もなさげにカレー味のアメちゃんを食っているが美味しいのだろうか？

カレー味のアメちゃんなんてコーンポタージュ味の○リガリ君と同じようなものと思うのだが…。

「そういえば今日ってナツさんとエルザさんが戦う日だったんじゃないですか？」

「そういえば…。すっかり忘れてたな」

ララバイのクエストから帰って死体のように眠っていたから記憶が失われていた。

そういえばそんなのあったなあと思いつつ、カツサンドを口にひよいと投げ胃袋に直行させる。

「間に合うかどうか分からんが言ってみるか？」

「魔道士同士の戦い…私、気になります！」

「おいそれパク（ry

訓練所から妖精の尻尾までは近い。

およそ5分もしないうちに着くぐらいなのだ。

今日は平日なので一通りは少ないがギルドに近づくにつれガヤガヤと音量が増していく。

人と人の間に無理やり入り込み、前へ進んで行くと丁度ミラさんの姿が見えたのでミラさん目掛けて一直進。

「あらジョニイじゃない。今来たの？」

「はい、ちよつと色々あつて…でナツどうなりましたか？」

「ああ、ナツなら——」

「くっそお…次は倒してやるからな…」

「あと10年は早いな」

「ああ…（察し）」

ナツが地面に横たわりほぼ無傷のエルザが両手を腰に当てて胸を張っていた。

しかし原作の最初だというのにまあ強い強い。何食ったらあそこまで強くなれるんだ？

「ナツー！お前に金かけてたんだぞー！」

「そうだそうだー！もうちよつと粘れー！」

「うつせーぞー！ならお前らもやってみろよ！」

おちよくる観衆にナツが吠える。

実際問題エルザに勝つなんて50キロの重りつけたまま24時間マラソン走れってレベルだしな。

「おいジョニー！お前やってみるよ！」

「はあ？俺？」

ナツと目があつたせいで俺が標的にされた。

もつと周り見てくれ。グレイとかエルフマンとかジェット、ドロイ等々がいるだろ？

俺は午前中から付き合わされたせいで疲れてるんだよ。はつきり言つて帰つて寝たい。

「いやー・・・エルザも疲れてるだろうし・・・」

「それほど疲れてはないぞ？」

「おいエルザ！それって手エ抜いてたつてことじゃねえか！」

「抜いてはない。早く終わったただけだ」

何だか色々違う気がするぞ!!？

視線でグレイに訴えかけるがさつと視線を外す。エルフマンはどうかと見てみるがこれも回避。

お前らひでえよ・・・今度飯の中にタバスコぶち込んでやる。

「あつ！俺弟子の訓練に付き合わないとイケナインダ！それじゃー」

「私はいいですよ？」

「この馬鹿弟子がああああああ！」

なんなの？どんだけ俺とエルザで戦わせたいの？

ページ数でいえば3ページもしないうちに終わる戦いをみて何が面白いと!!？

「いいんじゃない？強さを知るためには強い人と戦わなきゃならないわ」

「ミラさん・・・俺に死ねと？」

既に俺首は断頭台の手前に位置する。

俺が愚痴及びツツコミを入れてる間に野次馬がやれやれー！とか

言い始めだした。

「私もまだ動き足りないのな。かかってくるという」  
「……」

いや、行きたいわけじゃないんですけど…

エルザ・スカーレット。

今更紹介する必要もないが取り敢えず戦う前なので脳の整理を行っておこう。

妖精の尻尾でS級に位置する女魔道士であり、二つ名は妖精女王とか騎士。

使う魔法は換装と呼ばれる別空間に置いてある鎧や武器などを使用する。

片方の目が義眼であり目による幻覚は無駄になる。

…勝ち目ねえ。

「ジョニー！お前に賭けたぞー！勝てー！」

「無の極みの実力見せろー！」

「リア充死ね！」

あれ？1人関係ないやついたよね？

いや…今は無視しよう。

対面するのは美人なお姉さんのようなキャラではあるが中身はベジータも涙目の戦闘力を持つ怪物である。

ただ見に来ただけなのに何で俺こんなことしてるんだろ…泣きたい。

「どうした？そんな死んだ魚のような目をして？」

「あはは…何でもないです」

すんごい嫌だけど換装し刀を握る。

対するエルザは普通の剣を握る。

——思考を変える。

相手が格上だとか格下だとかどうだっていい。

俺をぶっつけろ。魔法があればエルザが有利になるが、なしになると俺とどっこいどっこいになる。．．．と信じたい。

「ふうー．．．」

ナツの時とは比べ物にならない覇気だ。

俺のことを舐めてるようには見えない。目の前の弱者にも一瞬の隙も見せない。

「レディー．．．」

審判役のミラさんが手を高く上げる。

腰を低くし、手を前方に伸ばす。

作戦は決まった——

「フアイト!!」

声と同時に足に万力の力を込め、弾き出す。

俺が練った作戦、それは——

「八門遁甲——第一門開門!」

すぐ決着をつける——!

持久戦にしろ短期戦にしろ俺の方が部が悪い!

なら開始同時に全力を叩き込むしかない。

魔力で開いた脳のリミッターは40パーセント。

それに身体強化を施すことで終了した後の体の負担を減らす。

エルザを中心に円状に走る。

早すぎるせいか砂埃が舞い上がる。

「身体の制限を外す技か．．．面白い、来い!」

俺は一步踏み出し、また加速した。

## 14 S級魔道士の実力

舞い上げられた砂埃は竜巻のように回転しエルザを取り囲む。その中に俺は紛れて攻撃するタイミングを計る。

「身体の制限を外す技か…面白い、来い！」

煙の中から飛び出す。

視認不可能に近い速度から放たれる死角からの蹴り。

エルザの正面に沈み込みながら接近し、片足を跳ね上げると同時にもう片方を下から上に蹴り上げる。

「早いな…！」

蹴りは剣の腹で受け止められる。

が、まだまだここからだ。

俺の蹴りによって体が宙に浮いたエルザを追いかけ俺も飛び上がりもう一度蹴りを叩き込む。

八門を開いた状態での連続の蹴りは体に負担が大きいが身体強化で足を強化しているためほぼノーリスクなのだ。

「まだまだアー！」

ドドドドと下にいる野次馬達に聞こえるほどの連続で強力な蹴り。

俺の蹴りを受けているエルザの剣もミシミシと音を立て始めた。

そして高さは10メートル。この高さならばあれが出来る。

「魔力変換——細糸」

俺の魔力を元にして擬似的な意図を作り出す。某忍者漫画で「じゃんじゃん」言ってた傀儡使いが使うチャクラの糸のようなものだ。

それをエルザにまとり付くように投げる。

一つの指からおよそ10本。つまり計100本の糸がエルザに接近する。

「ハア！」

裂帛の声を響かせ近づく糸を逃さず叩き斬る。

だがこちとら魔力少なめで頑張ってきた甲斐あって魔力の操作は

長けている。

そう全部斬られるような事はしない。

一本だけこつそりと見えないぐらいに細くした糸がエルザに絡みつき、上半身から下半身まで糸で縛り上げた。

「これは…！」

「木の葉体術——影舞葉ってね」

葉の陰のごとく縛られたエルザの背後に回り込む。

さらにその状態のエルザを掴み、高速回転しながら地面に落ちる。思いつきりパクリではあるが勝つためだから仕方がない。それにロツ〇リーは個人的に好きなキャラだったんだよ。

「——表蓮華!!」

地面に接触する寸前にエルザを離し1人だけ退避。

弾丸みたいに回転しながら落ちる、更に頭から。一般人なら即死であるが…

「中々の一撃だな」

「やっぱり着てやがったか…」

——金剛の鎧

圧倒的と言える防御力を持ち、原作ではジュピターを凌いだバケモノの鎧である。

落とす直前にずっしりと重くなったからこりやなんか着たなと思っただが金剛の鎧はずるい。

「しかしあの技は恐ろしいな… 私じゃなかったら死んでいたぞ?」

「元よりそういう技なんで」

あらかじめ地面に刺しておいた刀を握り、換装し天輪の鎧となったエルザを前にする。

なんでこう面倒な鎧を着るんだと愚痴を言いたくなる。

ああもうさっきの八門で体痛い。

「舞え、剣たちよ——」

エルザの周りに5本の剣が現れ、銀色の光を放ち俺に飛来してき

た。

写輪眼を起動させ、弾道を予測し同時に走り出す。

一本目、体を横にずらし回避すると同時に柄を握り二本目の剣に向かい投げつける。

二本目の剣は空中で一本目の剣とぶつかり大きく弾かれた。

三本目と四本目は左右から放たれており俺を挟み込むように迫ってきた。

この2本は最初の二発に比べて少し時差を開けて放たれているが、代わりに少し速い。

回避は不可能ではあるが防御が出来ないわけじゃない。

「——っ」

魔力を操作し影に集める。

影から飛び出したのは二本の黒い腕。

汽車の中で戦ったカゲヤマという男が使っていた魔法を応用したものだ。

帰ってきて少ししか経ってないがこの魔法はかなり低燃費で俺によく合う。

影を操り当たる寸前だった剣を影の手でがっしりと捕まえる。

走りながら影の手にはまっている剣を引き抜く。

二刀流、影も合わせて三刀流である。

換装で武器取り返されるんじゃない？と思っている貴方に換装の弱点を教えてあげよう。

——、一度出して戻そうとする時は必ず所有者の肌の何処かで触れてなければならぬ、

つまりエルザが俺の持つてる剣を取り返したいのならば絶対に触れなければならぬ！

「——ラビットステップ！」

両足に風を纏い、一本を加速させる。

射程圏内に入った時はエルザの胴を手を持った剣と刀で挟み込むように斬る。

これがグレイやナツならば上や下に回避しただろう。

しかしエルザは——！

「——フンッ！」

剣を横にして、剣先と柄頭で食い止めた！

んなアホな!?!と素直に思った。

確かに出来なくはないだろう。

しかしそれを行うには判断力、瞬発力、更には刃が来る方向を考えなければならぬ。

俺みたいに写輪眼を持っているやつなら出来る。

しかしエルザは持っていない。只々純粋な剣技である。

——これがS級ランクの魔道士……！

原作やアニメでは伝わらない強さがそこにあった。

だがこれで負けたわけじゃない。勝てるとは思われないが諦めはしない。

こんな俺だつて一様剣士である。なら高みを目指して踏み出せ、可能性を見出せ。

「返してもらおうか」

手に強い衝撃が伝わった。

エルザの片方の拳が俺の手を跳ね上げるように打ち出され、手から剣が離れた。

宙でクルリと周りエルザの手に収まる。

それと同時に一閃。腕を狙った一撃を刀でいなし、その威力を使い体を回転させカウンターを狙うが屈み込まれて失敗。

「やっぱり強エ……！」

「話してる暇などないぞー！」

エルザの放つ剣尖はどれも重い一撃だと言うのに芸術品のように繊細だった。

エルザは二本の剣を、俺も影が保持していた剣と手持ちの刀で対抗するが正直話にならないくらい次元が違う。

写輪眼を使っても対応出来ない。

軌道は読める。けど早過ぎる。

どんなに優れた目を持っていても反応出来る体を持っていないけれ

ば意味がない。

「身体強化——両腕

更ラビットステップを両腕に——！」

両腕が異様なまでに軽く、強くなる。

これだけやってやっと対抗出来る。

消費魔力がバカにならない。

「まだまだ行くぞー！」

天輪の鎧が外れ、光が見えた時にトラのような服をしていた。

飛翔の鎧——スピードを上げる鎧(?)だ。効果はシンプルだが強

力である。

確かに六魔將軍戦では使ったがコブラに毒を入れられ「はう！」とはなっていたがこれは個人戦。正直キツイ。

両手にはタガーが握られ気がつけば斬撃だけが宙に残っていた。

「速っ!!」

まるで振るわれていたかのように接近する斬撃を刀で防いだ瞬間、背中にドンと衝撃が走った。

それと同時に吹っ飛ばす感覚。

数メートル飛び空中で回転し着地。

着地し顔を上げた時にはエルザがすぐそばに接近している。

(対処しきれんぞ!!?)

飛翔の鎧ずるすぎィ!と心の中で叫ぶ。

作戦はあるが果たして通じるのかどうかというものばかり。

しかも魔力の消費量高めである。

それでも勝つためには——

「やるっきやねえよな...!」

一度距離を取る。

手のひらを某錬金術漫画のように合わせ地面を叩く。

魔力が土に流れ、少しの間操作出来る。

「——ロックガードナー」

俺の左右から岩が盛り上がりエルザと俺との道を一直線にする。

ワンパ○ンマンで初めてソニックが出てきた時に敵が岩でやって

たやつだ。

「一直線にすれば防御が出来ると思ったか。受けて立とう」

獅子のように四足歩行の形となり前方に体重を乗せる。

対する俺は刀を構える。

ドンツ！とエルザが走り出した瞬間俺は横に刀を捨てた。

エルザは驚愕を露わにした。

敵を前にして武器を捨てるやつが何処にいるだろうか？

まあ俺なんだけども。

大量の酸素を取り込み溜めを作り、魔力を集中させる。

「火竜の――」

ザワリと観客が騒めく。

当たり前だろう。この技の持ち主は滅竜魔道士にしか出来ない大技中の大技。

「――咆哮!!」

口から火が出る。

スゲエエ!!と心の中で叫び、同時に魔力がドンドン減ってオボボボと飢餓状態。

写輪眼でコピー出来るものなのかと思ったが出来て何より…と  
うか滅竜魔法ってナ○トの直径限界的扱いじゃないんだな。

それじゃアイスメイクやらテイクオーバーとかも出来るんじゃない俺？

と余韻に浸っている間に煙は晴れた。

その先には炎帝の鎧を着たエルザ…

「その鎧の存在忘れてたア…！」  
完全にミスである。

最初の方しか出て来た記憶しかないのですっかり忘れていた。

「まさかナツの技まで真似できるとは…正直驚いたぞ」

「その割には無傷ですけど…！」

ガラガラと作った岩の壁が崩れた。

万策尽きたというやつだ。

残り魔力残量8

離れたものを手の中に戻す「セット」が二回分、腰には短剣二本。少し横にはさつき投げ捨てた刀が一本。

思ったよりも火竜の咆哮が魔力を使った。一日で何発も撃てるナツの魔力凄すぎ。

「これで詰み、だ」

「——クソッ！」

ヤケになって短剣を二本とも投げるが、エルザに見切られ弾かれてしまった。

「中々楽しめたぞ。今後も精進するように、だ」

「・・・」

「なーんちゃって」

「何っ?」

バツと手を伸ばし刀を取り振りがぎす。

だが体力が有り余っているエルザには敵うわけがなく剣の腹で打たれた。

「往生際の悪いやつだ」

エルザは飽きた様子で笑う。

確かに往生際が悪い。

だが最後の戦略は既に完成している。

「負けるのは変わらないけどせめて一発は入れさせてもらう」

最後に浮かんだ作戦はやはりというかアニメのパクリだった。

某聖杯戦争ゲームに出てくるアーチャーなのに剣使う例のあの人が使っていた技の一つ。

「——鶴翼二連」

ドガッ!とエルザの鎧に二本の短剣が直撃した。

直撃と言っても剣柄の方である。

「いつの間に...!」

地面に倒れた状態で俺は笑いながら説明する。

「最後に短剣を投げた後... セットの魔法で手元にまで戻しただけで

すよ…！」

その軌道上にエルザを立たせただけである。  
負けてしまったがまあ一発入れられたのでよしとしよう。

「凄かったぞー！」

「あの… エルザに一撃とはいえ当たるとはな…！」

観客が騒ぎ立てる。

ワーワーと軽いお祭り状態に近い。

「流石無の極みと呼ばれるだけあるな」

「ご謙遜を… 所で誰か助けて… 体が動かない」

こうして原作と乖離してしまったがこれはこれでいいだろう。

もうこんな試合やだと心で思い、俺は凄いいい匂いがするエルザに抱えられるのであったとさ。

## 15 魔法について

俺の朝は早い。

というか早くさせられている。

と言うのもアホ弟子のサクラのせいである。

何時もなら寝るだけ寝て、起きて、飯食べて、軽く運動して、ギルドに顔を出し、たまにクエストに行くというデブまっしぐらな生活を送ってたかったのに真面目な弟子は毎日毎日修行の一言である。バーサーカーかよ。

「もつと早く、無駄を省け」

「了解ですー」

今朝もメルを頭に刺され叩き起こされた俺は9時から修行に付き合わされる。

まあいい運動にはなるけど…

因みに今日は俺とエルザが戦った日から大体1ヶ月経っている。

ガルナ島のクエスト始まらねえなと思う日々ではあるが俺には関係ない。

「やあー」

木の棒がシュツと伸びてきたのを、首を軽く捻り躲すと同時に、手に持つ木の棒を手放しサクラの手首を掴みもう片方の肘でサクラの手に衝撃を与える。

不意な攻撃だったためかサクラの手から木の棒が落ちた。

「あっ」

「武器を落としても目を離すな。これが試合だったら掴んだ手首の関節極められるからな」

「… なんと言うか… 本当に実戦向きな戦い方ですね」

「俺は体術ばっかで魔法があんまり使えないからな… こんな手段取るしかない」

余談だが手首の関節は一度極められると順に肘、肩の関節も極める

ことが出来る。

良い子のみんなは決して真似しないようにしよう。

「十分強いじゃないですか」

「いやいや・・・お前、俺とエルザの戦い見ただろ？一方的な展開だった」

「でも最後に——」

「あんなのマグレだ。次はない」

某何故エロげにしたか意味不明の聖杯戦争ゲームに登場する筋肉マッチョなバーサーカーのような筋力、そして技術。

エルザが f a t e 出演決定したなら無窮の試練のスキルは絶対についてると思う。

「それより今はお前の方だ。ほら続きやるぞ」

「やりたくないだとか言って起きながらやっぱりやってくれるんですね」

小悪魔じみた笑みを浮かべるサクラ。

く、くそつ・・・可愛いじゃないか・・・

いや、抑えるんだ俺の精神。

「アホ言え。やらなきゃお前またメル突き刺すだろ？」

「まあそうですけど」

やるのかよ。

「そう言えば私魔法とか教えてもらってないですけど大丈夫ですかね？」

「あー・・・あー」

魔法。この世界で生きて行くためには必需品のようなものだ。

妖精の尻尾に入っている以上これから先困難にぶち当たることは必須。

「そうだな・・・教えておくとするか」

「本当ですか!?!? やったー!」

ピョンピョンとうさぎみたいに跳ねるアホ弟子。

しかし何から教えるべきか・・・というか魔力とかも見なきゃいけないしな。

「サクラ、ちょっとこっち来い」

「へ？どうしたんですか？」

「魔法を教えるに当たってまずお前の魔力を見る」

写輪眼発動すればいい話だろと思う方がいるかもしれないので言っておくと写輪眼で魔力は見えても大雑把にしか見えない。

強いか弱いかの二つだけ。詳しく見るためにはその手の魔法に詳しくならなくてはならない。

その手の魔法に詳しいのが俺である。

何故かと言われるとネタバレになってしまいが話してしまおう。

妖精の尻尾の30巻ぐらいから34巻ぐらいまでであるエドラス編。

エドラスという場所に性格は反対だが全く自分と同じ人間がいる。

ようはパラレルワールドと呼ばれるものだ。

俺は幼い頃この世界で生き抜くためにどうしようかと考えた結果エドラスの俺の力を借りようと考えた。

その結果覚えたのは憑依魔法である。

説明が下手なのでアニメで例えさせてもらう。

F a t e U O Wにて最終話近くに主人公と、その主人公の未来の姿が戦うシーンがあるのだが勝ち目が無い未来の主人公にどう対抗したかというと前世の自分を降霊、憑依させることでかつての技術を習得する魔術がある。

その魔術によって未来の主人公の技術を真似し、対抗したわけである。

俺はこれに良く似た魔法を使ってエドラスでの俺の技術を得るわけである。

ここでサクラの魔力を見ることが関わってくるのだが、上記の魔法を覚えるために自分の構造を知る魔法を覚えなければならなかったため使えるようになったわけだ。

分かりにくかったらごめんね。

意味ワカンねえよ作者〇ね、と思う方はF a t e U B Oを見よう

！

「んじゃちよつと手エだせ」

ズイと伸びてきた手に指を置く…。こいつ肌スベスベじゃねえか…！

潤いたっぷりだよ！

「どうしたんですか？」

「えっ!? いや、なんでもないってばよ！」

思わず某忍者口調になってしまった。

気を取り直して…

「——構造解析」

俺の手から電波じみたものがサクラに流れる。

これによって身体を解析することが出来るのだ！

サクラ・アガートラム

身長：161cm

体重：(ry

B：77

——

「お前胸77って結構あるな」

「なっ!? この——」

しばらくの間綺麗な川を見ていてください

(ただし文字なので写すことは不可)

「しゃ、続ちゅじゅきじゅるから」

「…次やったら斬りますからね」

ぼっこぼこにされた。

ドラ○もんのジャイアンにやられた後ののび太みたいになってる。

この弟子怖い。ブツ○マーケットで買い取ってくれないかな…  
「——構造じょうが解析いせき」

もう自分でも何言ってるのな分かんねえな。

属性：風

総魔力数：397

筋力：89

俊敏：102

おお！総魔力数が俺より多い！

ちなみにこの世界の平均的な魔力は200ぐらいである。

俺？俺は… 100だよ。

ヤメテエ！そんな哀れみの目で見ないでエ！

——アガートラムの神域に侵入者発見。

あれ？なんかおかしいぞ？

——反術式展開、消滅を開始します。

「うおおおおお!!?」

「ひい!!何ですか急に大声あげて!!?」

魔法が弾かれた。

パソコンで言うのならウイルスバスターのようなものだ。

サクラの体内構造を解析している時に何かに触れてしまったのだ  
ろう。

「サクラ… お前自分に対魔法の術式とかかけてあるか？」

「私魔法使えませんけど…」

「だよなあ… それじゃおかしいよな…」

アガートラムの神域… 聞いたことない単語だった。

「それより、私の魔力はどうだったんですか？」

「ああ… そうだな。分からないことを気にしても仕方がないな」  
今度調べて見ようと、区切りをつけ座り直す。

サクラはその真正面に正座をしている。  
「結果を言おう。魔力はかなり多い方。結構強めの魔法とかも使える」

「本当ですか!? やったー！ 沖t「それ違う作品だからやめようねー」  
こいつ桜セイバーだと、同じツツコミを既に10回ぐらいした気がする… 心の中で。

今の止めなきや沖○さん大勝利ー！ ってたよね絶対。

「それでだ… ここからはお前の好みによるが… そうだな。例えるなら俺みたいな戦闘スタイルにするか、ナツやグレイみたいに大火力のスタイルでいくかどっちがいい？」

「… 悩みますね」

魔力が多いイコール選択肢も増えるわけだ。

無駄に魔法の本を読んだ俺なら教えることも可能になる… はず。  
困った時はギルドで聞けばいい話だしね！

「ちなみにお前の属性風な」

「… アルさんのようなタイプでお願いします」

「そうか。それじゃ身体強化系と攻撃系、どっちがいい？」

「攻撃系がいいです」

「なるほどね…」

攻撃系となるとかなり数が多くなる。

俺も風属性であるため他の属性よりも覚えているのだ。

「風属性の攻撃… 色々あるからなあ…」

カマイタチ、竜巻起こし、浮遊術、空中の酸素を集めたり無くしたり  
etc…

そんな事を考えているととあることを思いついた。

「なあサクラ。無属性魔法って知ってるか？」

「何ですかそれ？」

—— 無属性魔法

光、風、海、水、闇、土、雷、火の8つの属性のどれにも満たさない属性。

Fairy tailの前作であるRAVEにて登場した「緋の銀」と同じ属性。

分かる人なら分かる例えをするならF〇〇のシールドーのようなものだ。

もつと分かりやすく例えるならポケ〇ンのノーマルタイプ。

「8属性には弱点があったりするんだが無属性は別なんだ。有効な点もない代わり、弱点もない」

「へえー・・・その無属性魔法ってやつを教えてくださいませんか？」

「ま、そう言うことになるわね。取り敢えず今から教えてもらう技を実践するからよく見とけよ」

その場に立ち上がり掌を上にする。

これからする魔法・・・というか忍術と呼ぶ方が正しいのかもしれない。

不器用な俺が10年かけて完成することが出来たこの世界では俺にしか出来ない魔法である。

掌に魔力を集中させ、乱回転、威力、留めるを極めた魔力による究極の形態変化。

「——螺旋丸」

掌の少し上では球の中に台風が封じ込まれているかのようだ。

そう某忍者漫画の主人公が使う技の代名詞と呼べる必殺。

「というわけでこれを覚えてもらおう。俺がこれ覚えるのに10年かかったからな。頑張れよ」

「うへえ・・・」

そう言うサクラの顔はいかにも「面倒なのが来た!」と言う顔をしていた。

## 16 剣を作ろう 1

「ぬぬぬぬうー!!」

「プーン!」

午前10時30分。

俺は芝生の上で寝転がりながらサクラの修行を見ていた。

メルはサクラの応援をしているのか隣でピョンピョン跳ねている。

サクラの修行1は水風船を使った修行である。

螺旋丸に必要なものとして第一に回転が必要なのだ。黄金回転ではない。一定の方向に回転するのではなく乱回転の力が必要なのだ。修行方法はいたってシンプルであり手を使わず水風船を破裂させよ、と言うものである。

「ぬぬ… ああ、難しいですね!」

「当たり前だ。A級クラスの魔法だぞ?多分」

この回転の修行。俺がこの修行を終えるのに約5ヶ月かかった。

やり方は分かっているても難しいものは難しいのだ。それにこの修行を開始したのは当時5才。魔力が少なかつたため出来なかつたこともある。

「ヒントはないんですか?」

「これだから現代の若者は… すぐ答えを欲しがる」

「いや、アルさんも私と1歳差じゃないですか…」

言われてみれば。

まあ俺もNARUTO読んだから出来たのもあるしな… 見てなかったら多分なんも出来なかつた。

「ま、まあ魔導とは自ら切磋琢磨していくものであつて他人から「教えてください」あつ、はい」

仕方ないので立ち上がり水風船を手に乗せる。

「いいか、お前がやっているのは…」

水風船の中に魔力を込めると水風船が横に伸びる。

「こうなんだ。でもこれじゃダメなんだ」

「なるほど・・・」

「ではどうやってやるかと言うと・・・まあ自分で考えろ」

「ええ!??そこまで来て教えてくれないんですか!??」

「答えを教えちゃ意味がないからな。考えろよ、若者」

HAHAHAと笑う。

サクラは俺の服を掴んでグラグラさせて来たがそんなものはきかん。

ガヤガヤと談笑している時であった。

ザツザツとこの場がない足音が聞こえた。

振り返ると緋色の髪。

S級魔道士のエルザが、そこにいた。

「あつエルザさん。昨日ぶりです」

「ああ。修行中に邪魔してすまん」

「いえいえ、この人からちよつと聴き出してる途中だったんで」

「あれ?なんか俺悪者扱いされてない?というかサクラ・・・お前エル

ザと会っていたのか」

意外と言えば意外である。

いやギルドが同じだから会う確率が高いけれども・・・

「はい!と言っても昨日初めて会ったのですが・・・」

くく

昨日の15時・・・

「ミラさーん!フェアリーケーキお願いしまーす!」

「ふふ、分かったわ」

修行も終わり先に帰った師匠であるジョニイを見送った後、サクラはメルを連れてギルドに訪れていた。

フェアリーケーキ。それは週一で出される少しレアなケーキである。

普通のショートケーキであるのだがその上にギルドマークを型どったチョコが乗っているのだ。

ちよつとばかりのプレミア感的な何か味が味わえる。

「よかつたわね。これが最後だったのよ」

「やったー！沖ッ「ミラ！フェアリーケーキはあるだろうか!?」」

絶対に「○田さん大勝利ー！」と言わせない呪いでもあるのだろうか。

そんな事はさておき、S級魔道士のエルザが緊迫した表情でミラに聞いた。

よほど慌てていたのか額にはうっすらと汗。

「売り切れよ」

「

ガーン！という効果音がこれほど似合う女がいるだろうか？いや、いるわけがない。

エルザは近くにあった椅子に座り、ゆっくりと目を閉じた。

(負けた... 真っ白にな...)

明○のジョーのように白くなったエルザは動かなくなった...

見兼ねたサクラがエルザの顔とケーキを交互に見比べ、ケーキをエルザの前に差し出した。

「あの... よかつたらどうぞ?」

「... いいのか?」

色素のないエルザだがサクラがこくりと肯定を表すと一瞬のうちに色素を取り戻し、サクラとエルザの奇妙な友情が芽生えたのであった！

回想終わり

くく

「というわけです」

子供か！と盛大にツッコミたい気持ちがあったがそこがエルザの女の子さというのは原作で知っている。

グツと喉でこらえて何食わぬ顔して話を戻した。

「そ、それでエルザは何をしに?」

「ナツとルーシイがS級クエストに行つてだな…」

「ああ… やっちゃったんですね」

俺の知らない間でガルナ島編が始まっていたのか… という事は今頃グレイも拉致られている…。

「あのエルザさん。S級クエストつて何ですか？」

「二階にあるS級魔道士専用のクエストでな… 一階に置いてあるクエストより遥かに難しいクエストだ」

「モン○ンの下位、上級、G級みたいなもんだ」

「○ンハンつて何ですか…？」

おっとこの世界にはなかったんだった。

つい口から出てしまった。

「とまああの馬鹿がやってくれたんでな… 連れ帰るのを手伝って欲しかったんだが…」

「だが？」

エルザの目がふと斜め下に動いた。

その視線の先を見てみるとサクラの腰にかかっている一本の木刀。

「サクラ、お前は自分の剣を持っているのか？」

「え？今のところはこれですけど」

銀○の銀さんのような木刀。

俺がそこら辺の店で買って来た木刀である。

260Jだった。

エルザはふーむと顔を悩ませる。

てつきり俺たちをガルナ島に連れて行くのかと思ったが違うようだ。

「ジヨニイ、二つ私からの依頼を頼んでくれないか？」

「まあ凄い怪物倒しに行けとかいうのなら無理ですけど、簡単なやつでしたら」

「そうか。ならまず一つ目は——」

エルザの真横にゲートオブバビロンみたいな穴が空き、そこから剣と鎧が滝のように溢れ出た。

その数ざつと100を超えている。

「この鎧と剣を修理に行ってもらいたい。お金は出すから安心しろ」  
「これ全部使ったんですか…。」

炎帝の鎧やら、海王の鎧、はたまた知らない鎧や剣。

「S級クエストで少々傷ついてだな。それにジヨニイ、お前との戦いで金剛の鎧が危うく壊れかけたんだぞ?。」

「うっ」

それ言われちゃ何も言えねえぜ!

「そして二つ目だが… サクラ、剣を作ってこい」

「ふえ? 私ですか?。」

「そうだ。剣というのは早いうちに握らなければ慣れないからな」

一理あるな… 俺も神様から貰った刀に慣れるまで時間かかったし。

「そうだ。修理しに行くのはいいんですけど何処に行けばいいんですか?。」

「マグノリアを西に出て真っ直ぐにあるパークストリートと呼ばれる地域にあるハートクロイツという店だ。パークストリートは武器の街でな…。そこでサクラの剣も打ってもらうがいい」

「パークストリート…なるほど、そう来たか」  
「?。」

サクラは? マークを浮かべて俺を見たが何を思ったかは恐らく分からなかっただろう。

パークストリート。

それはRAVE2巻から3巻までかけて書かれていた物語に出てくる街だ。

プルーやエドラスエルザが使っていた魔槍テン・コマンドメンツが登場したことからフェアリーテイルとRAVEの関係は浅くはないのだろう。

と言ってもダークブリングと呼ばれる強力な力を与える代わりに破壊衝動に襲われる石はないのだが……。

さて、ここでパンクストリートの話をしよう。

パンクストリートにはムジカと呼ばれる有名な鍛冶屋がいる。

どうせサクラの剣を作るならムジカにしようというのが俺の計画である。のだがRAVEの方だと爺さんだったからなあ……作ってくれるかが心配である。

「ま、行ってからだな」

エルザの鎧を一時的に俺の換装の空間にいれ、エルザから貰った金も財布の中にしまっている。

「アルサーン！準備出来ましたよー！」

「おう、今行く」

いつも通り元気なサクラに返事を返し、面倒ながらもパンクストリートへと行く汽車に乗るのだった。

## 17 剣を作ろう 2

パंकストリート。

原作のRAVEでも見た通り街中には悪党みたいなやつから武器大好きみたいなやつまで勢揃い。

まさに武器による武器のための街である。

「うわぁー・・・凄いですね」

「だな。さて、取り敢えず昼飯まだだから先食いに行ってからエルザの鎧を預けに行くか」

9時発の汽車に乗り現在の時刻は12:30分。

丁度お昼時なのである。

観光街でもあるパंकストリートは料理店も多い。ふと視線を左右するだけで見つかる。

「よし、美味いか不味いか知らんがあのお店にしよう」

「うわ、大丈夫ですよ？」

「大丈夫だ、問題ない」

フラグではない・・・と信じたい。

ちよつとドキドキしながら店に入ると俺の不安とは予想外に結構人が入っていた。

ウェイトレスに席を案内され俺はグラタンを、サクラはランチセット、そしてメルはいつものアメを食べる。

「む、美味しいですね」

「プーン」

確かに美味しい。

グラタンなんてそう食べる頻度が高くないので尚更美味しく感じるの俺の気のせいだろうか・・・グラタン作るのはいいけど片付けが怠いよね。

「プーン」

「メル、お前はいつもと同じやつだろ」

バリバリとアメを噛み砕くメル。  
飽きないのかと思つた時だった。

店の中で何かを蹴るような音が響いた。

「かあつ——！何でこの店には酒が置いてない！」

振り返つてみると俺の2つほど後ろの席で80歳ぐらいの爺さんが自分で持つて来たと思われる酒をグビグビと直飲みしていた。

よほど飲んでいたのか顔は真っ赤に染めあがっていた。

「昼間つから何してんだあの爺さんは……」

いい迷惑だ。

飲むなら夜にしてくれと思つて前に向いた時だ。

何かが足りない。

「あれ……なんか足りなくなかないか？」

「え？何がですか？」

「いや分からないんだけど何かが……」

財布とか重要なものではない。

身近にあつた何かが……

「おおお主！よく飲むのおー!!」

「プーン」ゴクゴク

「お前かよ!!」

持つてたお手拭きを思わず地面に叩きつけてしまった。

何かとはメルだった。

机の端に座っていたせいか目に入りにくかつたのだろう。

いつの間にか移動して酔っ払い爺さんの席まで移動し、爺さんの酒をゴクゴクと飲んでいた。

「おいメル！何してんだよ!?」

「プーン」

「おお、お主も飲むか？」

「飲むか！」

俺は酒は飲まない人間なのだ。

未成年、飲酒、ダメ！

ただしこの世界では俺は酒を飲んでも大丈夫な年齢である！

「全く最近の若い奴とききたらやれ酒はマズイじゃ何じゃ… 飲まんか！」

「いやしらねえよ」

「プーン」グビグビ

「お前は飲むな！犬だろ!!？」

「犬!!？」

爺さんがコロコロコミックのギャグ漫画みたいに目を飛び出させて驚きを露わにした。

「カツパじやないのか…？」

「んなわけないだろ!!」

そこでようやく俺は爺さんの顔を直視することになった。

長い髭を一つに結わえ、髪の毛を一本にまとめ、左手には8部音符に十字架を足したかのようなタトウ。

「爺さん…もしかしてムジカか？」

これには爺さんもびっくり。

ポリポリと頬をかき、面倒くさそうな目で俺をみてきた。

「誰から知ったかは聴かんが… 何用じゃ」

「率直に言おう。剣を作って欲しい。あいつの… そしてメル、お前はいい加減に飲むのやめろ」

俺は最初にサクラに指をさしたあと、メルに指を指す。行儀が悪いが許してください。

メルはプーンと言いながら空になった瓶をコトンと置いた。

… 全部飲んでやがったのか。

「あの嬢ちゃんか… 確かに見込みはある」

「なら——」

「だが作らん」

「…」

RAVEではハルのために作り直したテン・コマンドメンツが最後の仕事と言っていたからこうなることは予測していた。

「ちなみに理由を聞いても？」

「・・・」

ムジカはずっと膝の上に置いていた右手を机の上に出した。  
その親指には包帯でグルグル巻きに――

「・・・」

「釘打ってたら金槌で逝っちゃった☆」

「☆じゃねえええええええ!!ええええ!!まさかのそんな理由!!??  
もつとカツコつけようや!!??」

俺の予想してたやつと正反対じゃん。

ただのギャグであった。

何だか一気に冷めた・・・

「仕方ねえ・・・ サクラ、別の店に探しに行くか」

「そうじゃ。一つ聞いた話なのだが聞いていかんか？」

「・・・ 内容次第」

「1人の鍛冶職人の話じゃ。そう長くはかからん。お嬢ちゃんもこつちに来なさい」

「あつ、はい」

俺が奥に座り、その手前にサクラ。

メルは定位置の机の上。

「このパンクストリートを南から出て真っ直ぐ行ったところに大きめの山があるのは知ってるかね？」

「確か・・・ 来るとき見ましたよね？」

「ああ、平地の中に一個だけドーンってあつたな」

パンクストリートまでに来る道は基本的に荒野みたいになっており、気が非常に少ない。

その来る途中に大きな山がポツンと立っていたのだ。

「そこに腕の立つ鍛冶職人がおるらしいのだが・・・ ワシはあつたことがないからのう」

「・・・行ってみるだけの価値はあるのか？」

「知らん。それにその鍛冶職人は冷たい、と噂に聞いた」

「うわあ… 難易度高そうですね…」

どうしたもんかと考えてしまう。

市販の店で買い、ハズレを引いたら戦闘面でキツくなるし、更に腕の立つ鍛冶職人を探してる暇はない。

更に問題なのが早く帰れなければならぬということだ。

ナツ達がガルナ島から帰った瞬間に幽鬼の支配者編が始まる。

別に幽鬼の支配者編が終わるまでここにいてもいいのだが罪悪感がある。

「賭けで行ってみるか…」

「ほう行くのか」

「ああ、悩んだってしかたないし」

早速荷物を持ち机の上に金を置く。

「情報代ということでお金は払っとくよ。あと爺さん、酒飲みすぎんなよ」

「これが年寄りの娯楽なんじゃが…」

エルザの鎧をハートクロイツに預けた後だ。

ムジカの爺さんが言っていたデツカい山の正式名称は「星振りの山」というらしい。

昔流れ星が落ちてここに山が出来たと伝説があるらしいのだが流れ星が落ちて山が出来るっておかしくね？というのが俺の考えである。

パンクストリートを出て真っ直ぐ行くこと約15分。最近魔導四輪の免許を取ったのでレンタルして山まで来たのはいいが魔力が少ない俺は15分走らせただけでも結構疲れたりしている。

「アルサーン！こっちですよー！」

「プーン！」

「ちよつ、まつ… ゼエ… 疲れ、が…」

散々走らされようやく終わったと思っただらもう一周走らされるよ  
うな感覚に近い。

人間というやつは希望の後の絶望が一番辛いものなのだ。

俺は生まれたての子鹿のように震えた足で山を登る。

死にそう。

「あいつら… ヒデエ…」

こちらら死にかけていうのにドンドン先行くなよ。

「む、ここっぽいですね」

「あの… 頼むからもうちよつとゆつくり行こうぜ…？」

「善は急げ、です！ 行きますよメル！」

「プーン！」

M☆A☆T☆T☆E！

某カードゲームのキング（笑）みたいに言ってみるが無駄だった。

サクラとメルは山にある洞窟っぽいところにズンズン先に入って  
行った。

「あいつ自由すぎだろ…」

天真爛漫な女の子は好きだがアレは天真爛漫すぎる。

一様何かあってもいいように神様から貰った剣を片手に俺も洞窟  
内に入った。

洞窟内は水晶のようなものが所々に散りばめられており、幻想的と  
いう言葉が似合っていた。

先に行ったサクラを見つけるために写輪眼で魔力の後を追いか  
ける。多分写輪眼がなかったら洞窟内で彷徨ってた自信がある。

「あいつらどんだけ先行ってんだよ…」

やれやれとため息をつきながら歩くこと2分。

やっと外の光のようなものが見え、洞窟を抜けた先には小さな穴倉  
の中に一つだけランプが置いてあるRPGゲームのセーブポイント  
感が出ている所についていた。

世界観だけで言えばダ○クソウルっぽいかも。

「——誰だ」

光が一つだけの世界。

そこに聞こえたのは凜と響く声。

それと同時に風をきる音が聞こえた。

瞬時に背後を向き伸びて来た拳を逸らし、裏拳を叩き込む。

しかし俺の拳は見事に逸らされ、姿が見えないが距離を取られた。

「誰だつて聞いて攻撃するのはずるいぞ」

「聞いただけマシと思え」

再び戦闘が始まる。

簡易魔法術を発動させ、岩の因子を地面に送り込み、少しの間だけ地面を操作する。

走ってくる人影向けて岩を拳のように丸め突き飛ばす。

これで何か技を使ってくれたらありがたい所ではあるが…

「竜人奥義——黒竜三絶」

俺が飛ばした岩が剣も何も使われずに3つに切り裂かれた。

そこが驚いたのではない。

今こいつはなんで言った？

竜人奥義だと？

「あんたまさか…！」

「私の正体に気づいたのかい？」

かなり先に出てくるエルザの母のように竜の因子を体に移植したわけではない。

人の姿をしているが竜の因子を引き継いだ人非る者。

——その名は竜人

「っ！ヤバッ!?」

「——遅い」

驚きで防御が一瞬遅れた瞬間、トンと拳が俺の腹に叩き込まれる。

決して重たい一撃ではないが俺はまるで金縛りにでもあったかのよう  
ようにその場から一步も動けなかった。

「…なんだったか…」

まりゆういしにあらず 魔竜まりゆう 匪石ひし だったか…」

「よく知ってるじゃないか」

「アルサーン…」

視線だけを動かし声の聞こえる方を見ると俺と同じく全く動くことができないサクラがいた。

つまり俺の来る数十秒の間に俺と同じように魔竜匪石を食らわせたのだろうか。

「確かこの技って人間大には難しいんじゃないか？」

「ふん、難しいだけだ。出来ないというわけではない」

「なるほど・・・」

感じられる魔力から見て相当な実力者であることが分かった。

この様子だと恐らく3分は動けない。

「で、どうするんだ？煮て食うのか？」

「バカ言え。私は人なんか食べんよ」

そう言つて未だに顔の見えない女の人は暗い洞窟の中にあるテントの近くにまで行き、金槌を握った。

まさか撲殺!??と思つたがそんなことはせず、床に座り地面に置いていた剣を叩き始めた。

「アルさん・・・どうなってるんです？」

「職人の気持ちなんて俺には分からん・・・」

キーン、キーン、と鉄を打つ。

時おり口から炎を出して剣を温める。

そこは口なのかよとツツコンではいけない。

この作業を繰り返すことおおよそ5分。

丁度麻痺が解除した時に謎の人影は立ち上がった。

「それで何の用だい？」

「言いたいことは山ほどあるが取り敢えず用件だけ言っておく。後ろにいるや「帰れ」エエ・・・」

最後まで言っていないのに！

「私は人のために働くのが嫌いだね。そういうわけで帰んな」

ここにナツがいるなら「ふぎけんじゃねえよゴラアアア!!」とかいうのだろうが俺はそんな面倒なことは嫌いなのだ。

無理だと分かったら無理、大丈夫なら大丈夫。これさえ分かればどうしたらいいのか分かるものだ。

「仕方ねえか… サクラ、帰るぞ」

「ええー…でも」

残念なのは俺も同じだ。

けどここで粘っていたら時間の無駄なのだ。

それにこんな○ークソウルの世界みたいな所で長居はしたくない。

「待て、サクラって言うのか?」

「えっ、そうですけど…」

この時ようやく謎の人影の全貌が見えた。

女性にしては高身長であり、猫のような鋭い目つき。全体的に赤の服を着込んでおり、その髪も真紅に染まる赤。

赤ではないと言えるのは金に近い黄色の目だけだ。

そして何より胸がデカイ。胸がデカイのです(こ→こ←重要)

「その男。あんた名前は?」

「… ジョニー・アルバーンだけど、それが何か?」

「決まりだ、やっぱり剣を作ってやる」

「えっ?」

## 18 剣を作ろう 3

「ひとまず私の紹介をしよう。私はルシア・アンダーブレードだ」  
… アンダーブレードって何処かの世界の吸血鬼みたいな名前だな。

名前にアンダーブレードって俺、物語シリーズ以外に初めて聞いたぞ。

「私はサクラ・アガートラムです」

「ああ、知ってるさ」

「知ってる? どう言うことだ?」

ルシアは横に置いていた古びた本を手に取り、俺に投げ渡してきた。

写輪眼で本を見てみるとかなり古びていると言うのに魔力が濃く漂っていた。

「私の家に伝わる一冊の本だ。54ページ目を見てみな」

「54ページ…」

ペラリペラリと1ページずつ開いていくがかなり前の言葉なのか全然分からないし、本自体ボロボロなので中がゴチャゴチャしていて分かりづらい。

こんなので何かあるであろう54ページを見ても分かるものなのか? と思いながら見ていくとついに54ページにたどり着いた。

「これは… 家系図か?」

54ページには両方のページを使って樹形図のように名前が記されていた。

「しかし何でまた家系図?」

「一番上見てみな」

一番上。樹形図の根元になる部分である。

上に目線を辿ると2本の名前らしきものと、その片方の名前の横にさらに一つ名前。

「…なんて書いてるんだ？」

「ああ…確か言語が違うんだったな。この左側が私の祖先であるグラディウス・アンダーブレード」

「何それ強そう」

「そしてこの右の名前が…」

「——ジョニイ・アルバート。あんたの名前だ」

「はい？」

「そしてその横に書いてある名前がサクラ・アガートラム」

「えっ？」

「どう言うことだつてばよ…？」

意味不明なんですけど。

「同じ名前なんじゃないのか？」

「私もそう思ったんだけどね、次のページ見てみな」

ペラリと開く。

「なっ…！！？」

次のページには似顔絵が描かれてあった。

アホそうな顔、前を開けたジャージを着込み、片手には真つ黒な刀を持った少年と桜セイバーの髪を長くした少女の絵。

「俺じゃん！！？」

「何で私まで…？」

「知らん、けどジョニイ・アルバートがうちの祖先の婿扱いになってる」

「アルさん…まさか結こ——」

「してないしてない！！俺は今まで彼女なんていたことないんだぞ！それいだ！」

「このグラディウスって人生まれたの400年前じゃねえか！」

辻褄が合わない。

俺がこの世界に生まれたのはわずか17年前。

その間にグラディウスとか言う人にはあつてないし、俺たち、夢の中で入れ替わってるう?!?的な映画を巻き起こしたわけでもない。

「そこだ、そこが疑問なんだが私にとっては道に転がる石ころなみにどうでもいい」

「いや、結構気になるだろこれ…。」

「私は祖先からサクラ・アガートラム。あんたの剣を作れって書かれてたからね」

「作ってくれるんですか?!?」というか何で?!?」

「知らん。私は作れと言われただけだ」

ただし、と言葉を紡ぎ何かを投げた。

サクラの手に落ちたそれは一本の剣だった。

何の飾りも能力も持つてない剣。

「これは?」

「持ったものの心を表す剣だ。説明は面倒だから向こうに行つてから聞きな」

「えっ、それは——」

サクラの意識が消えた。

電池の切れたおもちゃのように急に行動を止め、地面に倒れこもうとしたのを間一髪で受け止めることに成功し、顔を見てみると目を開いたままヤンデレなどによく見られる目のハイライトが消えている状態だった。

「何したんだ?」

「私は私が認めたヤツしか剣を作らない主義でね。あの子には今から精神世界で殺し合いをしてもらう」

「精神世界で?」

頭の中にふとある漫画が思い浮かぶ。

俺が前世で死んだ結構前に連載していた「お前の魂いたたくよ!」系の漫画。

はつきり漫画の名前を出すとソウルオーター。

その中に出てくる主役の相棒が精神世界で戦ったシーンをふとよ

ぎった。

「その… 精神世界で死んだら… こつちの世界でも死ぬ、とか？」

「当たり前だね。精神が死ぬ、ということは魂がなくなるのと同じだ。魂が抜けた人間は人間の皮を被ったただの肉塊さ」

「なんか今の寄生獣ありそうなセリフだな…」

「まあチャンスはあげてるよ。100回戦って1回でも倒したらあの子の勝ち」

「… というか相手は誰なんだ？」

「ボリボリと面倒くさそうに頭をかくルシアはあー、といい渋々と答えた。」

「現在最も尊敬、敬愛、愛情などといった感情を持つもの。ま、多分だけどあんたじゃないの？」

「ふーん…」

「俺かあ… 可能性がないわけではないが親として見てもらったルチネスさんの方が出てきそうな気がするが…」

「いつぐらいに終わりそうなんだ？」

「100に設定したからね… 約一週間はかかるとみていい」

「長つ… というか一週間もの間飯や風呂はどうするんだよ？」

「安心しな。この剣を握って精神世界に行けば冷凍状態になる。その間におっぱいとか触っても硬いだけだからな？」

「こいつ… 俺の心を読みやがった！」

「この後ルシアに金槌で思いっきりしばかれた。痛い。」

「…」

「サクラ・アガートラムは自分の状況が理解出来ていなかった。」

「ルシアから渡された剣を握った途端に景色が変わったのだ。」

「薄暗く洞窟から、真っ白で足元に少し水が溜まっている空間に。」

「そこには何も無い。果ても無い。あるのはサクラの目の前に突き」

立つ一本の剣。

「何ですかこれ？」

反射的に抜くとずっしりとした感覚が手に伝わった。

木刀しか握ってないサクラにとっては剣は重たく、長時間は持つてられないものだ。

「重い…これじゃ2分が限界じゃないですか…」

試しに振り回してみるが体を持っていかれバランスが崩れてしま  
う。

そんなことを繰り返すこと5回といったところか…突如としてサクラから5メートル離れた先にゴポリゴポリと水が沸騰したかのように泡が吹き出した。

泡は徐々に集まり浮き上がり、人の形に近づく。

「何ですかこれ…?!?!」

訳も分からないまま精神世界に行かされたサクラにとっては恐怖でしかないだろう。

しかしサクラは目の前に写る光景を見て安堵した。

——いや、安堵してしまったというべきか

「アルさん！」

彼女の師であるジョニイ・アルバートが立っていたからだ。

人間というのは恐怖に向き合った時誰かに助けを乞うものだ。

しかもサクラは戦いなんて一度だってしたことのない少女だ。

警戒もする事なく、ジョニイに近づいた時だった。

「えっ…?」

「…」

いつの間にかジョニイの手には剣が握られており何も言わずにサクラを斬っていた。

「アル、さん…?」

「…」

ドン、と強い衝撃。

胸元には突き立てられた剣。

こうして精神世界の戦いが幕を開けた。

## 19 剣を作ろう 4

「そういえば…」

カアンカアンと金槌が鉄を打つ音と炎がバチバチと鳴るだけの空間、暇なので俺はルシアに話しかけていた。

「あのサクラに渡した剣って何処から出したんだ？手に持ってなかっただろ」

「あんたよく見てるね… まあ教えても意味ないけど教えてやるよ」  
「助かる」

剣を水で冷やし、座る向きを変えて俺の真正面になるように座る。こういうところは結構優しい。

「私の祖先是竜だ。剣を司る竜、剣竜グラディウス」

「まさかその力を？」

「だと思っただけだね…」

そう言いルシアは手を出した。

青い光が手の中に集まり、ゆっくりとだが剣に似た形になり、最後には一本の剣となった。

完全にアレだ。アイアムザボンオブマイソード的なあれだ。

「剣竜グラディウスは無から剣を作り出し、剣と共に歩んだ竜。そこにジヨニイ・アルバートと呼ばれる人間が結婚したことで生まれたのが竜人」

「… ということはさっきサクラに渡した剣は」

「ああ、私が作ったのではなく生み出したものだ」

「なるほどねえ…」

竜と人が結婚して竜人が生まれるものなのか…？

というかエクスカリバーとアヴァロンを接合させるあの行為はどのように行っただろうか？

と様々な疑問が残るが当然分かるわけもない。

「さて、と… 暇なんで体でも動かしてくるかな…」

「ブーン」

「メルお前も行くか？」

「ブーン！」

メルを頭の上に乗せ洞窟の外に向かう。

洞窟の壁際に眠るサクラに目をやると、以前変わらないまま目がヤンデレ状態だった。

「早く戻ってこいよ」

頭をポンポンと軽く叩き洞窟を後にする。

これに限っては俺にはどうしようもない。

これはサクラの問題なのだ。ここで負けるのならば所詮はその程度。この先生き残れない。酷いと自覚しておるが俺はそう思うのだ。でもまあ……

こいつがいなきや俺も暇だしな……。

はっ、これって……恋？（違うような気がする）

「どうした？その程度か？」

「ハア……うっ……！」

56回目。

ただひたすらに真っ白な世界には2人だけが存在し、55体の肉塊が足元の水より下に浮かんでいた。

それらは全てサクラだった。

55人のサクラは骨を折られ、斬られ死んだ。

青く輝いていた水は何回目からか真っ赤な血の色になっていた。

56回目もその道を辿りそうになっていた。

肩から袈裟に斬られ傷口は内臓まで達し、右肘の骨は砕かれた。精神世界なので痛みはないが、酷く麻痺しているような気分だ。

大量の血を失ったためか目の前がボンヤリと揺らぐ。

「まだ…です…！」

「そうか」

剣を構えたジョニー。

その目にはただ殺意しかない。

55回も殺されたので分かる。

なくなりそうな意識を体に封じ込め、剣を支えに立ち上がるが全く力が入らない。

「見てられん。やり直せ」

剣が振られ、首が飛んだ。

60回目。

ジョニーの剣を振る速さは当然ながらも速く、重い。

サクラも負けないように振っているが余裕を持って弾き返される。

「何でこんな簡単に…！」

「分からないのか？」

ブンツ！と虚像を残しながら迫る斬撃を防げないと分かったサクラは、屈みこむことで凌ぐ。

「——そこだ——」

千載一遇のチャンス。

完全に勝利を確信した。

しかし油断は時に不幸を招く。

「——甘い」

踏み込んだ足が着地する寸前に足を払う。

柔道で“燕返し”と呼ばれるカウンター技だ。

よほどの達人でなければ成功しない技ではあるが、成功すると100%と言ってもいいほど相手はよろける。

もちろんサクラも体の体勢を崩してしまい狙いが外れ剣はジョ

ニイの頬を少し裂くだけだった。

「まだまだアー！」

これを逃すわけには行かないというサクラの心が足を動かした。崩れる足を横に踏み出すことでバランスを取り直し、そこからの袈裟斬り。

回避は不可能な距離。しかし相手は精神世界とはいえどもジョニイである。魔法より武を知り得たジョニイにとってこの程度の攻撃など文字通り朝飯前なのだ。

「――フン」

剣ではなく、手を伸ばしサクラの腕を内から抑えつけ、そこから流れるように手首の関節を取り、一気に極める。

そのまま押し倒すように前に移動すると肘、肩の関節も極まり地面に倒された。

「何で…!?？」

「お前の剣は軽い。だからこんなにも簡単に倒される」

「…どういうことですか?」

「剣とは単純な力や強さで決まるものではない。想いの力がなければただのハリボテだ」

「想い。剣に何を込めるか。」

「それがサクラにはない。」

「――もし俺に勝ったとしてもそれがなければお前は偽物だ」

72回目。

サクラは何のために剣を振るうか分からなくなっていた。

(私は…何を目指しているんだろう…?)

攻撃を受けながら考える。

片腕が切り落とされたが思考は消えないままだ。いや、元より60

回目から彼女は戦うことはやめている。

ただ自動防御に徹しているだけなのだ。

しかしそんなものはジョニイには通用しない。普段ならしないが弓を射るように大きく腕を引き、飛び出した矢の如く腕を前方に突き出す。防御するも剣を砕かれ、自らの身も砕かれた。

88回目。

答えは見えない。

暗闇の中を歩いているようだった。

「… 何で、私は」

「… 過去を振り返れ。剣を握ったきっかけは何だった？」

「剣を握ったきっかけ…？」

ジョニイは剣を下ろしていた。

諭すように言う言葉はサクラの中で反響する。

「何かを守りたい、誰よりも強くありたい。そんなものでいいんだ」

「アルさんはあるんですか…？」

純粹な疑問だった。

あんな気怠気でいつも本気を出してないような師匠にもあるのか、と。

「俺はお前が作り出した幻。答えは分からんがきつとあるだろうさ。じやなきやあんな目は出来ない」

「…」

「さあ、お前の番だ。お前は何を望む？」

思い出すのは月下に黒く輝く刀を持った景色。

100人を相手にし無傷で1人立っているのはとてもかつこよくには見えない男だ。

上下にジャージ、ボケーつとした目。

片隅で縛られていたサクラに赤く光る双眸を合わせた。

“大丈夫か？サクラ？”

魅せられていた。

その剣に、強さに、速さに。

ただ生きるためだけに追求されたその剣に酷く目が虜になっていたのだ。

「はあああ!!」

「——っ!!」

剣を振るう。

ジョニイの剣とサクラの剣がぶつかり合った瞬間、爆発じみた衝撃が起こった。

ジョニイは驚いた顔をしていたが、すぐに分かったのか笑みを浮かべた。

「見つかったか?」

「はい。私は——」

あの姿を見るだけでは想いは止まらない。  
ならば横に立てる存在になろう。

「——あの人の横で並べる存在になりたい」

「そうか。だがそこ前に俺を倒さなければならぬ。殺す気で来い」

「言われなくても... 88回分のお返しです」

99回目...

「うっ...!」

「惜しかったな... が、俺の勝ちだ」

互いに譲らない戦いだった。

その証はお互いの傷に現れ出ている。

今まで傷を負わなかったジョニイだが至る所に傷口がある。

サクラも傷があり数を見ればジョニーよりも多い。

「まだ…まだ…！」

立ち上がるサクラ。

剣を平晴眼に構える。

手足は斬られてないが出血が酷い。

故にこの一撃に全てをかける。

「行くぞ、サクラ・アガートラム。この一撃手向けとして受け取れ」

「そのセリフそのまま言い返してやりますよ」

空気が震えた。

ジョニーが最速の一撃で迫る。

今のサクラにそれを迎撃する手段はない。

ならば今を超えろ。

その心に反応するように、サクラの手首から肘にかけてまで桜色の模様が現れた。

そのの同時に心の中で何かの音が響く。

——アガートラムの神域を一部解放します。

「——桜花七閃、一ノ型」

莫大な知識が頭の中に入ってくる。

まるで元から知っていたかのような奇妙な体験だった。

剣士、リンネ・アガートラムが生み出した相手の攻撃を活かすことで、2倍3倍にして相手に返す究極のカウンター。

逆刃で相手の剣をいなすと同時に、相手の威力を自身の刃に乗せ、更に自身の速さで上乘せされた回避不能の技。

「——天空桜」

下から上へと跳ねあげられた刃はジョニーの体に直撃し、風に煽られ空に舞い上がった桜のように打ち上げられた。

## 20 師匠もとい妖怪ジジイ

「まさか帰ってくるとはな…。」

「いやあ、危なかったです。99回目でやっと…。」

俺が洞窟に帰ってきたらいつの間にか復活していた。

因みに今日はサクラが精神世界に飛んでから5日立っている。

そろそろギルドに帰らないとおそらく幽鬼の支配者編が始まっている頃だ。

多分ナツ達も今頃リオン達と戦っている頃だろうし…。

「相手は誰だったんだ？」

「アルさんです…。99回殺されました」

「あんた酷いね」

「いや俺やってねえよ！」

精神世界の俺よ。サクラを殺しすぎだろ…。月詠の中で72時間殺され続けたカ○シ先生と同じようなものだろ？

それは酷い。

「それでどうやって勝ったんだ？」

「あんまり覚えてないんですけど…。こう、知識がパワーと頭に入ってきて、それを使ったら勝てました」

「何じゃそりゃ」

漫画でよくあるやつだな。

仲間パワー！だとか隠された能力！みたいな…。やっぱこの世界何でもありだな。俺にもドラゴンフォースを使えるようにしてください。あ、俺写輪眼とか持ってたな☆

「どれ、剣を貸せ」

「あつ、はい」

サクラの手から、ルシアの手の中に渡った。

ふうむ、と声を漏らし刀身を観察し、剣を食べた。ガブガブムシヤ



が いいのだ!

だって最近思ったんだけどララバイ編でロビンとかいうやつ原作  
で出て来た記憶がないもん!

うわあ... 実は幽鬼の支配者にめっちゃ強い敵とか増えてなけれ  
ばいいんだけど...

俺だけ先に帰るか... ?

いや、サクラが許してくれるかどうかだよな...

「楽しみですねアルさん!」

無理だああ!!

こんな笑顔されたら無理に決まってるだろお!

「なんだいアンタ? まるで早く家に帰りたいみたいな顔してるね」

「へっ!?? そんな顔してたかなあ... ハハハハハ...」

何でこの人俺の心の中を見抜くのが上手なんだ...!??

しかし困った。本当に困った。

テストでペンと消しゴム忘れたぐらい困った。

「何かあるのか?」

「... いや、その、何でもないというか... 何でもあるというか...」

うおおおおおお!!

思い浮かばねええええええ!!

3分後...

「もういいや」

結論はこれである。

だってどうしようもないし、俺いてもさして変わらないし。そもそ  
も未知の敵が来るのかどうか不明だからな。

剣作りの見学でもしておこう。ついでに剣(けん)と見(けん)で  
ダジャレみたいになっている。面白い(白目)。

「何だか分かんないけど... 取り敢えず私はこれから作るからいつも  
通りにしてな」

「分かりましたー。あ、剣作るのが見ていいですか？」

「… まあいいよ」

やったー！と喜ぶサクラをぼんやり眺めつつ、俺はもう決めたことだし寝ようと思うのであった。

剣を作り始めて早3日。

することもないのでパンクストリートにちよいちよい買い物に出かけたり、換装の空間に日常雑貨などを入れたりと暇をつぶしていた。

剣の工程は半ばまで来ており予想より早く仕上がりそうとの事。

そして3日目の夜。暇だから本（ラノベ）を読んでいると寝袋に入っているサクラがズズイと寄って来た。

「アルさんアルさん」

「はいはい、何でしょう？」

「アルさんの師匠ってどんな人だったんですか？」

ラノベを閉じ、考える。

いや、考える必要もない。

「あれは人の形をした化け物だ」

「… 強いつて事ですか？」

「強いつてレベルを超してる。多分エルザでも5分粘ればいい方… というか本気出せば一瞬で終わるんじゃないかね？と思うぐらい強い」

「… どんな人なんですかそれ？」

文字通り化け物である。

天才とは師範代のことを指す言葉だと思う。

「多分俺が知り得る中で一番強いのは間違いなく師範代だ。まあちよつと暇つぶしぐらいに教えてやるよ…。」

くく

ジヨニイ・アルバート7歳。

俺がこのFAILY TAILの世界に来て早7年。

螺旋丸の修行は5歳の頃から開始したがいかんせん第2段階が全然上手くいかない。

おそらく俺の魔力が少なすぎるのが原因だと思うがこれからも頑張つて行くつもりだ。

それよりもだ。それより大きな問題がある。

それは俺が武道関連を身につけてないことだ。

このFAILY TAILの世界はバトル漫画。

故にバトル必須。しかも相手は炎やら雷やらを使って来ると来てもんだ。

それに対抗するためには俺の少ない魔力だけでは足りない。ならば技術を鍛えてしまえという俺の馬鹿な考えである。

そこで俺は近くにある武道教室に行くことに決めた。

親から「やめろお！」だとか「アナタハショウライリツパナイシヤニナルンジャナイノオ!!」とか言われたが死ぬ恐れがあるFAILY TAILの世界で医者になろうとは残念ながら思わない。金はいっぱい貰えるけどね…

親の反対を押し切り道場に來た俺。

“和”という感じが凄く、俺は取り敢えずノックしてから入った。

そこには着物を来た老人の姿。その腰には一本の刀。

「——小僧、何故に來た」

一瞬この人霸王色の覇気でも使ったかな？と錯覚を覚えてしまうほど強烈な迫力だった。

多分老人と言う名の化け物なんだろうなと俺は思った。意を決し、唾を飲み込み込み声を出した。

「俺に、武術を教えてください」

老人は立ち上がり刀を抜い… え？何で抜いてるの？

「え？何やっ——おおおおい!!？」

老人がすごいスピードで刀抜きながら走って来て俺を斬ろうとしたのを間一髪で回避することが出来た。ただし髪の毛50本ぐらいは持っていていかれたが…

「小僧よく躲したな」

「いやいや！躲すとか躲さないの前に俺まだ7歳だぞ!!？何スナツク感覚で殺そうとしてんだよ!!？」

「よく喋る小僧だ。小僧、明日も来い。面白そうだから教えてやる」

「無視かよ！」

「ワシは今から寝る時間だ。邪魔するな」

この後知ったことだが俺の師匠、シバ・グローリーは昔「剣聖」と呼ばれていたぐらい強いらしい。

くく

「今思えばあれはテストだったのかなあ、と思うけどやり過ぎだと思っただな」

「相当凄い人なんですな… 精神的にも」

「あってみれば余計に凄味があるからな… さて、次は木の葉千枚斬りの鍛錬なんだがこれはお前も体験したから別に話さなくてもいいか」

木の葉千枚斬り。

落ちて来る木の葉を一枚も落とさず空中で叩き斬るとかいうロツクリーみたいな修行である。

転生特典である写輪眼もこの訓練の時に開眼した。

「サクラはでも終わるのが早かったな… 普通半年はかかるもんなんだぞ？」

「そうなんですか？途中から慣れたというか…」

「天才ってやつか… まあいいか。続きを話そう。と言ってもこの後

は面白みも何もないけどな…。」

くく

ジョニイ・アルバート。14歳

木の葉千枚斬りを達成した後の修行はひどくシンプルだった。

「あとは体で覚えよ。百聞は一見に如かずという諺があるがそんなものよりやった方が早い」

「それでいいのか!?？」

というもの。

この修行を11歳から毎日殺されながらやっていた。何でも使っているからワシに勝って見せよ、というので写輪眼を使いながら攻撃するが流石バケモノジジイと言うべきか。

14歳になるまで一回も攻撃を当てたことがない。

試しにある日の戦闘を再現しよう。

「うおおおお!!」

写輪眼を発動させ、床を滑るように走り拳をモーションなしで叩き込む。

反応しにくいはずだがバケモノジジイの師範代はそれをいとも簡単に避けてみせる。

そして俺の腕を取り、手首の関節を極めようとするので抵抗するのではなく、一歩前に進めて下に潜る。

手首を捻りながら関節の可動域を元に戻し蹴りを出すが届み込みで回避されてしまう。

相変わらず爺さんとは思えん動きである。

「くそっ…!」

「まだまだ」

タアン!!と銃弾じみた拳が顔と腹に直撃した。

師匠の拳——いや、加減してあるから手首のスナップだけで俺の拳

に匹敵する力を叩き込んだ。

写輪眼を使っても何も見えなかった。

「うお……！」

殴られながら師匠の足に片足で着地し、そこから体を捻り足を蹴り落とす。

「——甘い」

足をそらされる。

何をされたかも分からないほどの“いなし”。

戦闘ではこの“いなし”の技術は非常に有効である。

そして俺の腰にピタリと拳を当て、そのまま押し出す。体幹ごとぶち当たる感覚。

体に触れた状態だというのに、まるでD○○のロードローラー攻撃のような威力！

俺の体は見事にぶっ飛び道場の壁を破壊して外に吹き飛んだ。

「まだまだ修行が足りんの」

「チーン」

ジョニイ・アルバート。15歳

剣戟が鳴り響く。

俺は今年ようやくやって来た神様からの剣を使った休む暇なく攻撃するがこの妖怪ジジイには何も通用しない。

俺が刀を使っているというのに、ジジイは木刀、さらにハンデとか言っただけ目をつぶっている。そして片手。

だというのに何も通用しない。

木刀には擦り傷だつて入りはしない。

相変わらずの化け物である。

「刀身変化——双剣！」

刀が半分ずつに分かれ、短くする代わりに手数を増やす。倍となった斬撃を浴びせるが、全然効かない。ノーマルタイプのポケモンが

ゴーストタイプに攻撃するみたいなものだ。

「どうした、その程度か？」

「これからじゃあああ!!」

もう口調もおかしくなる。

身体強化を使って最速で叩き込むが、流され、躲され、いなされる。目瞑ってんのにどうしてんだよこの妖怪ジジイ!と思いつつひたすらに手を振るう。

「おお!!」

自分でもびつくりするぐらいの速さが出た斬撃。こりやあの妖怪ジジイとはいえどもくらうだろうと思つたその時だった。

俺の手から刀が離れていた。

その数瞬後に鈍痛が手に響き渡った。

前を見ると妖怪ジジイが木刀から手を離し、いつも通り俺の腹に拳を当てていた。

「——ハッ——」

再びD〇〇のロードローラー。

俺はぶっ飛び道場の壁を破壊した。

気絶する前に思ったことはいつの間にも木刀振るったんだよということだった。

〃〃

「という感じで... うっ、思い出したら吐き気が...!」

「いや、どんな人ですか一体...」

個人的に思うのは

某錬金術漫画に登場する対戦車ジジイ+某月面聖杯戦争で登場したアサシンII師匠

である。つまり化け物。ここがF〇〇の世界だったらほぼ間違いなくグラウンドセイバーだよ。多分山の翁といい勝負出来るわ。

「ちよつと会ってみたいです」

「やめとけやめとけ。下手したら首飛んで行くぞ。なんか話してたら眠くなつて来たから俺寝るわ。おやすみ」

「えっ!??まだ続き聞きたいんですけど!??」

過去を振り返るのも楽しい(?)ものだ、と考えながら寝袋に入るのであった。

## 21 厄介事はすぐ起きる

7日目…

「ありがとうございますー！」

ペコリとサクラが頭を下げる。

俺はその横に、ルシアは前に立ち面倒くさそうに頭をかいた。

「代金は… まあもういいや。とつとつこれ持って帰んな」

布に巻かれた剣をポイッと渡すのをサクラは慎重に受け止めた。

サクラが布を捲るとそこには純白の鞘。

「刀にしたのか？」

「サクラが刀がいいってね… まあ最初から刀が適正だったし」

「ふーん」

サクラがウキウキしながら鞘から刀身を出すとほのかに桜色に染まった刀が見えた。

「桜色の刀って凄いな」

「作ってたらそうだった」

…なるものなのか？と疑問に思うが元よりこの世界は摩訶不思議アドベンチャーなのだ。

「これが私の刀…！」

「名前とか付けたらどうだ？ チュンチュン丸とか」

「斬りますよ」

「すまん」

いいじゃないチュンチュン丸。

まあ俺も神様から貰った刀に名前とか付けてないけど…

いや、桜セイバーときたらここはもう菊一文字しかないんじゃないのか？

「サクラ、菊一も「天空桜、この刀は天空桜です！」

無視されたお。(。・旦。)

私は悲しい(ポロローン)

「天空桜：．．． 実在するか不明の神剣の一つだね。知ってたのかい？」

「いえ：．．． 精神世界で戦っている時に聞いた言葉で：．．． あれ？いつ聞いたんだっけ？アルさん分かります？」

「分かるわけないだろ」

精神世界に俺がいたわけではないし。

「まあいいです。本当にありがとうございますルシアさん。このお礼はまた必ず」

「そういうのいらぬから：．．． 早く帰んな。私は眠い」

ふあー、と欠伸をするルシア。

この一週間で寝た姿を見てないしな：．．． 早く寝かせてあげるべきだろう。

「それじゃどうも。また来るよ：．．． サクラが」

「アルさんも来るんですよ」

鋭いツツコミを入れやがるじゃあないかあ：．．．

さて、帰るかと思いついて後ろを向いた時だった。

「そうだ。ジョニイ：．．． あんたの刀、それまだ鞘だ」

「へ？どういふことだ？」

「私にも分からなかったがその刀は：．．． いや、これより先はあんたが理解すべきだね」

気になるじゃないか。

そんな少年漫画みたいなこと言われても困るんですけど！

あれかな？RAVEに出てきた天空桜みたいな感じで刀身が鞘だったりするのかな？

試しにやってみるがいつも通り真っ黒なままである。

「まあ頑張るわ」

「そうかい。んじゃ今度こそ帰りな。私は寝る」

「ん、サンキュー」

「ありがとうございます！」

手をプラプラと振りながらテントに入ったルシア。そのわずか数

秒後に寝息が聞こえ始めるのであった。

ガタンゴトンと汽車が揺れる。

時刻は午後10時30分。

パンクストリートで泊まることも考えたが幽鬼の支配者編がいつ始めるか不明なため一刻も早く帰る必要があったので帰ることにした。サクラは泊まりたがっていたが…ちなみに皆んな忘れてると思うけどエルザのお手伝いで渡された鎧も回収済みである。サクラに言われなかったら忘れるところだった。

修理を依頼したハートクロイツのおじさんの顔は死にかけていたりしたが御愁傷様と言うしかない…。どうでもいいことだがエルザの鎧と剣の修理代でかかった金額なんと15万Jである。高い。しかも15万Jを軽く渡すエルザって何者…？

「何もなければいいんだけどなあ…」

と言っても妖精の尻尾にいる限り100%以上の確率で何らかのイベントが起きる。

いつそのこと“青い天馬”とか“蛇姫の鱗”に入つとけばよかったかなあ…。

「お団子お…小豆…」

俺の鞆を枕代わりにしてグースカと眠るサクラが寝言をポツリと呟いた。

まあ妖精の尻尾に入らなかつたらこいつとも出会わなかつたしな。ぶつちやけの話かなり好みのタイプである。

しかも弟子属性という新たな属性付きである。

こんな体験が前世で出来るだろうか？嫌、ないツツ!!

あと妹属性がついたら神。

死ぬる。もう何も怖くない。

と下らないことを考えていたらいつの間にかマグノリアに着いて

いた。

俺の妄想力世界一イイイ!!と敬礼しながら席を立ち上がる。

周りに人がいないことを確認してやったので安心してください。  
見られてませんよ!

「何してるんですか…?」

しかし現実残酷。

サクラが不審者を見るかのような目で俺を見ていた。

「一体いつから?」

「ついさっきです」

「そうか… ならもう一回寝ろ!そして忘れろ!喰らえ!首トン!」

サクラの首の後ろ目掛けて手刀を振り落とすが両手でがっしり  
ロックされ、そのまま手首の関節を取られた。

「あいたたたた!!ちよつ、関節はダメ!」

「アルさんがこうしろって言ったんじゃないですか!」

「分かった!何もしない!何もしないからア!うでもげりゆうう!  
痛がつてるふりして何とか解放。」

甘いなサクラ。ショートケーキよりも遥かに甘いぞ!

「写輪が「テイツ」ああああ、目ガア!目ガアアアアア!!」

写輪眼で眠らせようと思ったら目突かれた。

これが日本だったら絶対失明してたわ…。

「おお… サクラ… いつの間に成長を」

「アルさんの考えてることなんてお見通しです!」

「く、くそつ…」

ひとの成長って怖いね、としみじみと感じながら今更ながら汽車を  
降り帰路を目指す。

駅から俺の家まではおよそ15分程である。

ギルドに鉄柱が刺さってるか刺さってないか確認するかは明日で  
ある。

そんなことより早く寝たい。あつたかい我が家が待っている。セ  
クス○イハウスが待っているのだ。

「アルさん… 何か聞こえませんか?」

そうか？と答えながら耳に集中させる。

こういうことは大抵フラグだ。コナンだったら絶対殺人事件起きてる。

嫌だなあ、と心底思いながら耳を澄ませると予想的中。近くで何かが倒れる音や、斬撃、みたいな音が聞こえた。

「行きましょう」

「だな…」

寝たいけど

と気持ちを隠し音が聞こえる方に走って行く。

予想していた通りの光景だった。

ジェットとドロイ、そしてレビイがガジルにボコボコにされていた。

「こりや行くしかないよなあ…！」

何でこんな災難なんだよお!!??

と心の中で唱えながら飛び出す。

サクラが驚いた顔をしているが目の前で美少女がボコボコにされるのを止めない俺ではない。ジェットとドロイ？オマケだ。

というかガジル、お前自分の嫁になってんだよ。下手したら――

「結婚したのか…俺以外のやつと」

と東山源次になつてしまう！

それだけは避けたい（白目）！

さあ行くぜ！俺！相手は鉄の滅竜魔法使うけど当たるだけ当たれえ！

## 22 裏蓮華

人気のない夜にソイツは待ち伏せするように潜んでいた。

ジエツト、ドロイ、レビイの3人チームで家に帰る途中にソイツは姿を現し、不意打ちに等しい奇襲を仕掛けた。

まずジエツトとドロイを1分も経たないうちに倒し、残るレビイを痛ぶるように攻撃した。

レビイも優れた魔術師ではあるが使う魔法がどちらかというと中距離から遠距離。

それに対してソイツはバリバリの近距離で、相性も悪かった。レビイは戦っている最中にソイツの名前に聞いた。

ナツと同じく滅竜魔法の使い手。  
鉄竜の力を持つ男。ガジル・レッドフォックス。

「ギヒヒ… 流石は弱小ギルド。弱エやつしかいねエなあ…」  
圧倒の言葉に尽きる。

ただガジルの前にひれ伏すしかない。  
魔力は切れ、傷を負い、立つ力もままならない。

「3人一緒に吹き飛びな。鉄竜の——」  
大きく呼吸をする。

滅竜魔法の一つであるブレス。

ナツは火竜の力を持ったため火のブレスを、ガジルら鉄竜の力を得るためブレスをした時に金属片が混じる。それが高速で飛来する事で以上なまでの攻撃力を持つことになる。

「——咆哮ッ!!」  
高速で迫る竜巻と鉄片。

あまりの恐怖で目を瞑ったレビイの耳に草を踏む音がふと聞こえた。

「——真空の翔破!」

ゴウ!と暴風が吹き荒れ、ブレスと衝突し爆風を生み出した。

木が震えるほどの衝撃は鉄のブレスをかき消した。

レビイが目を開けると目の前に立っていたのは夜のせいで見えづらくなつた黒のジャージを着た男の姿。

ジャージ姿の男なんて分かりきつた存在だった。

「ジョニイ……！」

「大丈夫……じゃないな。サクラ、頼むぞ」

「分かりました」

素早くレビイを肩に担ぎ、もう片方にジェットを。ドロイはまだ軽傷な方で何とか走れる状態だった。

「ジョニイ…… そいつ、強いぞ……」

「サンキュー、ジェット。知っているけど頑張ってみるわ」

「それじゃアルさん。また後で」

ガジルは馬鹿を見るような顔で走って行くサクラ達を見ていた。

何故あんな雑魚達のために出てきた？

と思つていたからだ。

基本的にガジルは人に頼らない。

仲間と呼べる存在もない。

だから何故助けたかも分からなかった。

「何であんな奴らを助けたか？みたいな顔してるから教えてやるよ」

心を読んだかのようにジョニイが刀を鞘から抜き出しながら言つた。

「と言つても俺は仲間がなんだとか家族とか言わねえ。そういうキラじゃないからな」

闇に浮かぶは赤眼。

その瞳には怒りの炎のような黒炎が灯っているかのように見える。

「女の子が傷ついてるんだ。それを助けなかったら男じゃねえ」

「何言つてんだよ雑魚が。そういうなら俺を倒し——」

トンという音がガジルの胸元から聞こえた。

ガジルが目を下げるといつの間にかジョニイが拳を軽く当てていた。

本当に雑魚だな、とほくそ笑み拳を高く上げた瞬間、建造物がぶち

当たったかのような衝撃が体に走った。

その威力は完全に体を伝わりガジルの背後にあつた木をへし折るほど。

「立て。地獄を見させてやるよ…ただし余興だけな。本番はウチのドラゴンスレイヤーがやってくれる」

「ギヒヒ…言うじゃねえか。お前も火竜も俺が地獄を見させてやるよ」

カッコつけたものはいいものも絶対負ける。

そう俺は思った。魔法なしの体術戦なら絶対負けない自信があるがこれは喧嘩のようなもの。ルールも何もない。

知っていると思うが鉄の滅竜魔法について説明しておこう。

まず一つ。体を鉄に出来る。

…ずるくない？俺ただの体術使いだよ。木は凹ませることは出来ても、鉄殴ったら痛いだけだよ。

その二。体を武器に出来る。

言っておくがアンリミテッドなブレイドワークスではない。ただ腕を剣や、槍にしたり、足の裏から剣を出して天井に逆さまに立てたり出来る。

これによつて俺の得意とする関節技が封じられた。

どう勝てと？

ナツは鋼鉄とかしたガジルの体に傷をつけることが出来たがアレはやはり滅竜魔法を使ったことが大きいだろう。

それに対して俺は体術9割、魔法1割男。

木の棒で魔王倒しに行くのと同じである。

そして戦う前に言うのもなんだが俺はナツに負けている。つまりガジルにも負ける。

オワタ…明日の朝俺が磔になつてるんだらうなあ…

「考え事してるんじゃないよ！」

ガジルの腕が剣となり俺の立つ場所に伸びてくる。その距離なんと5メートル。

なんとか回避し、ガジルの剣が木に当たると爆発したかのように横に倒れた。

あいつ俺を殺す気じゃないよな？

「くそっ、換装！」

空間から神様から貰った刀取り出し握りしめる。

ラビットステップを発動させ、一步だけを加速させ5メートルの間に合いを一瞬で詰める。

「——シッ！」

体を回転させながら腕を振り抜く。

身体強化された腕は通常よりも何倍もの速さで宙をかけたが、ガキインと鉄とぶつかる衝突音が聞こえると同時に俺の刀の動きが止まった。

「え？マジ？」

「鉄竜を舐めんじゃねエ」

いや、そうじゃなくて。

神様から貰った刀どうした!?!?

1ミリもくいこんでねえじゃねえか！

「鉄竜槍！」

「うお!?!？」

俺の腹にガジルの鉄柱と化した腕が命中し、伸びる。足で地面を蹴り威力を軽減するがとんでもない馬鹿力だ。

身体強化でなんとか相殺できる。

「八門遁甲——第一門、開!!」

抑制された脳のリミッターが一部外れ、あり得ないはずの高速移動を可能にした。

鉄柱の下に潜り、そのまま接近しガジルの顎に蹴りを叩き込み、上空に舞い上がらせた。

効くかはどうか分からない。いや、効く可能性は少ないだろう。

空中に舞い上がったガジルの背後を取り、魔力で作った糸で縛り付け、掴む。

高速回転しながら地面に落ちて行く。

常人が喰らえば即死は間違えない。

「――表蓮華!!」

地面まで残り5メートルを切った途端ギヒヒと笑う声が聞こえた。

「こんなものか」

ブシュツと肌が切られた感覚。

その証拠に俺の手からは鮮血が溢れ出していた。

チラリと見るとガジルの腕が剣となっていた。これで魔力の糸ごと切ったのだろう。

ガジルは空中で俺を蹴り少し上に行くとき大きく息を吸う。

「鉄竜の――」

マズい!警鐘が響く。

全ての魔力を総動員させ風の魔力を手に集中させる。

ガジルの口が大きく開いた。

「――咆哮ツツ!!」

「真空の翔破!!」

ゴツ、と嵐が吹き荒れる。

魔力がどんどん吸い取られる。

飛んできた鉄片が体に刺さり、軽傷を増やして行く。

「ヤバ…これ、は…持たないぞ…!」

「散りな!!」

カツ!とガジルの魔力が増大し、俺の真空の翔破は完全にかき消された。

「うおおお!?」

なす術なく、咆哮を喰らった俺は地面に衝突し見事にダメージを受けた。

鉄片が体に食い込み、血が溢れ出す。

目の前がクラクラする。幸運なのは目が傷つかなかったことだろう。

「ぐっ… はあ、イテエ…」

足に刺さった太い鉄片を抜く。

ドクドクと血が溢れ出る。この一撃は師範代の拳とは違う痛みだ。魔道士になって初めてこんな痛みを味わった。

「無様だな。これが王者かよ」

足で頭をグリグリされた。

痛い。普通に痛い。

こんな事をされてもあんまり怒りが湧かない。

ただ帰ったら頭洗おうと思うだけだ。

「ふっ…」

「ああ？何笑ってんだよ」

思わず自分の情けなさに笑ってしまう。

このあとさらにボゴボゴにされて磔なんだと、ぼんやり考える。

まあ、レヴィ達がされるよりいいか。

「テメエの後はさつき逃げた女どもだ。最低3人はやれって言われたるからな」

いやいや、間に合わないだろ。

と思って時計を見るとなんと1分しか経ってなかった。これだけ戦ってもたった一分…!??

嘘だろ。俺ラストエイジスやったウルティアなみに頑張ったんだけど。

「あの刀女も磔にしてやるよ」

ギヒヒ、と言う。

サクラの事か。結局磔は3人。

いや、それだけは阻止しなくては。

犠牲は俺だけで充分だ。

「八門遁甲——第二休門、開」

「アア？」

体力がみなぎる。

ガジル。俺はお前に負けるだろうがそれでも一発はぶち込ませてもらう。

「第三生門——開ッッ!!」

ガジルの足元から俺の姿が消えた。

「ッ!??何処行きや——」

「遅い」

振り向きざま顔面を掴んで地面に叩きつける。

その驚き顔が見たかった。

「デメエ、何しやがった」

「言っても分かんねエだろッ!」

拳を叩き込む。

ガジルは体を硬化させるが関係ない。

「——オラァ!」

容赦無く叩きつける。

拳というものは案外脆い。

俺は道場に通っていたが空手のように拳を鍛えたりはしてない。つまりガジルにダメージを与えたとしてもさして拳が持つかどうかなのだ。

「調子乗ってんじゃねえ!」

拳が迫る。が、遅い。遅過ぎる。

写輪眼と第三生門まで開いた俺には圧倒的に遅過ぎる。

簡易魔法術に魔力を通し指先を軽く濡らす。

ガジルの拳を避けると同時にガジルの目に水をかけた。

「目潰しか…!」

「これでも優しい方と思え!」

本来なら指でついてたんだぞ。

一瞬の隙を狙い顎を下から叩き蹴り、上空に刎ねあげる。その後を追う俺も飛び上がり更にガジルに蹴りを入れる。

「効かなエな!」

「第四傷門——開ッッ!」

俺の体の速さが更に上がる。

第四傷門まで開いたのは約2年振りだ。

勿論人には使っていない。ただの練習だった。

「そんなもんやったところで俺には無駄なんだよ！」

「やってみなきや分からねエだろ」

その言葉を最後にガジルの視界から俺が消えた。

途端、衝撃。

背中から殴られ前に飛ぶ。それに先回りして更に拳を叩き込む。

「見えねエ…！」

俺が読んでいた忍者漫画の超高速体術。

その動きは視認することは出来ず、なおかつ早く、強い。

ガジルを地面に向かって殴りつける。

地面に着く手前、ガジルの体に巻きつけて追いた糸を思いつきり引つ張り俺の方に寄せる。そして引つ張った事によって俺の体もガ

ジルに近づいた。

「ハアアアア！」

万力を込める。

筋肉からブチブチと嫌な音が聞こえた。

ガジルの鳩尾狙って肘と膝を叩き込む。

あまりの速さのせいか空気が歪んだ。

「――裏蓮華!!」

余す事なく伝わった威力は地面に叩きつけられたガジルが物語っていた。

爆音が響き、砂埃が大量に巻き上げられる。

これが体術によって引き起こされたなんて誰が信じるのだろうか。

「… ああ、もう、無理だな…」

目の前が真っ暗になるのを感じながら俺は気を失った。

## 23 最も怒らせてはいけないギルド

「ごめんジョニイ… 私がもつと…」

「いや、レビイのせいじゃない」

「そうだ。俺が弱かったから…」

「いやいや、そんな謝らなくていいって」

なんとか動かせる右手を使って辛気くさそうな顔してる3人に手を横に振った。

現在俺がいるのは妖精の尻尾の二階にある医務室。よく漫画で見る包帯グルグル巻き状態だった。

「でも…」

「気にすんなって。ちよつとした怪我なんだからさ」

「怪我ってレベル越してるだろ…」

さて、急だがあの子の出来事を話そう。

と言ってもすぐ終わる。

俺が裏蓮華したがガジル動ける↓気絶した俺をポッコポッコにする  
↓磔。

である。磔にされてから1時間後に目が覚めたけど取れなかった  
ので朝まで待つてたら

「はあ、そんな顔すんなよ。美人が台無しだぞ」

「なっ!?」

「チツ！」

おいコラ聞こえてんぞ2人。

勿論レビイを狙ってるわけではない。

だってレビイは後にガジルとゴールインするからな!… チツ!  
リア充爆せる。誰かキラークイーンで爆発させてやれ。

「ジョニイ… お前…」

「今だったら…」

「おい、止めろお前ら。冗だ… 冗談?… 冗談だ」

「何で言い直した!」

いやだって普通に美人だよね。

俺好きよレビィ。可愛いし。

「ごめんジヨニィ… 私今…」

「だから冗談だって!」

「テメェ!」

なにこの連鎖。

レビィ可愛いって言ったらジェットとドロイキれるし、冗談って  
言っても怒る。

詰んだわ。

「暇がなくて助かるよ… イテテ」

「大丈夫?」

話していると楽しいが傷が痛む。

第四門まで開いたせいか筋肉が切れてしまい超痛い。

「大丈夫… と思う。痛いだけだし」

「ジェット!痛み止め持ってきて!」

「分かった!」

「そこまでしなくていいよ!?!」

神足使って痛み止め取ってきてくれるのはありがたいが風圧で埃  
が舞うのでやめてほしい。

「しかし今どうなってるかなあ…」

「マスターが怒ってたからねえ… 向こうのギルド亡くなるんじゃない?  
い?」

「…」

そうはならないんだよなあ、と思いながら窓から見える海を眺め  
た。

ギルド幽鬼の支配者の壁に突如穴が空いた。

その穴から入ってきたのは幽鬼の支配者の魔道士。

その顔を見ると気絶させられたのか完全に白目を向いている。  
来たか、とガジルは笑う。

「妖精の尻尾じゃあああ!!!」

妖精の尻尾のギルドマスターであるマカロフの声が幽鬼の支配者  
中に響いた。

それが試合開始の宣言だったかのようにマカロフの後ろにいた妖  
精の尻尾の魔道士達がなだれ込んだ。

剣戟が、破碎音が、雄叫びが一つの戦争のように響く。

「ガジル！出てこい!!」

「ギヒツ、呼ばれなくても出て行くぜ」

机を蹴り飛ばし、ナツに飛びかかる。

同じ滅竜魔法を使う者達の戦い。

「鉄竜槍!!」

「火竜の鉤爪!!」

互いの攻撃がぶつかり、一瞬の静寂。

次の瞬間、轟音と衝撃を撒き散らす。

もはやギルド内は原型を荒れ狂い、何が何だか分からない状態だっ  
た。

「お前のしたことは許されることじゃねエ... 全力でぶちのめしてや  
るよ...!」

「やれるもんならやってみな火竜。お前もあいつと同じ磔にしてやる  
よ」

「いえ、なるのは貴方です」

ガジルは凜とした声に反応し、後ろを振り向いた時だった。

——修羅

そう。修羅が見えた。

刀を抜刀する女の後ろに修羅が見えた。

人間としての恐怖を思い出させる出来事としては充分だった。

「うおおおおお!?」

体を鉄とさせ、防御を固める。

その時ようやく女の全貌が見えた。

薄めたピンクの髪を揺らし、片手には銀に輝く東洋の剣。  
錯覚かなにか、目が爛々と赤く光っているかのように見えた。  
その女の姿はガジルは昨日戦った3人組みを介助していた女そのものだ。

「――火ノ型 カゲツチ 加鬨偷臈」

腕を振る速度が音を超え、刀自体に熱を帯び真つ赤に染まる。  
空中に赤の斬撃を残し振るわれた一撃はガジルに正面衝突し斬る  
までには至らずとも大きく吹き飛ばすことは成功した。

「あの女…！」

「――水ノ型 ミズハノメ 水刃弐瑪」

追撃。ガジルの目の前には刀を冗談に振り下ろす姿があった。  
先ほどの攻撃よりかは遅い。

「調子乗ってんじゃねエよ女ア!!」

腕を剣とさせ、真つ向から向き合う。

女と男。どっちが力が強いかなんて容易に想像出来る。

だがそんなもの覆せるほど想いというものは強い。

――水ノ型 水刃弐瑪

クラス・アガートラムが使った4つの型の一つ。

水の激流を現した一太刀。

水は地を割り、全てを沈める剛の一撃。

その技が忠実に再現され、心意を乗せた一太刀は時を超え再現された。

「グハア！」

あまりの重さに耐えきれず刀によって叩き潰され地面が放射状に  
ひび割れが入った。

ガジルが目を上げるとそこには以前変わらぬ修羅の姿――

「弱エやつをぶっ飛ばすのも面白いが… 強いやつをぶっ飛ばして服  
従させるのも面白いよなア！」

場所は変わって幽鬼の支配者の最上階。

ゴゴゴゴと音を立てながら進むのは妖精の尻尾のギルドマスターであるマカロフ。

感情が昂ぶったせいなのか、魔力が体から漏れ出し周りの彫刻や柱を傷つけていく。

マカロフの目の先には幽鬼の支配者のギルドマスターであるジョゼ。

マカロフとは真逆な顔をしており、楽しげにマカロフを見る……というより見下していた。

「ご年配でここまで来るとは中々元気ですな」

「下らんことを聞きに来たんじゃない…… テメエがやったこと充分理解してるのか？」

「理解？ええ、勿論してますとも」

「——なら分かっているな」

マカロフは齡80を越しているが聖十大魔道10人の内の1人である。

普段なら絶対に見れない激怒の顔。

魔道士なら分かる絶対的な恐怖を目の前にしてもジョゼは薄笑いを浮かべるだけだった。

「——貴様等は最も怒らせてはいけないギルドを怒らせた」

残像が残るのではないかというほどの速さで手が動いた。

一秒もせずに発動された魔法無属性のビーム。ギルドにどデカイ穴を開けた。

「怖い怖い。私よりよっぽど年上なのによく頑張る」

「けっ、舐められたもんじゃ」

「舐める？いいえ、舐めるどころか尊敬してますよ」

「——だからこそ策は練ってあるのです」

ぶあ、と空気が裂けた。

マカロフが気づいて後ろを見ると丸い体型をし、目隠しをした男が

自分に襲いかかろうとしていた。

(コイツ、気配がないのか!?!?)

「お、おおおおお!!」

歌うように男は叫んだ。

「私は悲しいいいいい!」

男の手から空気弾が放たれた。

回避は不可能と悟ったマカロフが手をクロスさせ防御を測ったが、それは悪手だった。

空気に触れた瞬間、体の力が抜ける感覚。

「ぬお!?!?・おおおおお!?!?」

空域・絶

空気弾に触れた相手の魔力を0にする魔法。

マカロフのみなぎっていた魔力はすでに消え、空気弾に押されて下に落ちて行った。

## 24 戦前

「  
」  
劍風で空き地の下生えを吹き倒す。

サクラは既に刀を降り始め3時間が経過していた。

師であるジョニイの敵討ちにガジルに戦いに行ったは良かったが、後半から押された。

つまり負けた。最初が良くても負けは負け。

言い逃れは出来ない。

「ハア——！」

空中に銀の光を残し刀を払う。

それに呼応して手首から肘にかけての桜の模様が浮かび上がった。

風圧で下生えを吹き倒して、刀を鞘に収めてサクラは自分の腕を見た。

「なんなんでしょうこれ…?」

これが現れだしたのは刀を作ってもらったための精神世界での戦いだった。

絶体絶命のピンチの時に現れたこれはまるで力を引き出したかのよう。

いや、力ではない。知識を教えてもらった。

「今は気にする必要がないですよね… 気にする前にあのガジルとかいう人にもう一撃入れないと…！」

刀を振る。

この時点で幽鬼の支配者が来るまで残り2日。

その頃ジョニイがぐうすか寝てることを知ってるのはポーリュシカその他知らない。

場所は変わり妖精の尻尾内。

ガジルでギルドに大きな穴が空いたせいで所々修理跡がある。

いや、修理跡があるのは以前から・・・か。

「・・・これはマズいな」

「ああ、ナツがルーシーを助けに行っただのはいいがその後が問題だ。今攻め込まれたりしたら勝ち目が限りなく低い」

エルザの言葉に服を脱ぎながら話すグレイに対してまた何時ものかというような顔でギルド内の全員が見ていた。

「何だよお前ら・・・また俺が服脱いだみたいな顔して」

「その通りなんだよ」

「はあ!?? いつの間に!??」

気づけよと定番のツツコミを入れるがその後の笑いは起きない。

その中一人レヴィがふと手を挙げた。

「どうしたレヴィ?」

「あの・・・前にジョニーが言ってたんだけどファントムのギルドは口ポットみたいに動くって・・・」

「なっ!?? 本当か!??」

「うん・・・しかも魔導収束砲ジュピターを内包してるとも言ってた」

ギルド内が騒めく。

魔導収束砲ジュピター。

もしそんなものがこのギルドに放たれたとでもしたら何ひとつ残らない。評議員の保有する超魔導精霊力、エーテリオンに比べれば幾分威力は落ちるが木で作られたギルドを消すには十分過ぎるぐらいだ。

「嘘だろ・・・そんなのからどうやって守れって言うんだ!??」  
頭を抱える。

幽鬼の支配者にはエレメント4と呼ばれるS級魔道士4名に加え、マカロフと同じ聖十大魔導の一人であるジョゼ。

どうやっても勝ち目がない。

「いや——」



25 妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者

1

ズシン、ズシンと離れたところから機械音が響く。  
その正体は巨大な鉄の城。

幽鬼の支配者の持つ最大兵器、ギルドそのものが一つの魔道士となる移動要塞ファントム。

莫大な費用をかけているため、内包される魔法も協力だ。

それに対するはF A I L Y T A I Lと描かれた木で作られたギルド。

鉄の要塞に潰されたらひとたまりもない。

「——ジユピターを撃て」

ギルド内から見下すように見るジヨゼは被害など関係なく命令を発した。

部下がざわめいたが一睨みするとすぐに作業に取り掛かった。

妖精の尻尾の後ろには勿論街がある。

ジユピターなんてものを放つたら一体どれだけの被害が出るか…

「ジユピター発射準備完了！いつでも行けます！」

ニヤリと口元が歪む。

「撃てええええ!!」

まるでそれが戦いの合図であり、同時に終わりであるような白い極光が放たれた。

『アイスメイク——氷床』

しかし極光はギルドから大きく逸れた。

「何があった!?？」

「前脚に氷が…！」

4つある脚の前脚部2本の下から氷の塊がギルドを持ち上げるよ

うに突き出していったのだ。

これによって狙った場所より上に向かって撃つたため見事に外れたというわけだ。

ジヨゼが身を乗り出して下を見ると一人の男が地面に手を押し当てているのが見えた。

「流石に…この質量の氷を作るのはキツイな…！」

氷魔法の使い手であるグレイ。

彼一人でこのギルドを前脚を支えたのだ。

「ジヨニイが教えてくれなかったら大変なことになってたな…。」

幽鬼の支配者を撃退すると決めてから1日後だった。まるで狙っていたみたいに幽鬼の支配者について書かれたファイルがレビイの手に渡ったのだ。

ジュピターやエレメント4の詳細、その他諸々…どこから手に入れたのかが気になったところだが今は気にしないことにしていた。

「さて、次はナツ達だな…俺も行かなきやいけねえけどな」

氷塊を消し、立ち上がる。

ジヨニイの情報だと以前倒した幽鬼の支配者のギルドメンバーに変わり、泥人形のようなもので攻撃する。

つまり守備は任せるしかない。

「んじや、行くか」

「おおおおおおおおお!!」

その頃ナツはハツピーの力を借り、ジュピターが放たれた銃身からギルド内に進入していた。

ナツに与えられた任務は簡単に説明するとジュピターを発動する為に必要なラクリマを破壊、その後エレメント4を手当たり次第ぶっ飛ばせというものだ。

「燃えてきたアアアアア!!」

「あい！」

時速100kmを超えるのではないかと思うほどの速さで進入すると同時にナツの視界に真っ赤な何か飛び込んで来た。

「うお!?？」

クリーンヒットし、体勢を崩し地面に転がり落ちた。

ハッピーのその横でグデーと倒れていた。

ナツが炎を飛んで来た方を見て見ると掌に炎を乗せた男が歩いて来たのが見えた。

名前は兎兎丸。サムライのような服を着ており口元には嫌な笑みを浮かべていた。

「おいおい……まるでこっちの秘密兵器を知ってたかのような迅速な対応じゃねえか……って……」

「うぷ……」

「ダツハハハ……いつ酔ってやがる！」

第一戦開始!……となるのか怪しい所ではあるが敵同士。相手の弱点を見逃す程甘くはない。

ハッピーが「ナツウー！」と叫んでいるがフロントムが動き続ける限りナツは酔いが止まらないのだろう。

「——青い炎！」

兎兎丸の手から青い炎が放たれた。

ナツは動けない限りに飛んでくる炎を食べることにした。

「ンガアアア……っ、冷てえ炎だ、ウプツ」

「おまつ、炎を食うのか……」

口の中で炎を消すというのは大道芸人などがするのはよく見かけたりするが、炎を食べるのを見たのは兎兎丸は初めてだった。

炎が効かないとなればどうするかと考えた結果、目の前で倒れこむやつに最も有効な策を思いついた。

「——橙の炎！」

「俺に炎は効か——くせえ！」

例えるなら牛乳を拭いた雑巾を放置して1ヶ月経過したかのよう

な匂い。

そんな臭い炎がナツの身に襲いかかっていた。

「は、ハッピー・・・へ、ヘルプ・・・」

「分かつ——臭ア！」

「ハッピー！」

臭い炎の中突っ込んだハッピーであるがあまりの臭さに魔法が切れ、地面に衝突した。

「ハハハハハ！これは飛んだ茶番だ！面白いから見てたいけどこれも任務だね。僕の最強の技を持って消えてもらおう！」

兎兎丸が空中をなぞるように手を動かすとボボボボと7色の炎が発生し、合わさる。

「喰らえ！7色の炎！」

炎を操り、炎に長けた兎兎丸だからこそ出来る技。

通常同一の魔法でも違った属性を混ぜるのはとてつもなく複雑である。

更にそれが7個であるなら尚更だろう。

「は、ハッピーが・・・」

巨大な火の玉はナツとハッピーの中心に放たれていた。

炎に耐性があるナツなら大丈夫だろうが、ハッピーは猫だ。勿論毛に引火する。

「うおおお・・・」

しかし酔いとは残酷なものだ。

ナツは動くたびに吐き気が襲いかかってくる。

火が届くまで残り5メートル。

ガコン!!と大きくファントムが揺れるとその動きを止めた。

移動しなくなった。

「おおおおおおおおお!!」

立ち上がり、炎の前に立ち塞がり大きく口を開けた。

ミットに吸い込まれたボールのように、火がナツの口に入った。

「なっ・・・ お前・・・」

「・・・ もちもちしてたりネバネバしたりするな・・・ けど臭エ」

少し顔を引きつらせ、飲み込む。

「止まったならこつちのもんだ。かかってきな」

「一度しのいだけで思い上がるなよ」

「へっ、俺に炎は効かねえからよ！一発でぶっ飛ばしてやるぜ」

「そうかい……じゃ、そうしてあげようか」

兎兎丸がポケットを漁り、黒い球が飾られたネックレスを首元につけた。

そして手を伸ばし一言。

「——バレッテージェフレア」

その言葉を言った途端、ナツがいる場所に爆発が起きた。

ナツがファントム内に侵入する10分前。

エルフマンはグレイが生み出した氷を伝って先にファントムの中に入っていた。

エルフマンの目的は一つ。

ファントムの動きを止めることだ。

その為に管理室に行かなければならないのだが……

「漢オオ——！」

隠密行動と真反対を現したかのようなエルフマン。

片っ端からぶっ壊し、ついでに管理室もぶっ壊すローラー作戦である。

エルフマンが腕を振るうたびに何人かがうわー、だとかぎやーと叫んで空に飛んでいた。

そんな事があり侵入して僅か3分で管理室に到着していた。恐るべしエルフマン。

「かかつ、若いとはいいものだ」

「誰だおっさん」

「私の名前はソル。まあ覚えてもらう必要はありません。何故なら——

」

「今から貴方は死ぬのだから！」

ソルという男が手を広げると岩が収縮し、エルフマンに向かって飛びかかって来た。

岩の弾丸が一斉に襲いかかり、土煙が舞い上がる。

終わったと笑みを浮かべたソルだったが、土煙の中に影が一つ。

「テイクオーバー、リザードマン」

テイクオーバー。

動物や、獣、更には悪魔や神までに至る存在の遺伝子を取り込み、一時的に自身の体を変化させる魔法。

エルフマンがしたのはリザードマンと呼ばれる魔物。鋭い牙と爪を持ち、強靱な鱗を持っている。

その鱗によって猛スピードで襲いかかった岩を防いだ。

「テイクオーバー使いですか… 珍しい」

「言ってる。姉ちゃんには老人には優しくしろって言われから一瞬で仕留めてやる」

26 妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 2

「——ホオラア!!」

ヒュンヒュンと音を立てて岩が襲いかかる。

エルフマンはりザードマンから速さのあるワータイガーと呼ばれる魔物に姿を変える事で対抗している。

体つきが大きいのに岩に当たってない。

(ナツが来るまで残り5分... それまでになんとかしないとな)

普段漢しか言っていないイメージがあるが、エルフマンは頭がいい。戦略的な作戦も何個か思いついているし、ソルと呼ばれる男の使用する魔法もジョニイの書いた紙に纏められていたので対処がしやすい。全く関係ないが見た目に反して料理も得意である。人とは外見で判断するものではない(重要)。

(ここは一気に仕留めるか——!)

「石膏の奏鳴曲!」

砂が舞い上がり、4つの拳となった。

ソルが腕を前方に伸ばすと命令を受け取った拳がエルフマンに迫る。

「行くぞ——!」

獣が最大速度を出せる体勢。

4足歩行から生み出される速さは一時的だが視認不可に近づく。

エルフマンが前に走り出した、その1秒後によく地面が割れた。

「黒牛——!」

ソルが気付いた時にはエルフマンは右腕を黒牛と呼ばれる鉄のように硬い牛を再現した黒い腕と化していた。

老人にはキツい一撃になるだろう。

「オオラア!!」

「——ジ・アース」

この現状を見ているものならエルフマンが絶対に勝ったと思うた  
だろう。

しかしソルが言葉を紡いだ途端足元から先端が尖った岩が飛び出  
し、エルフマンの腕を突き刺した。

「ぐああー！」

「大地の力を舐めてはいけませんねえ」

追い討ちを掛けるようにエルフマンの真下から地面が突き出た。

「な…んだ、これは…」

「六星ダークブリング　ジ・アース。まあ理解はできないでしょう  
がねえ!!」

次々と迫り来る攻撃に、エルフマンはなんの抵抗も出来なかった。

「アレを使うか…?!」

いや、アレは…!」

「何をボソボソと一人喋ってるのですか!」

「グハア!」

喋る間も無く攻撃は続く。

エルフマンの言うアレとは、強力ではあるが自我が効かなくなる可  
能性があるテイクオーバー　獣の王。

全身にテイクオーバーをする事で確かにパワーも速さも上がる。  
しかし全身ということはその生物の遺伝子を完全に組み込むとい  
うこと。自身の魂も消失しかねない。

そしてエルフマンがこれをしてしない最もな理由は最愛の妹であるリ  
サーナを亡くしたため。

「ジ・アース…いい能力です。いい実験台になりましたよ」  
「…」

もはや言葉を返す力も残ってない。

もう無理だ、と諦めた時だった。

外から仲間の声が響いた。

「燃えて来たアアアアア!!」

外なのにすぐ近くで聞こえるかのような大声で叫ぶ声。

途絶えかけた意識の中で鮮明に聞こえた。

「ジュピターの再装填まで残り15分。

何をしようがもう遅いことです」

「違う…。」

「はい?」

力が入らない四肢を動かし立ち上がる。

魔力はほとんどなくなり残り一回のテイクオーバーが限界であり、ダメージも蓄積されている。

「みんなが戦ってるんだ…ここで一人倒れたら…。」

「——漢じゃねエ!!」

魔力を総動員させる。

体全体が入れ替わる感覚、魂が抜かれそうになった。

「おお… おおお!!」

額からは二本の角が生え、骨格が膨れ上がる。

身の丈は元から大きいのに、さらに大きくなり、体は獣の王へと変化した。

これこそエルフマンのテイクオーバーの奥義、獣王の魂。

「獣王の魂…！」

だがジ・アースの力を持つ私には無力！」

「うっ… おお… オオオオオオ!!」

その声は獣そのもの。

一歩踏み出すと地は割れ、雄叫びを上げると空間が震えた。

「穿て!ジ・アース!」

ソルの魔力がダークブリングを通じて発動され、床が動く。

エルフマンを囲むように360度全てから岩が射出された。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

獣の王へと変化したエルフマンの口から放たれた声は、射出された岩を粉状に分解した。

「ぬお!??分解したのか!??」

五臓六腑に染み渡り、骨がキシキシと体の中から鳴るのが分かる。

耳を抑えなければ鼓膜が避けるほどだ。

「しかし何と醜態な… まさしく獣だな」

ソルは鼻で笑う。

あくまで戦闘に華を求める彼にとっては獣という存在はまさしく害虫同然なのだ。

エルフマンはソルの馬鹿にするような発言に怒りもせずただ一言。

「仲間のためなら醜態な獣にだってなってやる」

理性は残り、獣と化した体はエルフマンの精神によって制御される。

以前だったら精神が飛んでいただろう。だが今は、守るべき仲間がいる。

それこそが自身を動かす原動力。

「戯言をージ・アースー」

悪しきもの程力が増大する闇の魔石、ダークブリング。

その中でも世界に6個しかない六星ダークブリングはそれぞれが強力である。

ジ・アースは見た通り地面を操る力。

ソルの闇を糧として地面が抉れ、飛び交う。

「クハハハハ!! 潰れる潰れるオオオオオオオ!!!」

攻める暇も見せないほどの一斉攻撃。

あまりの火力にファントムの壁には穴が空き、外が見えていた。

「かけら一つも残さず散るとは… 獣にお似合いだな」

砂埃が舞う。

その中に影一つ。

「馬鹿な… ま、まさか…」

砂埃が晴れた先には腕をクロスさせ体を守るエルフマンの姿。

「あの中で生きていたというかの…?」

獣だな王とは言へど勿論体に傷はつく。

無限とも言える地の力によって与えられたダメージは体に現れて

おり、数え切れないほどの傷が体に刻まれていた。

「馬鹿な!? どうやって!?」

一步踏み出す。

体力的にあと一発が限界だった。

「死ねエエ!!」

エルフマンの前に巨大な石槍が現れた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

拳と槍が交わり――

――槍が砕け散った。

「馬鹿な… 何故…」

「――死んでも守りてエものは自分で考えろ」

槍を貫いた拳は、そのまま直進しソルの顔に直撃し、派手に吹き飛ばした。

ザアアアア…

と雨がシンシンと降り注ぐ。

「急に雨が降り始めたな」

グレイはルーシイが拐われたという情報を聞いて隠れ家に向かっている途中通り雨に遭遇してしまい、雨の中走る事になってしまった。

降水確率は低めだったがこういう日もあるだろうと考えてひたすら走る。

「フフ… ふふふ…」

走るグレイの耳元に女の声が聞こえた。

ブレーキをかけ、周りを見渡すが誰もいない。

「気のせいかな？」

『いえ、気のせいじゃありません』

グレイの5メートル先に雨が奇妙にうねり、一定の集合体となり人の形となった。

雨の降る中全体的に黒の服を着た女は傘をささず手をぶら下げた。

「お前… それ…」

グレイがそれといったものは女の腕に巻かれた蛇の形をした銀に輝くブレスレット。

グレイにも伝わるその魔力は怨恨や怒りという負の感情から来たものだと理解した。

「私ヲ… 認めないのなら… 認めサセれバイイ」

「こいつは… ヤバイな」

グレイは服を脱ぎ臨戦態勢に入った。

何故服を脱いだと突っ込んではいられない。

27 妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 3

「よく分からんが… 邪魔をするなら退いてもらうぜ！」

指先までピンと伸ばした掌に、丸めた拳を置く。

アイスメイクの基本は両手を使うことである。

片手でも出来ないことはないがバランスが悪くなり、両手に比べても力が弱い。

「アイスメイク 槍騎兵<sup>ランス</sup>！」

手から放たれたのは氷で出来た6つの氷の槍。

蛇のように宙でうねり、確実にジュビアに迫っていた。

「無駄です」

6つの氷の槍はジュビアに直撃したが、ジュビアの体が水と化し、氷の槍を直撃しても何のダメージも与えれずにいた。

「水になるのか… なら逃げ場をなくしてやる」

「無駄です。私に傷は与えられません」

「それはこれを受けてから言いな!!」

ドオオン!!

とジュビアを閉じ込める為に落とされたのは氷の牢獄。

そしてその周りには20を超える剣の群れが浮遊していた。

「黒ひげ危機一発みたいだなッ！」

グレイが腕を横に払うと命令を受けた氷たちが牢獄の隙間を縫うように射出され、閉じ込められたジュビアに向かい一直線に進んだ。

「——ホワイト・キス」

氷の牢獄に触れたジュビアが一言つぶやいた瞬間、腕に巻かれた銀の蛇の目が妖しく光った。

ジュビアを閉じ込めていた牢獄はシュバツという音を発しながら形を変える。

何の特徴もない牢獄が細長くなり、表面には一つ一つがキラキラとダイヤモンドのように輝く鱗。

その姿はまるで蛇。

手品師のように牢獄から蛇に変えてみせた。

手品師でも牢獄から蛇に変えることはできないとは思うが。

『?????』

蛇はジュビアに巻きつく。そしてその蛇の表面に20の剣が突き刺さり、地面に落ちた。

「驚いたな……俺の氷を使うとは……」

「六星ダークブリング ホワイト・キス」

「は？ろ、ろくせいだーくぶりんぐ？」

聞き覚えのない単語であったがぶちのめす事には変わりはない。

女性なので抵抗はあるが。

「まあ知らんが倒させてもらおうぞ」

触れられたらアウト。

その為氷の剣を手に持ち、構える。

ジョニイの構えを真似たが、所詮は見よう見まね。

どこまで出来るかグレイも分からない。

「行くぞー」

「——ホワイト・キス！」

支配権が移った蛇はジュビアの命令を受け入れ真っ直ぐにグレイに迫る。

グレイは蛇と直撃する寸前に飛び上がり、回避した。

蛇は地面に衝突し、軽いクレーターを作る。

「元が俺の作ったやつとはいえ中々の威力だな……」

グレイは飛び上がったまま剣を担ぐように構える。

蛇は再び狙いを定め目をグレイの方にピタリと合わせていた。

「さて……やったことはないが一つやってみるか！——変換！」

グレイの持つ氷の剣が、青く輝き形を変える。

本来剣であったそれは細く、長くなり一本の槍に変化した。

これがグレイのアイスメイクの応用編。変換である。

これを作るきっかけになったのはジョニイがエルザと戦っている時に、刀を二本にしたり、籠手として利用していたのが目に入り、それと同様氷を変化させた。

ちなみにこの魔法。新たに作り出すわけではないので魔力消費は  
凄く少ない。

「アイスメイク 飛翔槍！」スピア

槍というのは突き、払いの他にも投げることで武器にも使える。

某青タイツもこのように使用していた例がある。

氷で作った槍には因果逆転の呪いも何もついてはいないが武器として使用するには十分だ。

グレイの腕から放たれた槍は真っ直ぐにこちらに向かう蛇の口の中に入り、そのまま突き抜けた。

命を断たれた蛇は氷の残骸として地面に落ち、一本の槍が突き立っていた。

「…次は…!!」

地面に降りると同時に槍を手にくるりと一回転させ変換させる。槍はいくつものパーツに分かれ、それぞれの先端が尖った。

「喰らえ!!」

風切り音を撒き散らしながらジュビアの元に迫る。

雨が降っているが軌道なんてまるで変わらない。

ジュビアは真っ直ぐに手を伸ばした。

自らの体をまた見ずにさせるのかと思ったグレイだったが――

「――ホワイト・キス」

ジュビアの目の前に銀の盾が出来た瞬間驚きを露わにした。

「は?…銀?」

この世界には銀術師なるものがあるが、銀術を使うためには手持ちの銀をグレイの変換のように剣に変化させたりすることで戦うことができる。

——しかし何もない状態から銀を作り出すことは絶対に不可能なのだ。

「ホワイト・キスはものを操る能力ではありません」

「あらゆる材質を変え、それを扱うことが出来るのです。雨から銀に

変えたように…」

「なんだよそりゃ…」

「ですから——」

出来事してはほんの一瞬。

ジュビアの後ろには銀の剣がズラリと並んでいた。

「このような事も——出来るのです!!」

「ツツ!!大盾!」

さつきのお返し… この場合倍返しと呼ぶべきなのだろう。

無数の剣がグレイの作った氷の盾に直撃し、ヒビを入れた。

「氷が銀に勝てると思っっているのですか!」

「う… うおおお!」

一本の剣が突き刺さると同時に盾が破壊され、残っていた剣がグレイに殺到した。

直撃は避けたが体の至る所に擦り傷が入っていた。

「さあさあ!まだまだありますよ!」

剣、槍、斧、刀、e t c. : 武器という武器が空中で停止されていた。

剣戟が止まった事で、一度呼吸を整えたグレイは雨で垂れて視界を塞ぐ、髪の毛をつまみ上げ苛立ちを言葉に出した。

「つたく、鬱陶しい雨だな!!」

ブツン、と耳元で音が聞こえた気がした。

「… い?」

「あ?」

雨の勢いが増した。

「鬱陶しいと言いましたねエエエエエ!!」

銀の武器が真っ赤に染め上がり、煙を上げた。

グレイが知ることはないがジュビアは雨女である。

降水確率100パーセント。

生まれてこのかた晴れ模様というものは写真でしか見たことがな

い。

遠足でも雨、デートでも雨、てるてる坊主を作っても時間と資源の無駄だった。

だからジュビアは雨を降らす自分が嫌いだ。

だが同時に雨を馬鹿にされるのも嫌いだ。

「な、なんだ!?？」

「キイイ!!殺ス!!」

そして彼女には憎しみを増幅させるダークブリングもある。

増幅された憎しみは魔力となり、生み出した剣がカタカタと震えた。

「死ネエエエエエ!!」

ドドドド!!と空中に赤い光を残して武器達が迫る。

速さが尋常ではなく避けた先がなくなっている状態だ。

グレイは剣によってつけられた傷の上に更に熱で皮膚が溶けかかっている状態だ。

「クソッ!このままじゃ...行くしかねえ!」

逃げ回ったせいで体力の消耗が激しい。

賭けるならこの一回。

「うおおおおお!!」

武器が飛ぶ中グレイは走った。

さて、ここで一つ簡単な問題を出そう。

銃弾の中を突撃するとどうなるか?

ただし走っているのは某ゲーム帰還者主人公ではないと考える。

答えは簡単だ。小学生だって答えられる。

剣がグレイの頭を打ち抜き、それに続いて胴体を滅多刺しにした。

何度も何度も、跡形も残らず。

「ハア... ハア...」

「満足か?」

「ツツ!!?」

ジュビアが背後を振り向くと、悪魔的な笑みを浮かべたグレイが

ジュビアの肩に手を置いていた。

先程貫いたのは何かと目を前に向けると氷の残骸に無数の剣が刺さっていた。

「分身の術ってなあ!!」

バキン!!と音を立てジュビアの体が氷漬けになった。

尚も成長は止まらず氷はより多く、より高く形成される。

「私ハ… 私ハアアアア!!」

氷から煙が上がり、表面から水が溢れ始めた。

ジュビアの魔力が熱となり、氷を溶かしているのだ。

ダークリングで思考が狂ったジュビアは自分、または雨が否定するものを皆殺しにすることを目的としている。

トラウマが力を強くさせ、狂わせる。

「イヤアアアアア!!」

熱から炎へと化し、氷を溶かす。いや破壊したと言った方が正しいか。

ジュビアの周りに雨が集まり、細長く形を変えた。

これまでで一番大きいと呼べる蛇だ。

全長50メートルはあるだろう。

「シネエエ!!」

ジュビアが腕を振り下ろすとぐったりとしたグレイに真っ直ぐに突き進む蛇は、大きく口を開く。

動かないグレイは正に獲物同然。

何も運命が変わらないまま、蛇はは真っ直ぐに進み地面をグレイごと破壊した。

「コレでまたヒトリ…」

ふわりと冷気が肌を撫でた。

まさかと思いい後ろを見るといた。

全身から血を流しながらも立つグレイの姿がそこにあった。

「何で…!?」

「あれも囿さ…そして今出来た」

グレイの足元には大量の氷の破片。

ジュビアがグレイの剣と牢獄を蛇に変えた場所だ。

「アイスメイク——」

落ちていた氷が全て銀に輝いた。

元よりグレイの魔力で形成された氷の残骸は一つに集まり、空に舞い上がった。

話は別になるがグレイは幼少期に親を亡くし、氷の造形魔法の師と出会った。

その時の記憶は未だに強くこびりついているがグレイはその中でもよく覚えているものがある。

一つの絵本。だがタイトルは覚えていない。

しかしその物語に登場する一つの武器。

愛する女性の命と引き替えに守った仲間。

その仲間を守るために愛する女性から貰った唯一無二の武器——

「——シルバレイ銀の方舟」

地面に落ちると、落ちた場所から氷漬けになる。

本来氷だったはずなのに、輝く色は正に銀。

紋様が刻まれた槍にはありえないほどの魔力が込められていた。

その証拠にグレイのいる場所にだけ雨が降っていない。

「私の雨が！…許さない！」

銀の蛇は再び動き出し、チロチロと舌を出す。

グレイはただ真つ直ぐな目をして、槍を構えた。

「俺だって任されてるんだ。そう易々と負けてられるか!!」

グレイの腕から槍が放たれた。

冷気を放つ槍は進むたびに地面を凍らしていく。

蛇は地面を破壊し槍ごとグレイを殺そうとする。

「——それは魂が籠った特注品だからよ、簡単には壊れないぜ」

槍と蛇が衝突した瞬間、蛇が氷漬けになり破碎音を立て崩壊した。

次に槍がジュビアに当たり氷漬けにした。

「負けた…？」

氷の中ジュビアは独り言のように呟いた。

先程までの熱嘘みたいに冷えていく。

「アンタが何で怒ったかは知らねエけどよ、一度くらいは落ち着いて空でも見たらどうだ？」

グレイが氷に触れるとゆっくりと消えていき、ジュビアは背中を地面に合わせた。

そこから見える空は青く澄み渡り、何処までも輝く太陽。

「これが青空…。」

初めて見る大空は美しいだなんてレベルで済む事ではなかった。

そしてそれ以上にこの青空を見せてくれたグレイの存在――

「で？まだやるか？」

ニツと笑顔を見せたグレイの顔を直視したジュビアは顔を真っ赤に染め謎にジュブーンと言いながら気絶したのだった。

一言に言うとも一目惚れというものだ。

もしここにジョニーがいたらきつとこう言うだろう。

「イケメン○ね」と。

グレイが戦っている最中に、エルフマンはソルを殴り飛ばしてファントムの動きを止めたことによって、酔い、から目覚めたナツが兎兎丸を倒した！

とは簡単に行かない。

「あはははは！せめて美しく散るといい！」

「うお!？」

六星ダークブリング バレッテージェフレア

自分が視認した空間を爆発出来るダークブリング。

しかも大きさも自由自在に扱え、爆発規模も操れる。

いかなる場所でも対応出来るダークブリングだ。

ナツは火竜の力を使って応戦するが相手が悪い。

兎兎丸は相手の炎すらも操れる。

「——火竜の咆哮!!」

「馬鹿の一つ覚えみたいにな……効かないって言ってるだろ！」

迫り来る猛炎がくるりと軌道を変え、元来た方に向かいナツに直撃した。

自身の炎によるダメージはないが、熱さのせいかナツは徐々にイライラし始めていた。

「クソツッ！何で当たらないんだ！」

「ナツッ……あと6分しかないよ」

ぐったりとしたハツピーの言葉を聞き、魔晶石を見ると魔力がたまって来たのか白い雷を散らしていた。

「考えてる暇なんてないぞ！」

ナツを中心にして、赤いラインが何重にも現れ球形になった。

兎兎丸が掌をぐっと握ると赤いラインが一際赤く輝き爆発を引き起こした。

「がっ……！」

熱と衝撃で頭が揺らされる。

「クツソオオ!!」

火を足にまとわせ、足の裏から噴出。

さながらロケットのようだ。

しかしずっと放出しているので兎兎丸に操られ壁に叩きつけられた。

更にそこを狙って爆発。

「おいおい……これじゃ俺一人でギルド制圧できるんじゃないのか？」

ニヤニヤと見るだけでイラつと来るような笑みを浮かべた。

ナツはもう怒りが限界を超えていた。

ナツの滅竜魔法の特徴としては感情が具現化することだ。つまり今のように怒りの感情があると――

「うるせえええ!!」

炎がナツの体からこれでもか、というぐらい溢れ出る。

炎は床と天井を焦がし、周囲の温度をますます上げていく。

「暑苦しいね君……もう消えてくれ!」

バレッテージェフレアが発動され、ナツの体を包むと同時に爆発が起きた。

しかし――

「なっ!?」

爆発によって引き起こされた炎を食べることで無害にしていたが。

「爆発を食っただとお!?」

「最初からこうすればよかったんだな」

ただし衝撃によって髪の毛がアフロのようになっていたが。

ナツが一步步くと地面が溶けた。

顔は怒り一色。

エレメント4とはいえど兎兎丸だつて恐怖を感じる。

「ふ、ふん。それで強がった気になるなよ!」

ピピピピと機械音が響くと同時にナツの周りに5つの爆弾が仕掛けられた。

ナツはその中をゆっくりと歩いていく。

何も怖じけずにゆっくりと歩いて来るのはある意味恐怖だった。

「バレット・ゼフレア!!」

引き起こした爆発の中で、最も強力な爆発。

危うく魔晶石を壊すところだった。

モクモクと煙が立ち上がり、地面には軽くクレーターが作られていた。

「はあ、やっと——」

「やっと、何だ？」

兎兎丸が後ろを振り向くと同時に振り抜かれた肘が綺麗に顎に決まっていた。

兎兎丸の頭が真っ白になる。

「人体で一番強いのは肘、だったよなジョニー？」

きつと銃で頭を撃ち抜かれたらきつとこんな倒れ方、と思わずほど兎兎丸は無抵抗に地面に崩れ落ちた。

ナツがしたのは実に簡単だった。

爆発する寸前に足の裏から一気に炎を放出し、天井を走って兎兎丸の背後に回り込み、振り向きざまに顎に一撃。

「いいかナツ？拳は案外脆いから多々は禁物だ。肘を使え、肘を」とジョニーが言っていたのを思い出した。

肘は人体の中で最も強力な部位。

それが顎に当たれば気絶するのは当然と言えば当然だろう。

「後は魔晶石だな。よっと」

手から炎弾を放つと、吸い込まれるように魔晶石に当たり見事に破壊した。

ナツはふうと息を吐いてその場に座り込んだ。

「ちよつと暴れたりねえなあ…。やっぱりサクラに譲るんじゃないかった」

「――私は悲しい」

エレメント4の最強の魔道士「大空のエリア」は腕を後ろに組み、階段の下にいるエルザを見ていた。

「まさか聖十魔道に続き、妖精女王まで倒す事になるなんて…」

ダン、と強く音を鳴らし階段を一段上がる。

手に何の飾りのない剣を持ち、階段の上に立つエリアに向けて剣を向けた。

「そう言うものは倒した後に言うものだ」

空中に緋色の髪をなびかせ走る。

エリアは照準をエルザに合わせ、掌に風を収束させる。

「――空域 絶！」

目に見えるほどの密集した風がエルザに吸い込まれるように向かい、爆発。

繊細な作りのカーペットは引きちぎれ、木屑が宙に舞う。

「倒した？…いや、違う」

目を上に上げると、双剣を手にしたエルザがすぐ目の前にいた。

――飛翔の鎧。着用者のスピードを上げる鎧。効果は至ってシンプルではあるがこの鎧は写輪眼を発動していたジョニイを置き去りにするほどの速さを与える。

「ハアアアア！」

「クツ」

銀の剣尖が3つ。

エリアはギリギリのところまで回避に成功し、少し服が切れただけだった。

エルザは再び動き、天井や壁を使って立体的な移動を可能にしてある。

「貴様の攻撃は魔力を0にするという恐ろしい魔法だが当たらなければ何の問題もない！」

壁、天井を走るに連れどんどん速度が上がる。元より目の周りをを紐で括つてあるエリアに見えるわけないだろうが、普通に見ても今のエルザが何処にいるかは分からないだろう。

「ではその動きを止めさせましょう」

植物の芽が地面から100程生えた。

ゴゴゴと地鳴りを響かせ急成長する芽はあつという間に木となった。

エルザは木が生えたことに驚いたが、直ぐに冷静を取り戻した。

(例え木が扱える魔法だろうと全てきり伏せればいいだけの話…！)

木の枝がエルザに向かい伸びてきたのでそれを伝い空に飛び上がる。

そこを狙ってまた枝が伸びて来る。

「――換装！」

エルザの身に輝きが纏い、1秒もしないうちに天輪の鎧が換装された。

エルザは自身の周りに10本の剣を空間から取り出し、最高速度で一斉掃射。

銀の閃光が木々を切り裂くが、奥から更に湧いて来て焼け石に水状態だった。

「――木の鉄槌！」  
ウッドハンマー

木の幹が音を立てながらエルザに迫る。

咄嗟に剣の腹で直撃を防いだが、木の幹は更に伸び続け背後にある壁にエルザを叩きつけた。

「ぐっ…」

壁と木に圧迫され全身の骨がミシミシと押し潰される。

持ち前の腕力で木を妨げるが思った以上に力が強い。

「――空域 滅！」

ゴウと剛風が放たれ、壁は限界を越え破壊されエルザは壁の後ろにあつた大広間へと転がり込んだ。

「いかがですか？六星ダークブリング ユグドラシルの力は？」

「ダークブリングだと…？」

エルザには聞き覚えのない単語だった。

剣を支えにし立ち上がり、剣先をアリアに向けた。

「太古にあったと言われる戦争の兵器ですよ。もっとも知ったところで死ぬのですから意味はないのですけどね！」

アリアは両手の掌を合わせるとエルザを囲い込むように大樹が生えた。

生まれた大樹の表面に枝が形成され、一斉にエルザに照準が合わせられた。

「――アルベロフレード王樹の刃！」

360度から枝という刃が射出された。

エルザは僅か数瞬で退路を見つけ出し、すぐさまそこに向けて飛び出した。

それでも迫り来る刃は換装で呼び出した2本目の剣で捌く。

「今のを避けますか！面白いです！」

大広間が大樹に覆われる。

ただ広い空間が一瞬にして太古の森のような雰囲気となった。

「部屋全体を……！」

「さあここからが本番です」

そう言ったアリアは目隠しを手で剥ぎ取った。

29 妖精の尻尾 VS 幽鬼の支配者 5

トン、トンと靴が鉄の地面を鳴らす音が聞こえた。

聴覚が良いガジルだからこそ聞き取れた音だろう。距離にして30メートル。

ゆっくりと探るように近くのが分かる。

「来たか…」

ニヤリと笑う。

ガジルは妖精の尻尾に攻め込むという話を聞いた時点で来ると予想していた。

いや、来ないはずがない。

渡り廊下を歩くのは桜色の髪をした一人の女。

右腰には白の鞘に収められた刀があり、服は至って軽装。

「何だあいつ?」

「知らねえな。けどえらいペツピンなお嬢ちゃんじゃねえか」

「それはいい!それじゃあ——」

幽鬼の支配者の女に飢えた悲しい3人の男が女に向かって飛びかかった。

「——邪魔です」

伸びて来た手の関節を極め、鳩尾と膝にそれぞれ一撃。流れるような手つきで投げ飛ばし2人目の顎に掌底を叩き込み沈めた。

3人目は鞘から刀を抜刀し、逆刃を頭に叩きつけた。

時間にして僅か2秒。

「——次は貴方です」

「——ほごくなよ女」

サクラ・アガートラムは静かに刀を構えた。

アリアが目隠しを外した途端部屋の空気が変わった。  
部屋一室が魔力で覆われるような感覚。

「私は普段目を隠すことで力を抑えているのですよ。あまりにも強大な力なのでね」

「・・・」

エルザは話を聞きながらも周囲に目を配らせていた。

ジョニイが残した紙にアリアのことも書いていたからだ。透明化の魔法は書いてはいなかったが。

それ故に驚かず冷静に対応出来る。

周囲には無数の木。この一室だけか森の中にいるような錯覚を覚えさせる。

「では改めて死んでもらいましょう」

途端エルザの乗っていた木から枝が現れた。

エルザは宙に飛び上がり剣を構える。それと同時に100を越える枝が飛来する。

「換装！飛翔の鎧！」

ヒュンと音を散らし枝を避ける。

木を伝い加速しながら落ち、そのまま走り続ける。

その間も枝は飛んで来たが体は捻りひたすらに躲す。

「――種子砲」

ニョキツ、と可愛らしい植物の芽が湧いた。

エルザはそれを目で見つっなお走る。

「ハアアアア!!」

双剣がアリアを捉えるまで50cm。

エルザの左腕に穴が空いた。

「ぐっっ！ー！」

「空域 滅」

空気の衝撃が襲いかかり、大きく吹き飛ばされ木に背中から直撃し

た。

更に一瞬の隙をついて木の枝がエルザの体に突き刺さる。

「ツ……！」

大雑把に枝を抜き、すぐに立ち上がる。

傷は思ったよりも酷く、血が漏れ出した。

だが倒れるほどではないと思った時だった。

腕から木が生えた。

「はっ？」

「言い忘れていましたがユグドラシルは相手に傷を与えた時に傷口を媒介として相手の魔力を全て木に変換させます」

全身の脱力感が増えると同時に木がますます大きくなり自分を飲み込もうとした。

エルザはとつさに腕を動かし傷口を大きく抉り出した。

そのおかげで木に吞まれることはなかったが出血が激しくなった。

「くっ……」

袖を千切り傷口に巻きつける。

血の出る勢いは収まったが次に喰らえば後がない。

だがダメージを受けずに勝つことなんて出来るだろうか？

力の差では勝っているが数の差が激しい。

流星に枝と種を全て叩ききれるかと言われると答えは曖昧になつてしまう。

「……」

全ての鎧を頭に思い浮かべる。

妖精の鎧、煉獄の鎧も魔力が尽きかけのため換装は不可。天一神の鎧はもつとダメだ。

飛翔の鎧でも間に合わない。

「さあ、抗いなさいー！」

撃たれる。

その度に腕に痺れが走る。

どうする!?!? どうする!?!?

エルザはひたすら自分の中で勝てる手段を考える。

(今の私では捌き切れない…。もっと早く、強く…。！)

太ももに枝が突き刺さる。

自分の刃を太ももに突き立て枝ごと抉り取ると太ももから足先にかけて血が垂れた。

集中力はすでに限界を越しているのか少しづつ反応が遅れ始めた。

視界はすでに歪んでおり立っているのが不思議なぐらいだった。

「これで最後です！<sup>アルペロドラゴニクス</sup>王樹操龍！」

木々がうねり一匹の龍と化した。

空間を震わせながら周りにそびえ立つ木々をなぎ倒し、エルザへと突き進む。

意識を無理やり覚醒させ回避しつつ龍の上に登りアリアに近づこうとするがその間も枝は飛んで来る。

「うお…。おとおおお!!」

直撃を避けながらも必死に迫る。

刃が届くまで残り一歩。

「案外つまらなかったですね」

下から突き上げるように出て来た樹木はエルザの腹を勢いよく叩きつけた。

そのまま上へ上へ伸び続け天井を破り、さらにその上の階の天井を突き破る。

更に突き破り続けギルドを突き抜けた。

体の中にダメージが与えられたのではないので体は木にはならな  
いがダメージは計り知れない。鎧を着ていたとしても肋骨はいくつ  
か折れ、更には出血多々。まだ生きてるのが奇跡。

アリアは樹木を伸ばしエルザと同じ高さまで近づくとおもむろに  
両手を開け、妖精の尻尾がある方向に向かい叫んだ。

「妖精女王は私が打ち取った！」

その後、高らかに笑う。

耳にこびりつく嫌な笑い声だ。

エルザはなんとか顔を動かして下を見るとギルドの仲間がザワザワと声を立てていた。

マカロフがいない時の最終兵器とも言えるエルザがやられた。

つまりは敗北。

「……………だ……………」

それは違う。

手も足もまだ動く。負けていたのは自分の心だ。

ギルドのため、この戦いだけは負けられない。

「——まだ、戦える……………！」

エルザを突き上げていた木がバキイ！と純粋な握力で粉碎された。言っておくが握力で木を潰すなんてことはほとんど不可能である。

「な……………貴女まだ動けるといいますか!?？」

木で作られた龍が再び舞い上がりエルザに迫る。

「邪魔だ！」

銀閃が光った次の瞬間には龍は10当分にされていた。

アリアとしては心底驚愕しているだろう。

先程まで死にかけてだった人間が明らかに強くなっているのだ。

「私はまだ戦えるぞ……………！」

「よろしい。ならば戦争と行こう」

木が舞うと、剣が舞う。

剣が舞うと、木が舞う。

一種の美しさを持った戦いは更に激闘を繰り広げていた。

アリアは以前変わらない魔力で木々と空気を操り、エルザは手に持った剣を修羅の如く振るう。

「何故動ける…！」

「仲間のためだ！」

背後からの枝もまるで見えてるのかのように対処する。

「仲間のためだと!??なんと見苦しい！」

「ぐっ…！」

木の龍が同時に3体。

防御でダメージを防ぐが受けた傷が開き血が漏れ出す。

「仲間なんているても何も変わらない！」

「違う！仲間がいるから強くなるんだ！」

木をかいくぐり拳をアリアへと叩きつけた。

「私に傷を…！ ユグドラシル！」

アリアの魔力を通して木々が――

「確か、これだったか？」

生えなかった。

ユグドラシルを使うのに絶対必須のダークブリングがエルザの手の中に収まっていた。

「貴様アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ダークブリングに固執した故に、自身が魔法を使えることを忘れてしまった。

過ぎた欲は身を滅ぼすというべきか。

エルザはただ走ってくるアリアに拳を構える。

「返せエエエエエ!!」

弓を引くように大きく腕を引き、足を強く踏み出す。

緋色の髪が宙になびき、拳は真っ直ぐと伸びアリアの顔を直撃した。

「これが家族の力だ」

会心のドヤ顔で気絶したアリアに言うのだった。

「プーン」

「外れなかったら無理はしなくていいのよ？」

仔犬座のニコラ、サクラが契約しているメルはルーシイに取り付けられた金具を取ろうと頑張るが、手の形的にだいぶ苦戦している。

「プーン！」

「あ！抜けた！」

スポーンといい音を出しながら引き抜けたが勢いがつき過ぎたせいか後頭部を鉄の地面に叩きつけてしまった。

クルクルと回るメルの目。

ルーシイは自由になった片腕で逆の手の金具を取り外し、続いて両足の金具を外してようやく自由に動けるようになった。

足元で気絶しているメルを抱え上げて目の前の戦況を見る。

「何これ……」

必死に金具を取り外そうとしているメルに目を向けていたせいか気づかなかった。

部屋のうちこちに傷が入り、鉄の部屋というのに鋭利なもので両断された形跡がある。

「ハアアアア！」

裂帛の声と共に繰り出される斬撃。

あまりの威力で砂埃が舞い上がる。

「効かねエんだよ！」

「ガッ……」

拳が直撃し、大きく後ろに飛んだ。

空中で体制を整え地面に刀を突き刺して後退を防ぐ。

サクラは頭から血を流しながらも、格上の滅竜魔道士であるガジル

に奮闘していた。

「けつ、大口叩いていた割には弱エな」

「これからです…。」

戦いが始まって既に20分が経過していた。

普通戦いではこんな長引くことはない。

ガジルはゆっくり痛ぶるせいか、それともサクラのバカみたいな根性なのか。

「まだ…！」

教わった魔法で自身の速さを上げる。

一步でガジルの目の前に接近し、刀を水平に構える。鉄の鱗を持つガジルに斬撃はあまり効かない。ならば一点集中の突きを――

「遅いんだよ！」

鉄の拳が腹に突き刺さる。

内臓が逆流してくるような感覚をこらえる。

「――鉄竜槍！」

そのまま腕が鉄柱と化し数十メートル程伸び壁に叩きつけられる。

さらに追い討ちと言わんばかりに体に杭が突き刺さった。

「ア…ぐう…！」

戦いで痛みはこれが初めてだった。

修行の時とは比べ物にならないほどの痛み。

修行の時にどれだけ手加減されていたかがよくわかる。

「ぐっ、アアア！」

身体強化を施し気合いで杭を引き抜く。

血がドクドクと溢れ出したが気にする暇はない。

「何で倒れねエんだよ」

面倒くさげにガジルが聞いた。

サクラは血まみれの体を動かし顔を正面に向ける。

何で倒れないか？答えは簡単だ。

「貴方を倒すためです」

「勝手に言ってる」

刀はサクラの心を表したかのように微かに桜色が混じった銀に輝

く。

ガジルは女相手でも容赦はしない。

顔に笑みを浮かべゆつくりとサクラに近づく。

一方的な戦いだっただ。

ガジルの拳が面白いぐらいサクラに当たる。

その度にサクラは起き上がるがまた叩き潰される。

その繰り返しだ。

「いい加減倒れやがれッ！」

鉄の剣を刀で塞ぐ。

「まだ… まだ… 貴方に勝つまでは倒れません…！」

——アガートラムの 神域 解放

脳内に響くアナウンス。

それと同時に肘から手首にかけて桜色の紋様が現れた。

「これで、終わりだ！」

鉄の剣が迫る。

サクラは刀を鉄の剣を受け流し、その力を自身の刃へと乗せた。

「桜花七閃、一ノ型——」

そのままガジルの剣とかした腕を受け流し一歩踏み込む。

ガジルの一撃をいなしたことで蓄えられた力に自身の力を加え下

から上へと刀を跳ね上げた。

「——天空桜！」

回避不可の一撃はガジルの顎に直撃し、大きく跳ね上げた。

鉄の鱗を持つガジルでも流石に耐え切れなかったのか顎から血が漏れ出していた。

「この女ア…！」

ガジルが鋭い目で見てくるがサクラはゆったりとした構えで刀を構えた。

「さあ、ここからお返しです」

怪我など感じさせないほどの速さでガジルの元に迫った。

「調子に乗ってんじやねエ！」

——拳が迫る。

“いいかサクラ？人間っていうのはパンチする時に力を込めるため大体後ろに手を引くんだ。そこがチャンスだ”

「分かってますよアルさん」

刀から片腕を外しガジルの引いた拳に手を伸ばし手首を握る。

こうすることで拳が打てない。

「——ハア！」

片腕を使い左右からの袈裟斬り。

剣尖がクロスするように刻まれ大きくガジルを突き離れた。

更に一步踏み込み胴を横に一閃。

ガジルがノックバックするとまた更に踏み込み刃を当てる。

これが連続で何度も何度も繰り返され、空中には銀の光が流れ星のように瞬くようだった。

「——無限刃」

サクラの脳内にインプットされた新たな技。

ヒューズ・アガートラムが用いた終わりのない斬撃。その正体は超スピードで切りつけるだけだが凄まじいのは刀の振るう数だ。

僅か10秒で浴びせた刃は50を超えた。

あまりの速さに同時に切りつけたかのような光の斬撃だけが残る。

「——セヤア！」

サクラの腕が消えると同時に銀閃が輝き50の太刀筋がガジルに

突き刺さった。

大きく後ろに吹き飛び鉄の壁に衝突してようやく動きを止めた。動かないガジルの鉄の肌からは血が漏れ出し、ヒビも入っていた。

「ギヒツ、正直なめてたぜ」

ガジルは鉄の壁を抉りそのまま口に持ってきて勢いよく噛んだ。

「女だから手加減してた… だからここからは本気だ」

「何？」

ガジルは鉄をそのまま飲み込む。

鉄の滅竜魔道士であるガジルは鉄を食べることで体力、魔力の回復を行える。

そしてこの部屋全体は鉄で構成されている。

更にガジルとサクラの距離はおよそ10メートル。

「鉄竜の——」

ガジルは大きく息を吸い込む。

この時になってようやくサクラは思い出した。

“鉄竜の咆哮はナツのブレスより面倒だぞ… なんせ鉄くず交じりだからな。俺でも捌き切れん”

「やばっ——」

「——咆哮ッ!!」

ガジルの口から鉄交じりのブレスが放たれた。すぐさまサクラのいる距離まで届きろくな回避も取れずサクラは鉄くずに身を裂かれた。

「鉄竜剣！」

ガジルの腕が剣と——いや、チェーンソーの如く刃が高速回転していた。

いくら巨匠が作り上げた刀でもチェーンソー相手、しかも滅竜の力を持つているなら尚更折れるだろう。

「くっ…」

甲高い音を引き立てチエーンソーが頭上を通り過ぎる。

後退しようとして後ろに一步下がると背中に何か当たった。

「は？」

振り返ると鉄柱がそびえ立っていた。

サクラが気づかないうちにガジルが作っていたものだ。

「――終わりだ」

凶刀が振り下ろされ、鮮血が空を舞った。

「もつと速く行けんかのおお…」

「む、無茶言わんといってくださいよ… こちとら魔力がなくて…！」  
マグノリアから外れた森の中。

久しぶりに登場したような気がする俺は片腕にギルドマスターであるマカロフを担いで死にかけていた。

嫌味ではないが担ぐならボインの女の子がいい。というか女の子なら誰でもいい。

「というかマスターが巨人化して俺をぶん投げた後に走って来るって  
いうのはダメなんですか？」

「年をとつたら腰がダメになって走れんわい」

そういう割に天狼島でのプレピト戦の時凄く走ってたじゃないか。

「あと10分ぐらい… 最後に全力疾走です」

「実はと言う風に当たるのがちよつと気持ちいいんじゃない」

「…」

つまり俺を人間型ジェットコースターとして扱っている…  
色々言いたいことがあるが胸の中に押し留めて再び走り始めた。

「鮮やかな鮮血が空を舞った。」

そして糸の切れた人形のようにサクラが地面に倒れた。

「あ… あああ…！」

肩から腰にかけてバツサリと切られた後からは止めどなく血が漏れ出す。

痛みは恐怖へと変わり、肌に冷気が突き刺す。

サクラにとって重傷と呼べるものはこれが初めてだ。

そんな人間が冷静を保てるか否かを考えるとNOである。

それでも大丈夫と思う人はこう考えてみよう。もしも、だ。貴方の目の前にゾンビ500体がいました。貴方の手持ちはなし。隠れる場所もなし。これでも冷静を保てるか？

「痛い… いた、い…！」

「おいおい、あんだけやっておいて泣いてんじゃねエよ」

地面に倒れたサクラの髪の毛を掴み上げ自分の目線まで持つて来る。

先程の戦意に溢れた顔は何処に行つたのか。

その顔には恐怖しかない。

「助けて…」

「助けなんてこねエよ！」

激しく頭を打ち付けられた。

鉄の地面も相舞って脳全体が震える。

それでも生きてるとはなんとか身体強化を施したからであろう。

そこから先は地獄だった。

殴られ蹴られ斬られ、ありとあらゆる方法で痛めつけられた。

近くで聞こえる笑い声がまるで遠くから聞こえる。

意識が朦朧としもはや立つのも不可能。

それどころか指の一本も動かない。

泥水に浸かったかのように意識がなくなる。

ルーシイが何か言っているが聞こえない。

そして意識は完全に消えた。

サクラが目を開くとそこは銀の桜が咲いた草原だった。

「やあ、こんにちわ」

突如声をかけられ反射的に振り向くと無骨な剣を吊り下げた男が座っていた。

「え？誰ですか…？」

「まあ、それは座ってからでも話せるから。ああ、けどあまり時間もないから早く」

男がそう言うのでサクラは渋々草原の上に座った。

男の身長は約180センチ程で男性の平均身長と比べると少し高いのに、その顔つきはまるで少年のようだった。

剣を持つているため剣士なのかと思うがその顔を見て剣士と思うものはそういないだろう。

「ええと…」

「ああ、名前だね。そうだね…。取り敢えずジンとでも呼んでくれるかい？」

「はあ…」

ジンと名乗る男は怪しがるサクラの態度を気にせずに陽気に話す。

「あつ、ここは——」

「ここは何処だ？だね。それは簡単だ。精神世界だよ。君も刀を作ってもらう時に行っただろう？ああ、君が前に行った精神世界とはまた別の精神世界だ」

質問が終わる前に答えを言うてくれるので楽ではあるが得体の知れない恐怖がある。

「そう怯えなくていい。別にとって食おうなんて考えてないしさ」

「…はあ」

「まあそこに座るといい」

恐る恐るその場に座る。

ジンと名乗った男は笑みを崩さないまま頷いた。

「さて、説明を始めようか。さつきも名乗ったけど僕の名前はジンと呼んでおくれ。そしてこの世界の守護者…。かな？」

「かな？って私に尋ねられても…」

「はは、それは悪かった。でも疑問形になるのも不思議ではないんだ。僕達は個にして群でもあるから…。例えば」

ジンが手を開き顔の前に持って来て3秒キープ。  
手を顔の前から離すと可愛らしい女性の顔になっていた。

「この通り。アガートラムの魂が集う場所だからね。こんな事も可能なんだ」

「アガートラム…？」

「ああそうか… 君は生まれてすぐに両親がいないんだったね。それじゃアガートラムの事も知らないか… そうだね、簡単に説明すると…」

アガートラムの一族は代々武器の扱いに長けていた一族だ。

曰く、一振りで山を割り、海を裂いた。

曰く、アガートラムの1人対100人の戦いで傷一つつかず勝利したとか。

曰く、全てを一撃で終わらせたとか

「まあ簡単に言うくと超強かったわけ。そしてその末裔が君さ」

「私ですか？」

「ああ、その腕に浮かんでいる模様がその証拠さ」

今もサクラの腕に浮かんでいる桜色の紋様。

以前から不思議に思っていたがそういう事だったのか、と納得していた。

「それはアガートラムの一族の先人達が生み出した剣技全てが内包されている。そしてその紋様を持つものは内包された全ての技が使える。これは経験あるだろうか？」

「あり、ます…」

天空桜、無限刃も先人達が生み出した剣技。

「君はまだ未熟だから完全に扱いこなせる訳ではない…そこは君の師匠とやらの期待するしかないね」

「…」

ふわりと春風に似たものが頬を撫でた。

「おっと…そろそろ時間のようだ。今回は緊急だったからね無理矢

理連れて来たんだ。次はもつとゆつくり話をしよう」

「その前に彼に打ち勝つんだ。なーに、心配することはない。君は未熟だが根性は一人前だ。それに君はアガートラムの意志に守られている……その事を忘れずに」

「もうやめなさいよ！もう限界よ！」

「ケツ、俺はやると決めたからには徹底的にやるんだ。邪魔するんだったら殺すぞ？」

「……！」

大量出血により気を失ったサクラを守るように手を広げガジルの前に立つルーシイだが、星霊を呼び出すための鍵は盗まれ手持ちの鍵はない。

しかしそれでも目の前で仲間が殺されるのは絶対に嫌だった。

出会って間もないが会話もしたし、一緒に泊まったりした。

大切な友人を見捨てることなんて絶対に出来ない。

「チツ、またお得意の友情ごっこか……気持ち悪い」

「気持ち悪くなんかない！友達なら助けるのが当然でしょ!?!？」

「何餓鬼見てエなこと言ってんだテメエ。俺はお前らのそう言うところを嫌いなんだよ！」

ガジルの腕が剣と化した。

依頼主では無傷で持って来いと言われていたがそんな事はどうでもいい。

「——死ね！」

振り落とされる凶剣がゆっくりに見えた。

死ぬとしても逃げたくはない。

目をつぶり、刃を受け入れるつもりだったがいつまでたっても切れやしない。

どう言うことかと思いい目を開けると剣が肌を切り裂く5cm前に割り込むように刀が剣と拮抗していた。

「サクラ!?」

「すいませんルーシィ。少々寝ていました」

「邪魔しやがって…。また殺されに来たのか？」

刀が剣を弾きガジルは5メートル程距離をとった。

「大丈夫なのサクラ!?? 傷は!?」

「大丈夫です…。ルーシィは下がってください」

「でも…」

「心配はしなくて結構です。今の私なら勝てます」

とは言えども残り一撃が限界だ。

そしてその一撃で傷を負うと生死を彷徨うだろう。

だから生きて来た中で最強の集中力を――

「邪魔ですね…」

「え？」

サクラは手に持つ刀を背中へと持っていていき、長く綺麗な薄い桜の色をした髪を両断した。

肩に落ちた髪を払うと何事もなかったかのように前を見据え、刀を構えた。

その姿に恐怖はない。心を無にし、刃を研ぎ澄ませる。

「復活しても何も変わらねエよ。お前はここで俺に倒されるんだよッ  
！」

腕が剣となり、そしてチエーンソーのように回り始めた。

防御不可の剣。ルーシィはサクラはどうやって躲すのかと思いいサクラを見たが避ける様子はない。むしろ相手を斬り殺す、そんな風に見えた。

「――」

思いの強さこそが、刃の重さ。  
サクラの持つ刀『天空桜』の想いが体に流れ込む。

「——アガートラムの神域 解放」

アガートラムの神域には全ての技が収められている。  
そしてそれを自由に扱いこなせる。

ならば出来るはずだ。

複数の技を一つに束ねる事が。

思い描く必殺は師であるジョニイがふと呟いたことだ。

“なんかお前って一発に三発内包した突きとか使えそうだな……”

何故使えそうなのか全然分からなかったがやらなければならない。

その技の説明は聞いた。

ならば可能はずだ。剣の達人達が生み出した技術を持つてすれば不可能であることの方が少ない——！

ガジルの刃が当たる瞬間サクラは消えた。

消えたのではない。速すぎた結果目が追いつかなかっただけだ。

「いつ、の間に……！」

ガジルが後ろを振り向くと刀を真っ直ぐに伸ばすサクラがいた。

そして自身の腕は貫通し、そのまま腹を貫通していた。

「終わりです」

キン、と刀が鞘に納められた瞬間、試合終了のビート代わりにガジルが大きく吹き飛んだ。

「——フェアリーロウ妖精の法律 発動」

妖精三大魔法の一つ。

妖精の法律。それは使用者が敵と認識したものを殲滅する広範囲の魔法である。

敵が多ければ多いほど使用者が死に近づくデメリットはあるがこの場にいるのはジョゼ一人と外に人形100体ほどであり、さして人体に影響はない。

優しい極光がギルドの周りを包んだ。

マカロフとジョゼというギルドマスター同士であり、聖十大魔道同士の戦いは圧倒的な差のもとマカロフが勝った。

「二度とギルドに手を出すな」

次来たたら本気で殺す、という目をしてギルドを後にしたマカロフ。

ジョゼは極光に焼かれ、焼けた炭のように白くなっていた。

「はあ、折角暇だから力を貸してあげたのにこのざまか」

「……」

気絶したジョゼの前に現れたのは――

「おっと、ネタバレはやめてもらおう。ラスボスは最終戦の前にバラすのが常磐だからね。でも俺はありきたりなラスボスではないけどね……さて、悔しくはないかいジョゼ？散々力を貸したというのにあっけなくやられた気分は？多分これ漫画にしたら2冊しかないよ？」

「……」

「でも俺は寛大な心の持ち主だからね。もう少し力を貸してあげよう。あ、もう喋っていいよ？終わったからね」

——は——、——突如消えた。

そしてジョゼが身につけている黒い指輪に怪しく八芒星が浮かんだ。

——  
憐憫と創生の精霊よ

——  
汝に命ず

——  
我が身に纏え、我が身に宿れ

——  
我が身を大いなる魔神と化せ

——  
出でよゲートイア

### 32 人類悪 顕現

「なっ… サクラ…！」

「シヨートヘアーにしてみました」

「俺が切ったエビ」

原作通り終わり一安心… と思った束の間、桜セイバーが現れた。

前世にてついぞや当たらなかった俺のアヴァロン（桜セイバー）

それが、いま、再現された。

個人的には某ノート所持者の彼のように「神イ！」と叫びたいところである。

神イって言ったのその手下のようなやつだっけ？

「キャンサー… あんた神だよ」

「ありがとうエビ」

「なんで土下座してるのよジョニイ…」

「それだけ私の髪型が似合ってるんですね！もっと褒めてもいいんですよ!!?」

土下座した状態で顔を少しあげるとドヤ顔をしたサクラがアホ毛をブルンブルンしていた。

うざ可愛いとはまさにこの事！

「はいはい、可愛いねえ」

「むう、気持ちが悪いです」

「ちよー可愛い！もう本当！気持ちで表したらファントムのギルドが爆発するレベ——」

ルと言おうとした直前、水に浮かぶファントムが爆発した。

文字通り木っ端微塵に。

ベジータがいたら汚ねえ花火だって言ってると思う。

「アルさん!?!」

「やってねえよ！」

弟子に信じて貰えない。

もうやだジャパリパークに帰る…。そしてサーバルちゃんと結婚するんだ…。

とうか今思い出したけど原作でこんなのがあったか？

本当誰だよキラークイーンしたの、モナリザの手でも見てエクスカリバー（意味深）でも立てとけ。

「おい！あれを見ろ！」

誰かが叫ぶように言い空に指をさした。

つられるように俺も空を見るとヤツがいた。

「ジョゼ…いや、しかしあれは…。」

そう、ファントムのギルドマスターであるジョゼ。

しかしその姿だ。

ヒト型のシルエットではあるが、筋骨隆々とした白と黄金の肉体を持ち、陥没するように裂けた胸部から赤く大きな眼球が覗き、頭部には枝のように伸びる無数の黄金の角を有した、恐ろしくも神々しい姿。

何処かで見ることがある。けど味方ではないのは確かだったはず。

「なんだったかな…。」

あんな形をしているのは漫画やゲームしかないなと思いつ脳内にある片っ端から検索する。

思い出したのにはあまり時間はかからなかった。けど思い出したことを後悔した。

何故ならそれは人類悪、またはビーストIと呼ばれる存在。

人理焼却を目指したソロモン72神柱の集合体。

『―――極大魔法』

写輪眼を使つたおかげで聞こえない声は口の動きで分かった。

「極大魔法だど!?？」

極大魔法。それは「マギ」と呼ばれる漫画にて登場する奥義。

金属に宿った魔神の力を引き出して行われる魔法は圧倒的といえる火力を持つ。

そしてその前兆に巨大な八芒星が浮かび上がる。

「おいおい… 何だよあれは…」

グレイが言ったそばから空中に八芒星が描かれた。

そして白い光があらゆる場所から集い円状になる。

「まさか… 嘘だよな…？」

前世の記憶が次々と蘇る。

その光は人類の歴史を熱量に変えた一撃。

一見して空に浮かぶ光帯だが円を形成する光の一本一本が聖剣エクスカリバーに匹敵する。この世界で例えるなら七星剣100発分くらい。

「全員防御魔法だ！早く使え！」

俺の切迫詰まった声が皆んなに緊張を与えたおかげでなんとか防御魔法を貼り始めたが焼け石に水だろう。

人類の歴史を束ねた光に勝てるものなんていない。

「天照二八式——三柱神！」

マカロフが両手を合わせるとギルドを囲むように三本の柱が突き立った。

一本一本が城壁のような強度… だがまだ足りない。

「なら俺もだな…！」

写輪眼で見てたのが功をなし俺も三柱神を使った。

消費魔力が洒落にならないがケチってる場合ではない。

計6本となった三柱神の他に、グレイの作った氷の盾や、名前をまだ聞いてないが口調が少しおかしい女の子が木を操り盾にする。

更にエルザの金剛の鎧。

「もってくれよな…！」

「――誕生アルス・アルマのとききたれり、其は全てデル・サロモニスを修めるもの」

光の円から閃光が放たれた。

糸のような細さで、何かに当たるとすぐに消えてしまいそうな光は真っ直ぐに伸び、木を破壊し氷の盾を破壊。

そしてマスターと俺で作り上げた六神柱をいとも簡単に破壊した。

「な——」

に、と言おうとした瞬間光線の内部に秘められた力が一気に周りに広がった。

その威力は核爆弾じみており俺を、そしてギルドを吹き飛ばした。

気絶していたのは数秒だったようだ。

顔を上げると人理崩壊ビームにより、ギルドがあつた場所には何も残っておらず土煙が舞うだけだった。

「素晴らしい……！」

これが魔装！王たる者の証！」

丁度俺の目の前にジョゼが降りてきた。

幸い大きな傷はない。

今なら——殺せる

「——オオ！」

握っていた刀を両手で持ち、踏み込む。

間合いに入っており魔道士であるジョゼには防ぎようがない一撃。

「——邪魔だ」

重力が襲いかかる。

俺の体が地面にめり込み指一本たりとも動かない。

エコーズACCT3で重くさせられた変態殺人鬼の気分が分かったような気がする。

「人芸風情が……王に向かって刃を振るとは身の程を知れ」

「はっ、テメエこそただの人間だろうが……盗んだ玉座の上で踊ってる馬鹿じゃねえか」

「——調子にのるなクズめ」

更に重力がかかる。  
骨がミシミシと軋む。

写輪眼で幻術にかけようとするがゲートィアは魔神。幻術なんか  
に引っかかりもしない。

『おいジョニー！聞こえるか！？聞こえたなら心の中で返事しろ！』  
脳内でウォーレンの声が響いた。

誰だと思う人に一応説明しておくどフェアリーテイルの世界でス  
マホ作った人だ。

『聞こえる聞こえる。問題なし』

『そうか。取り敢えず要点だけ言う。マスターがお前にかかっている  
重力魔法解くから、その瞬間攻撃をぶち込め！』

『ずいぶん難しい事言ってくれるじゃねえか…。いいぜ、のった』

ジョゼは擬似的にゲートィアの力を借りているだけと思うが果た  
して俺の拳は届くのだろうか…。いや、やらなければならないのだ。

後一回でも人理崩壊ビーム撃たれたらこちらの負けだ。

「はっ、さっきの威勢はどうした小僧？」

「能ある鷹は爪を隠すって言ってだな…。意味が違うような気がする  
けどー。」

体にかかっていた重力が消えた。

「八門遁甲 第四傷門開！」

脳内のリミッターが外れ獣以上の速さで立ち上がると同時に拳を  
捻り出す。

モーシヨンなしのパンチだ。

絶対に当たったという確信があった…。が

「この程度か？」

悪魔みたいな拳に綺麗に受け止められていた。

「貴様らの会話など簡単に聞き取れる」

「うお？？」

拳を握られボールみたいに空に投げられ、空中でバランスを取り  
ジョゼを見ると両手に取り付けられた無数の目から赤い光線が放た  
れた。

「確かそんなモーシヨンあったよな…!!」  
メル・フオース  
「真空の翔破！」

片腕を伸ばしそこから風の塊を放出する事で空中での移動を可能にした。

なんとか回避したが正直勝てる要素がない。

「だいたい何で魔装なんて使えるんだよ…!!」

完全に別作品であるマジに出てくる技。

まあ写輪眼を使っている俺が言うのはおかしい事だが俺の方がまだ控えめな能力だと思う。

「さあ、もつと私に本気を出させろ！」

ゴウ！と写輪眼で見切るのが精一杯の速さで間合いを詰めてくるジヨゼの拳をなんとかいなし、カウンターに鳩尾に肘を叩き込み、そのまま肘を垂直にあげ顎を弾きあげた。

第四傷門まで開いた一撃だ。少しくらいは…

「効かん効かん効かん効かんぞおおオオ!!!」  
無理だった。

顔を捕まれ投げられた。100メートルぐらい飛び誰の家かも分からない家に衝突し綺麗にめり込んだ。

「なんつて馬鹿力なんだよ…!!」

頭から垂れて来た血をぬぐい、前を見ると空中に浮かんだジヨゼの手に炎の大剣が握られていた。

100メートル離れても熱気が伝わり、汗が垂れる。

この時点で俺はジヨゼの能力がどのようなものか分かった。

一つは恐らくゲートイアの魔装。

二つ目はゲートイアはソロモン72神柱の集合体。

つまりはゲートイアは個であり群。

72神柱全ての力が使える——!

そしてその72柱は何故かマジに出てくるソロモン72神柱なのだ。

「――擬似魔装 アモン！」

アモール・ゼルサイカ  
焼き尽くす朱の宝剣！」

炎の大剣が真っ直ぐに俺の方に落ちて来た。

こんなものを喰らえば俺が死ぬどころか町にも被害が出る。

「いただきまーす！」

俺の横からバツと、見慣れた男が飛び出し炎の大剣にかぶりついた。

炎を食べてる時点で分かるがナツだ。

流石にジョゼもこれには予想外だったのか顔を困惑させている。

「ふう…： 美味エ炎だな」

「ナイスタイミング」

倒れた俺にナツが手を伸ばして来たので遠慮なく手を取り立ち上がる。

ナツの目にはジョゼを倒すと意志がメラメラと燃えていた。

ならば俺も立たなければ、一応ギルドメンバーなのだから。

「こういう時はなんていうんだっけナツ？」

「燃えて来た――だろ？」

### 33 人の力

「火竜の——」

肺に酸素を大量に取り込み、火の魔力を収束させる。相手はゲーティア。油断も隙がない故にいつも以上の本気で戦う。

「——咆哮ツツ!!」

俺とナツの口から同時に周囲を焼き尽くす炎が放たれた。

二つの炎は一つに重なり規模と威力を倍になっている。

更に俺は腕を前方に伸ばし風魔法を発動させた。

「——真空の翔破!!」

前を疾る炎に強風を後ろから叩きつけることで更に炎が舞い上がった。

元の四倍はあろうかという炎の群勢。

それを前にしてもゲーティアは動かない。

「——擬似魔装 ヴィネア」

ジョゼが空中に手を掲げると周りの水蒸気が収束し、巨大な水の塊になった。

更にジョゼが手を前にすると水が細長くなり、先端が針のように鋭く、そして回転していた。まるで水のドリル。

「——ヴァイネル・サーズ水神の風槍」

ドツ、と激流の槍が炎に直撃した。

ナツほどの魔道士ならば水程度蒸発するのだが、ジョゼの放った水の槍は容赦なく炎を消化させた。

それどころか炎を貫き離れた俺たちも水の槍に巻き込んだ。

「ふざけた能力だな...!」

「まだまだこれからだろ!」

「分かってる…！」

ナツの手に炎が灯る。

俺は拳を強化し、ラビットステップを足だけに発動させた。

「——来るがいい。悪魔に保持者よ」

こいつ原作始まったばっかなのにそんな物語の核心をいうか!??  
というか俺のこともバレてる！

やっぱりゲーティアを魔装してるせいで分かるのか…

「けど…んなもんどっちでもいい！」

地を蹴り、一瞬でジョゼの間合いに入り込む。

ナツも数瞬遅れで俺の横に並んだ。

「おお…！」

拳と脚を使い分け逃げる隙もないほど早く叩きつけるが片腕で全て捌かれる。ナツも俺と同様全て捌かれていた。

魔装した事で所有者に圧倒的な力をあたえるせいで体術の力も上がっている。

「火竜の鉤爪!!」

「擬似魔装 ダンダリオン  
ダンテアルタイス  
七星描く虚像の星」

ジョゼの体の前に星座のような魔法陣が現れ、ナツの足は吸い込まれるように魔法陣に入った。

次いで俺の目の前に星座のような魔法陣が現れそこから炎を灯した足が現れた。

「うお!? あつぶねえ！」

「何だこれ!?」

「ダンダリオン… 空間移動のジンだ」

こいつも何個も使われたら厄介だ。

こっぴどい奴相手にはまず動きを止めなければならぬ。

「アイスメイク——槍騎兵！」

奇襲ともいえる氷の槍がジヨゼを突き刺しそのまま伸び、地面に突き刺した。

俺たちも横を見ると 그레이が地を流しながらも魔法を使っているのが見えた。

「偶には奴に立つじゃねえか 그레이」

「はっ、俺はいつも役に立ってんだよ... それに比べてお前はやられてばかりじゃねえか」

「んだとゴラア!?」

「やるのかアア!」

「こんな時に喧嘩すんな馬鹿!」

いつも通り過ぎて頭痛がする。

二人が胸ぐらを掴み会った瞬間 그레이の作った氷が大破し、中からジヨゼが起き上がった。

「奇襲とは言え私に攻撃を与えるとは... 褒めてやろう」

그레이の氷なんてまるで食らってなかったかのように無傷。

「はっ、テメエなんかの褒め言葉なんかいらねえよ。それに俺一人じゃねえからな?」

「何?」

銀の光がチカツと輝いた。

ジヨゼが後ろを確認したと同時に天輪の鎧を来たエルザがすぐそこまで来ており剣を振り上げていた。

「天輪——繚乱の剣！」

大砲じみた勢いで無数の剣が射出され、土埃を舞いあげた。

「そんなものは効かん」

ジヨゼの周りには木で作られた龍が剣を体で受け止め、唸っていた。

植物と空中の微生物を操るジン、ザガンの能力だ。

「そんなものここにいる全員で打ち砕いてやろう」

「散々壊されたからな... ツケの領収書はちゃんと払ってもらうぜ」

エルザとナツとグレイと俺の4人。

それでも勝てる気がしないが、おそらくジョゼの魔装が消えるのもあと数分だろう。

それでも倒せなかったら一様奥の手が残ってある。

「あいつの能力を一番知ってるのは俺だ…こう言っちゃ何だが指揮させてくれないか？」

「ジョニーあいつの能力知ってるのか？」

「ああ、流石に全部じゃないけどな。それでもこの中だったらおそろく俺が一番知ってる」

「ならば任せた。——行くぞ！」

グレイを除いた三人でジョゼに特攻を仕掛ける。

狭み込むようにナツとエルザが左右を、俺は背後を取り各自攻撃に移行する。

ジョゼが手を左右に開けると星座のような魔法陣が再び現れた。

「それに攻撃を当てるな！仲間当たるぞ！」

「分かった！」

俺は空中に飛び上がり強化された脚で踵落としをしたが地中から生えた岩の壁が邪魔をし命中しなかった。

「アガレスも使うのかよ…！」

ジョゼが空中にいる俺の脚を掴み、ぶん投げた。クルクルと空中で回転するが何とか体制を戻す。しかし追撃をかけようとするジョゼが突進を開始した。

「ジョニー！脚を出せ！」

エルザの声が耳に響き後ろを見ると巨人の鎧を着て何かを投げる構えをしているエルザと、その後ろに拳を構えるナツが見えた。

「なるほどな…！」

脚をエルザの方へと向け、折りたたむ。

ジョゼは10メートル程前。

エルザの手に俺の脚が当たった瞬間、後方へと行く俺の体は静止し、体にすごい重力がかかった。

「ぶっ飛べええ!!」

ナツの拳が俺を投げとばそうとしているエルザの肘を後押しする事で、異常な速さで俺は前に飛んだ。

写輪眼を発動してなかったら今頃壁に激突していただろう。

そしてこの一瞬だけはジョゼよりも速い——!

「——オラア!!」

グジュ!と不快な音を立て俺の黒い刀が魔装したジョゼの肩を突き刺した。

そのまま真っ直ぐに飛びついでい言わんばかりに顔面をぶん殴った。

「貴様アアア!!」

「はっ!やっぱり使いこなせてないな!」

魔装と呼ばれる能力は前に説明した通り金属に宿った魔神の力を一時的に体に纏う能力なのだが、引き出す力はおそらく元の魔神の半分以下だと俺は思う。

更に加えて魔装は1日2日で覚えられるわけではない。使えたとしても初期能力として搭載されているものに限られているだろう。それこそ火や水を出すぐらい。

何故こいつが魔装を使えるのかは分からない。しかしこれだけの人数の魔道士がいるのなら倒すことは不可能ではない。

「擬似魔装フェ——」

「フェニクスで癒すつもりか?」

そんな隙与えるわけねえだろ」

ゲーティアの背後には已にグレイが潜んでいた。

「アイスメイク——氷魔剣!」  
アイズプリンガー

空中に浮遊していた氷の剣がグレイを命令を受けて、縦横無尽に飛び交いジョゼの体に突き刺さった。

「そういうわけだ... 大層立派な魔法らしいが発動出来なきや意味はねえな」

隙を与えず、弱点をカバーしながら攻撃を与える。  
現段階ではこれが精一杯だが着々とダメージは蓄積されているはずだ。

「このクソガキがああ……！」

顔に怒りを表したジョゼは手を上空に向けた。

そして光が収束し、一つの光帯となる。

「極大魔法——」

もうみんな魔力は残ってない。

グレイもジュビア戦の時にかなり魔力を持っていかれたようで流石に地に足をつけている。

「流石に俺も限界だ——けどなジョゼ。お前は何か忘れてないか？」

「何？」

俺は思わずニヤリと笑みを浮かべた。

全て計画通り。

「お前が怒って極大魔法を使うことは簡単に予想出来た。ならば簡単だ。その隙を狙えばいい」

「貴様何を言ってる——!?？」

「——出番だぞ、サクラ」

ジョゼの背後にサクラが瞬間移動じみた速さで現れる。

ジョゼが覚醒する前にサクラに聞いたのだ。

アガートラムの神域と呼ばれるものには全ての技が収納されており、ありとあらゆるものに対して有効な技が発動出来る。

ならあるはずだ。

——対神の一撃が

「貴様アアアアアア！」

「悪いな、これも戦略なんで」

「――奥義　神殺」

銀閃がジヨゼを斬りはらい、空に浮かぶ八芒星が金の光を放ちながら空に消えた。

### 34 すぐに始まる楽園の塔

夏だ！海だ！サーヴァントバケーション！（違う）  
やあみんな。ジヨニイ・アルバートだよ。

今いるのはアカネビーチホテルと呼ばれる有名な観光スポットでもある場所に來ている。

察しているとは思うが楽園の塔編だ。

この話では真島作品お馴染みのジエラール顔…元を辿ればジークハルト顔の例のあの人が出て来る。

そう、ジエラールだ！

と言つてもジエラールは原作始まってすぐに登場してたけどね…超どうでもいいけど俺はジークハルトの方が好きである。

理由は何と言つてもジークハルトの死亡シーンに尽きる。

“それはエリー…お前を守り抜くこと！何も心配しなくていい。全てのものから守つてやる！”

というジークハルトさんの言葉には我輩涙が溢れました。だからみんなRAVE読もうぜ？

「ジヨニイ、皆の所には行かないのか？」

「暑いからパス。もうちよいしたら行きますよ」

隣に佇む水着姿のエルザ…何時ものように俺はアホな顔をしているが気をぬくと姫騎士を襲うオークのようなゲス顔になる。

というかエルザデカイ。身長ではない。男なら一度は触りたいアヴァロン。

上半身から見て！と言わんばかりにアピールする二つの物体！

これを見ずにいられるだろうか？

いや、ない！

「む、そんなマジマジと見られると困るぞ」

「すいません」

気を収めるために買って来たコーラを一気に飲む。

喉でシュワアアと炭酸が弾け凄く痛いが高ぶる俺の心を抑えるために丁度いいだろう。

「ちよつと俺トイレ行って来ます」

そう言つてエルザの前から逃げるように走つた。

別に興奮してたわけじゃない。

…いや、本当だよ？

それよりも問題は楽園の塔だ。

確かゼレフを復活させるためにエーテリンオンを楽園の塔にぶち込みRシステムの完成！みたいな感じだったような気がする。

そんな事を知つて旅行を楽しめと？

無理だろ。

そういえば今思い出したがサクラは今日留守番である。何でもアガートラムの神域の使いすぎで腕を痛めたとか何とか…。まあ神になりかけのジヨゼをぶちのめす力を使ったなら仕方はないだろう。

「はあ…ダルいなあ…」

お家帰りたい。

何で地獄と分かっている場所に来なきゃならないんだ…。

最悪暗闇の中で口の中に銃入れられて打たれる可能性もあるからな…怖すぎだろ。

俺ナツみたいに歯で止めるなんて不可能だからね。

そもそも歯が碎ける。

「難易度跳ね上がってるなあ…！」

思わず頭を抑えてしまう。

今回の危険な場所はカジノ、そして楽園の塔のRシステムが完成後、爆破。

両方とも死の匂いが漂ってるな…

お腹痛いとか言つたら休ませてくれないかな…無理だよな。

ルーシイからのカジノの誘いを断り部屋で魔力を高めて早30分。いつもよりちよつと多めになった魔力を確認し、年を入れるためストレッツチ。

そして俺お馴染みのパーカーにジャージ。手をグツパツさせ、体調確認した直後俺の頭にドアが突き刺さった。

「ジヨニイ！大変だ！エルザが拐われた！… っで何で倒れてんだよジヨニイ？」

「お前のせいだ…！」  
頭が頑丈でよかった…

というかもう来たんだな… 仕事が早いことで。

「それでエルザが拐われたから助けに行くんだよな？」

「おお！すぐ行くぞ！」

ということだ。ナツの鼻を頼りに船でエルザの匂いを辿る… が船酔いの所為で果たしてあっているのか間違っているのか。

「気になったけど何故ジユビアがここに？逃げたのか？自力で脱出したのか？」

「人聞きの悪いことを言わないでください！」

シャーと怒りをあらわにするジユビアだが、原作通りグレイにぴつたりである。

現実に見てみると引かれ合う磁石を思い出させるな…

「私は自分の意思でここにいます。ね？グレイ様♡」

「ああ… そうだな」

ずつとべつたりのジユビアに思わず顔をひきつらせるグレイ… 羨ましい…

怒りのせいかわきが乾く。換装の空間からストックしていた水を取り出し口に含む。

「うう… 気持ち悪い…」

「しつかりしなさいよナツ。あんたの鼻にかかっているんだから」

「というかアレだよな、多分」

俺の指の先には100メートルを優に越した塔。

崖に囲まれ外からの進入はほぼ不可能であるが、ジュビアの酸素が入った水を作って下から進入したはず。

「外からはちよつとキツイな。ジョニイの風魔法で何とか出来ないのか？」

「無理無理、俺そんな器用じゃないしそもそも一人で限界」

「使えないわね」

「おいルーシイ。言っていていいことと悪いことがあるぞ」

俺が軽く心の傷を受けている間にジュビアが海の中を搜索。

これってコピー出来ないのかなと思ひ写輪眼を発動させてみたが無理だった。

結構使えそうな場面があるのに残念だ。

「下からいけますね」

「よし、行くか」

「ああ」

「いやいや、絶対息続かないでしょ」

ルーシイのツツコミも「何とかなるだろ」と聞き流し行こうとする二人。

こいつらジュビアいなかったらマジで行くつもりだったのが気になる。

「ジュビアのこの水を被れば水中でも呼吸が可能です」

「流石水の魔道士・・・」

ということでも早速ジュビアから受け取り被ってみると奇妙な感覚だった。

こう・・・何だろう。水の中にいるのにいないみたい。

「それじゃ行きますか」

「ああ、エルザが待つ——おええ・・・」

「そこぐらいはカツコつけようぜ？」

### 35 楽園の塔

楽園の塔、最上階では黒いローブを羽織った男が玉座の上に足を組んで座っていた。

男の横には小さな机が一つあり、チェス盤が乗せられていた。

通常なら32個の駒が乗せられているボードには片側には4個。もう片方には4個乗せられていた。

「面白い、準備が出来るまでの暇つぶしだ」

「では…」

髪を肩にかかるまで伸ばした男が今か今かと気持ちを抑えられない声で問うた。

ローブの男は口角を上げ返事をした。

「ああ、行つてきてくれていい」

瞬間髪が長い男が光に包まれた。

男の後ろにいる2人がクスクスと笑う。光が晴れた先にはさっきの真面目な雰囲気は何処に行ったのか手にはギター、顔は真っ白、そして服装はT○レボリューションを思い出させる服装になっていた。

「ヒヤハアアアアアアア！パーティの時間だぜええええええええ!!!」

手に持ったギターが雄叫びをあげるように唸る。

「ああそうだ。エルザだけは出来る限り殺さないように」

「向こうが弱すぎて殺してしまうかもしれないけどね…」

カコンカコンと浴衣を着た女がクスリと笑う。

街にいればその美貌で何人も誘惑出来る容姿だが、腰に備え付けられている一本の長刀を見れば誰もが一目散に逃げるだろう。

「正義の仇を為す者はぶちのめしてやるホウ！」

そして女の横に並ぶ男(?)は360度何処からどう見てもフクロウだった。ただしミサイルを背負い、筋肉隆々である。

この三人は三羽鴉(トリニテイレイヴン)と呼ばれており、闇ギルド「髑髏会」に所属する伝説の特別遊撃部隊。カブリア戦争で西側の

将校全員を暗殺した実績を持つ。

ロツクな男がヴィダルダス・タカ。

浴衣の女が斑鳩。

フクロウ男が梟。

フクロウ男だけそのままだが気にしなくてもいい。

「あの方はどうなさるん？」

「勿論彼にも出てもらう」

ローブの男が部屋の柱に目を向けるとそこには赤い外套を纏った白髪の男がいた。

白髪の男はローブの男に目を向けると淡々と話した。

「世界を救うためだからな。この手を闇に染めてもやらねばならん」

「というわけでね。よろしく頼むよ」

ローブの男がポケットから手を出す。

指の間に握られているのは4つの駒。しかしそれら全てはチェスの駒にはありえない駒であり、一つが剣を掲げた騎士のピース、一つはギターの形をしたピース、一つは人狼のようなピース。

そして残った一つは――

「――トレース・オン  
投影、開始」

「エルザの居場所は何処だゴラア？」

「ただのヤ○ザだな…」

ジュビアお手製の酸素入りの水によって下から潜入した俺たち5人は上陸するなり、楽園の塔を守っている兵士達をボコってエルザの居場所を聞いている途中だった。

と言つても上がつてすぐに合流するんだけどな…

「写輪眼でせいっすら見たけど全員知らないようだしな。手っ取り早く上上がるうぜ」

「あんたの目って本当便利よね…」

「いやいや、そんなこともないぞルーシー。なんて言つたつてこと秒で目取られることもあるからな？カ○シ先生みたいに」

「誰よそれ…」

NARUTOではカ○シ先生の目は僅か1コマで取られる名シーンがあるので是非チェックしよう！

まあこの漫画、目を取るのが日常茶飯事だから仕方ないか。

「んじや取り敢えず…アイスメイク」

グレイが片方の手のひらにもう片方の丸めた拳を置くと上へ続く梯子が出来上がった。

グレイに続き俺も登るがやはり冷たい。

と上層階に渡るとナツが某巨人漫画のようにエルザと叫びながら何処かへと走つて行つた。

「どんすんだよアレ…」

「後で合流すればいいだろ。馬鹿に合わせるのは面倒だからな」

誰が馬鹿だどこのやろおおおオオ、と遠くから聞こえたが気のせいだろう。

いや、確か滅竜魔道士って耳も良かったから案外聞こえてるのかも…。

これから悪口言わないでおこう。

言つたことないけど。本当だよ？

「な… お前達どうしてここに…」

後ろを振り返るとエルザがいた。

手には剣が握られており、原作との相違点は特になし。

「わ、私達はエルザが拐われたからそれで…」

ルーシーがおそろおそろといった様子でエルザに伝えると、エルザの顔は申し訳なきに包まれた。

手に持った剣が力なく地面に落ちカツンと音を鳴らした。

「… 迷惑をかけてすまなかつたな。だが私は大丈夫だ。先に戻って  
てくれないか？」

「え？でもナツが中に…」

「問題ない。後で私が連れ戻す」

一人で進もうとするエルザの肩をグレイが掴む。

「待てよ。何の説明なしで帰れって言われて納得出来ると思うか？そ  
れとも何か？俺たちが信用出来ないのか？」

「違う… そうじゃない。ただここは…」

エルザの顔に陰が写る。

それはそうだろう。ここはエルザが奴隷として育った場所、そして  
仲間との別れを知った切つても切れない関係がある場所なのだ。

「話してくださいよ。結末がどうであれ俺たちは仲間だ。ちよつとや  
そつとのぐらいじゃエルザさんを見損なったりしませんよ」

我ながらかなり胡散臭いことを言っている。

だが効果は良かったのか僅かながら微笑み幼少期の頃を話し始め  
るのだった。

エルザの幼少期の話は原作と同じだ。

だからそれについては話す必要はないだろう。

分つかないよ！という人は原作を見て欲しい。俺は説明が下手  
なんだ。

「嘘だろ姉さん…」

エルザが話し終わると、信じられないと言った様子で名前が分から  
んがホストのような男が出てきた。

彼こそがエルザの友人であり、兄弟とも言える内の一人であるシヨ  
ウ。

「シヨウ…」

「いいや… そんなの嘘に決まっている！ジエラルが教えてくれた  
んだ！あの時船を爆破させ、姉さんだけが脱出したって！」

息を荒げ、髪をグチャグチャにしながらかぶ姿はあまり見たいものではなかった。

信じていたものに裏切られた、それがどれだけ辛いか……俺はよく知っている。

「……？」

待てよ……何で俺はそんな事を知っているんだ？

そんな経験なんて俺はした事がないはずなのに。

「大丈夫かジョニー？ 顔色が悪いぞ？」

「あ、あすまん。大丈夫だ」

グレイの言葉に返事をし、記憶を探る。

しかし霧がかかったかのように何も覚えてない。まるでそこだけえぐり取られたかのようなようだ。

『ようこそ。楽園の塔へ』

遮るように壁に口が無数に現れジェラルルの声が響いた。

『互いの駒は出揃った、これより楽園のゲームを開始する。我が名はジェラルル。この塔の支配者であり、真の「自由」を掴む者』

さっきの考え事を放棄し、今に向き合う。

ここかは命の駆け引き。いつ死んでもおかしくない。

『ルールは簡単だ。生贄であるエルザを俺に取られたら負け、実にシンプルでいいだろう？ だがそれだけでは面白くない。こちら側からも4人の刺客を送ってある』

……？

何だこの違和感は……何処もおかしくないのに何かがおかしい。

記憶を探る。確かこの時出てきたのはフクロウと浴衣女とロツクな人と……それだけ？

いや、これだけだった！

決して4人ではない！

『とはいえ一人は早く終われさせたいようだね。君たちの元にもう行ってるかもしれない』

その言葉通り、遠く離れた場所から銀の光がチカツと光った。

「ツツ！伏せろ！」

「!?？」

エルザに向かって飛んできた剣の群れを、エルザの前に飛び出し持っていた刀で弾き飛ばす。

離れた所から靴の音を鳴らしながら来る男は赤い外套を纏い、両手に白と黒の剣を持った男だった。

「おいおい… 嘘だろ…」

その容姿に見覚えがある。

だってあの格好って確実にエミヤ…

「驚いた。完全な奇襲だと思ったがまさか防がれるとは… 俺も存外甘かったということか」

「はっ、バレバレなんだよ。そういうのはアサシンのクラスになってからでもいいな」

俺が以前から思っていたことがあったが今回で全て分かった。

この世界には俺以外の転生者がいる。以前ララバイの時に戦ったロビンという男もおそらく転生者だったのだろう。

「ここは俺が残る。だからお前らは先に行け！」

「… 一人で大丈夫か？」

「ああ、5分もあれば後で追いついてやるからよ」

「はっ、そうかい。なら期待しておくぜ？」

グレイたちの足音が遠ざかる。

ある程度の距離まで離れてから俺はまた口を開いた。

「というわけだ。俺に付き合ってもらおうぞ… 錬鉄の英雄の模範者さんよ…」

「君を殺してからでも充分間に合う。どれ、3分間だけ楽しませてくれよ？」

だだっ広い空間は無数の剣戟によつて原型を留めていなかった。  
そうしたのがただ二人の男だと誰が信じるだろうか？

「赤原を行け——フルンディング赤原猟犬」

赤い外套を纏った男が赤い矢を弓に5本つがえ

フルンディング打ちはなつた。  
赤原猟犬。

北米神話の英雄であるベオウルフが振るつたと言われる剣。

しかし今は剣ではなく矢として放たれていた。

勿論この世界にそんな物騒な物は存在しない。

それが出来るのはヤツがエミヤの力を持っているからだろう。

そしてフルンディング赤原猟犬の効果は射手が存在する限り標的を追い続けると  
かいうふざけた効果を持っている。

——つまり回避不能だ。

だがこの程度で諦めるわけにはいかない。

ヤツがエミヤの力を手に入れたのならばきつと今思い浮かんでい  
る作戦が成功するはずだ。

「——写輪眼！」

赤い目でヤツを睨みつける。

写輪眼は相手を見ただけで幻術にかける最高峰の目だ。

赤い矢は既に俺に食らいつこうと猟犬のよう何処までも追跡する。

だが俺の方が一手早い——！

目の前に殺到した赤い矢は、まるで獲物を変えたかのように軌道を変逆に変え、ヤツに飛んで行った。

ヤツは顔を少し動かしただけで、すぐにフルンディング赤原猟犬の力を止め、ただの矢として新たに投影した剣で弾き飛ばした。

「はっ、愛犬に嫌われてんな」

「生憎昔から犬に嫌われてるんでな……今更どうということはない。しかし面白いことをするな……まさか幻術で標的を私に変えるとは……」

そう、フルンディング赤原猟犬の力を知っていた俺はヤツに幻術をかけターゲットを俺からヤツに変更したのだ。

一か八かの賭けだったが無事成功してよかった。

「エミヤの対魔力はそう高くはないからな……覚えててよかった」

「エミヤ？何を言っている？」

「なんだ……お前記憶なしかよ。やっぱり俺が例外なのかな……」

「何を言ってるか分からんがお前はここで殺す」

俺を転生させた神様は転生者は皆平等に記憶を消すと言っていた。ならば何故俺は記憶があるのか？

単なる偶然であると思うのだが今は気にすることはない。

「——」

一瞬の静寂。互いが武器を構え睨み合う。

空気が限界を超え音を立てた瞬間、俺は足に魔力を送り加速した。

「——ツラア!!」

神様から貰った刀が空気を切り裂き、高い音を散らしながらヤツの身に迫る。

しかしヤツは英霊の力を借りてる身。そう簡単にはいかない。

「——トレース・オン投影、開始」

ヤツの手に黒と白の双剣が握られ、黒の剣の側面で俺の刀を流しながら白の剣で俺の胴体を的確に狙っていた。

「刀身変化——槍」

グニヤリと俺の持つ刀が焼いた硝子細工のように曲がり細長くなり、一本の黒い槍と化した。

その柄で白の剣、干将の刃を妨げる。

両手で槍を持ちクルリと一回転させ、ヤツの手から干将をはたき落とす。

「セイツ——!」

槍を弓を引くように大きく後ろに引き前に突き出す。

銚で獲物を狙うように鋭く放った一撃であったが黒の双剣、莫耶に軌道をずらされた。

だが元より槍なんかで決めるつもりはない。

そもそも槍なんて師範代の練習の時ですらあまり使わなかったのだ。

槍を空中で手放し一步距離を詰める。

拳を軽く引き、一度空気を吐き出す。

足に力を入れ、息を吸う。

拳を捻りながら、前方へと叩き込む。

これぞ俺が再現したなんちゃってマジカル（狩る）★八極拳。直撃

すればエミヤの能力を持っていたとしても心臓どころか体全体が爆★殺する一撃だ。

「――I<sup>体</sup> am<sup>は</sup> the<sup>劍</sup> bone<sup>出</sup> of<sup>来</sup> my<sup>て</sup> sword<sup>る</sup>」

紡がれた一節。

それは英霊エミヤの「劍」という起源を呼び起こす。

心の世界に内包された無限の劍を呼び寄せる。

「――熾<sup>ロ</sup>天<sup>ア</sup>覆<sup>イ</sup>う七<sup>ア</sup>つの円<sup>ス</sup>環」

目の前に七枚の光の盾が花のように咲いた。

俺の拳は紙切れみたいに薄い花に衝突し、周りに爆風をもたらすと同時にゴキツと嫌な音が響いた。

何せその盾はトロイア戦争においてヘクトールの投擲を防いだ盾。花卉1枚1枚が城塞と同等の防御力を持っている。

「ツツ…！」

魔力を体に回し、身体調査をすると拳はヒビが入っただけでなんとかなりそうだ。

光の盾が消え、ヤツの足が伸びる。

俺の腹を狙った蹴りを脇で挟み、肘を掴んで伸びた足の膝に叩き落とそうとしたが、ヤツは足をたたみ込み、防御した。

「――ト<sup>レ</sup>ス<sup>ス</sup>・オ<sup>ン</sup> 投影、開始」

ヤツの手には二本の短劍。

それを挟み込むように俺の顔めがけて投擲するのを足のロックを外し、直接手で掴み止める。

「セイツ――！」

ヤツの裂帛の音が響き、拳が振るわれた。

俺は投影品の短剣の腹で押さえ込む。

元となった宝具のランクが高かったのかヤツの拳は短剣を貫通することはなかった。

「何故邪魔をする…！」

「何度も言ってるんだろ…！」

ここから先に行かせるわけにはいかねえからだ！」

ヤツの拳を払うと同時に投影品の短剣を逆手に持ち喉めがけて素早く振るう。

当たる直前に投影品を消してしまい、当たることはなかったが続きざまに俺の刀を使い斜め下からの切り上げ。

これも流されて当たることはない。

「キリがないな…！」

ヤツはそう言い両手に持った干将・莫耶を地面に落とす。

「そうかよ。ならもつと相手にしてくれ。そうすれば時間を稼げるから」

「そういうわけにはいかん。この塔を完成させるために貴様らは邪魔だ…あまり見せたくはないが仕方がない」

ヤツは手を前に伸ばし、目を閉じる。

全神経を集中させ、ヤツは言葉を紡いだ。

「I am the bone of my sword」

地面が揺らぐ。ヤツの体から青い魔力が漏れ出し、世界は変動する。

Steel is my body, and fire is my blood

「マジかよ…アレ使われたら勝ち目なんてないぞ！」

刀を振るうが鮮やかな花の盾に阻まれ、傷を負わせることは出来ない。

I have created over a thousand blades

Unaware of loss. Nor aware of gain  
《ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし》

Withstood pain to create weapons,

waiting for one, s arrival.

I have no regrets. This is the only way

My whole body was

”  
u<sup>無</sup>  
n<sup>限</sup>  
l  
i  
m<sup>の</sup>  
i  
t<sup>劍</sup>  
e  
d  
b<sup>で</sup>  
l  
a<sup>出</sup>  
d  
e<sup>来</sup>  
w<sup>て</sup>  
o  
r  
k<sup>い</sup>  
s  
”  
た

### 37 星と竜

その世界には何もかもがあつて何もかもがなかった。

荒れ果てた荒野に突き刺さるのは剣剣剣剣剣…… 剣だけが突き刺さつていた。

数えるのが馬鹿らしい程無限にある剣はどれもが違う形をしており、どれもが濁つたように土煙が纏わりついていた。

空にはギシギシと動く壊れかけの歯車。

これこそ英霊エミヤの持つ宝具。

——アンリミテッドブレイドワークス無限の剣製

心象風景を具現化する大魔法である固有結果こそが英霊エミヤのたどり着いた果て。

正義の味方に誰よりもなりたかつた少年が手にした希望という名の絶望こそがこの世界。

「さあ、終わらせよう」

ヤツは背後に無数の剣を待機させ、それを同時に射出した。

「ここまで来てまだ邪魔をするか……」

ジョニイは知らないことだが、楽園の塔は超魔導精霊力エーテリオ

ンの27億イデアという莫大な魔力を得て、巨大な水晶の塔と化した。

エルザはジェラールを止めようとしたが失敗。更にはラクリマに取り込まれるところだったがギリギリの所でナツが助けに来てくれたのだ。

「お前がエルザをやったのか？」

「ああ」

「親友だったんだろ？」

「過去の話だ」

ナツはそうかと簡単に返事をし、呪印で床に倒れふすエルザの元に近づいた。

「ナツ…」

最初こそ心配そうな目でエルザをみていたが、突如何時ものイタズラ好きの少年のように動けないエルザの脇腹をくすぐった。

「ほれ！何時もはこんな事出来ないからな！」

「バカ！何をやってハハハハハ！」

動けないため抵抗も出来ない。

数十秒もするとゼエハアと息をこぼしていた。

「ナツ… わ、私は大丈夫だ… だから…」

「今更引けって言わねエでくれ」

全身から零れだすのは憤怒の赤。

地面のラクリマさえ溶解させる炎。

「だいたい何が世界平和だ。人を犠牲にしてる世界平和なんてただの偽物じゃねえか」

「分かかってないなナツ・ドラグニル。人間っていうのは犠牲になりあつてるからこそ生きているんだ」

ジェラールが羽織っていたローブを脱ぎ捨てると、戦闘に特化した服が着込まれていた。

「違エよ。支え合ってるから生きてるんだろ」

「御託だな」

ジェラールが指を二本あげると噴火した火山のようにナツの足元

のラクリマから光が溢れ出した。

ナツは手から炎を噴出し、空中で体制を取り眼下にいるジェラールに向けて自慢の火竜の力を振るう――

「火竜の咆哮ッッ――!!」

口から爆炎が放たれた。

全属性の耐性を持つラクリマが溶ける超高温の炎。さっきまでの疲れは何処に行つたのか。

「――流星<sup>ミーティア</sup>」

しかし文字通り流星と化したジェラールによって簡単に躲された。天体魔法、別名宇宙魔法とも呼ばれるそれは世界を掌握する力を持つ。

例えばミーティアならば体の重力をなくし、ベクトルを操作する事で圧倒的な速さで移動することが可能だ。

「火竜の――」

「遅い――!」

ズン!と重たい拳がナツの腹にめり込む。

しかし逆にナツはその手を燃える両手で力いっぱい握りしめ、拘束し、思いつきり自身の頭をジェラールの頭に打ち込んだ。

「グッ……!」

「エルザの拳より痛くねえな……!」

両者頭から血を流す。

それでも止まらない。ナツは炎の拳を叩き込もうとしたが、ジェラールはそれを半回転して避けると同時に裏拳をナツの拳に叩き込んだ。

「調子に乗るな……!」

白い光が地上に舞い、ナツの体を傷つける。

適応しようにも目で追いつけない。

(目だけに頼るな…… 空気、匂い、勘…… 全部使え!)

「そこだアアアアア!!」

背後からの攻撃。

ナツは超人的な直感を用いて拳を振るったが、当たる直前にカクンと流星が折れ曲がりナツの脇腹を抉った。

「まだ早くなるのか…!」

「天体魔法の真髄を見せてやろう!」

白い流星が地をかけ、ナツの体を更に抉り空中に跳ね上げた。

ナツの真上に移動したジェラールは指を開いた拳の上に、二本の指を立てた拳を重ねた。

「——七つの星に裁かれよ」

7つの複雑な魔法陣がジェラールの周りに現れ、純白な光を生み出す。

さながらそれは星…いや、光の剣と言ったところだろうか。

「——七星剣!」

魔法陣から7つの極光が撃ち放たれた。

天体魔法でも上位に入る攻撃力を持つ七星剣は一つ一つが即死級の火力を持つ。

ナツは避けれないと悟り、勢いよく体を回転させ始めた。

「ウオオオオオ!!!」

足に炎を纏い、回り続けたことで炎が竜の尾のように鋭く舞う。

「火竜の——旋尾ツツ!!」

足から放たれた炎は7つに分かれ、それぞれが七星剣グランシャリオにめがけて飛んで行った。旋回することで鋭さが増した炎の剣は七星剣グランシャリオを存在することはなかったが勢いはかなり削ぐことに成功した。

「小賢しい真似を……！」  
流星ミステイア！」

再び白の流星となる。

しかし先ほどに比べてナツは回避や防御が成功している。

「もう慣れたぞ……！」

火竜の——」

白い流星がすぐ目の前を通るが、拳を振り抜いた時には既にそこにはいない。

「遅——」

「——炎肘ツツ!!」

ドゴツツ!!もナツの重い一撃がジェラルルの頬にクリーンヒットした。

ジェラルルは鉄拳で前に攻撃すると重い前方を通ったが、それはナツの罠であり本命は背後への攻撃。難なくジェラルルは騙されたのだ。

「貴様ア……!!」

「ハッ！ジョニイに比べたら全然体術が出来てねえな！」

ナツは走る。

両手に炎を燈らせ、周りの被害など関係なしに拳を、足を振り続ける。

だがジェラルルも負けてはいない。天体魔法による未知の魔法でナツを攻撃する。

「天体魔法——」

「さっきのやつか!?もう効かねエぞ!!」

「馬鹿が、効かないと分かっている技をする馬鹿がいるか？」

「アルゴ・ナウティカ  
英雄たちの船」

ジェラルルの頭上に巨大な魔法陣が現れた。

魔法陣が白く輝くと、魔法陣の中から太古の海賊船のようなものが現れた。

全長はおよそ100メートルは超すであろうその船の先端には巨大な砲台が取り付けられていた。

「——何も残さず死ね！」

砲台が赤く輝く。

この魔法は文献にも乗ってある実在する古代の海賊船を転送魔法陣を用いて呼び出し、島一つを破壊する魔導砲を撃つという魔法。

その魔導砲が血のように赤いレーザーをナツに向かって撃ち放った。

「火竜の——咆（わ）……！」

極光がナツを包み込み、巨大な爆発を巻き起こした。

体は大きく吹き飛び、楽園の塔から飛び出してしまう。

「落ちてたまるかアアアアアア!!」

足の裏から炎を噴射し、ロケットのように上空に打ち上がったナツは何事もなかったかのように元の場所に戻った。

「さあ……続きをしようぜ……！」

「……これ以上壊されたら困る。

仕方がない。俺としてもこの技でトドメを刺すのはあまり好きではないが仕方はない」

「——真・天体魔法

暗黒<sup>アルテアリス</sup>の楽園」

ナツの周りの空間が突如として湾曲した。

光り輝く楽園の塔から、宇宙に変貌しナツを囲い込んだ。

「テメエ——！」

「さらばだ、ナツ・ドラグニル」

そして空間は完全に閉じ、ナツは一人空間に残された。

### 38 運命の反転

打ち出された剣は1000を超えた気がする。  
数えるのが億劫だったのであまり覚えてないがそれなりの剣は弾き飛ばした。

しかし幾らちよつと強めの俺でも限界はある。  
体は限界を超え、至る所から血を垂れ流していた。

「それ程までになって何故戦う？」

「お前それ聞きすぎだろ… 何回も言ってるじゃねえか… お前を止めるためだよ」

刀を支えにして起き上がる。

もう振るう力は残されていない。

だからもう次は――

「じゃあ聞くがな… お前は何のために戦ってるんだよ？」

「勿論世界平和のためだ。この塔が完成すれば俺の求めた平和が手に入る」

嘘だろ？と思ったが奴の目を見て分かった。

アレは本気の目だ。こんなどう見ても嘘っぽいザオリク搭載型の塔を本気で信じている。

しかし俺が何を言った所でこいつは信用しないだろうな。

「俺は幼い頃より正義の味方と言うものに憧れ、その為に生きてきた… だが実際はただの… 殺し屋だ…」

「当たり前だな。正義の味方になるってことは誰かを助け、誰かを助けないと言うことだからな… それに人一人で世界が平和になるなんてな、無理な話だ」

「ああ、だから私はこの塔の完成を願うのだ」

例えそれが嘘であっても何かにするしかない。そうでもしなければ心が壊れるのだろう。アニメでしか見たことはないが正義の味

方を目指した行く末を俺は見た。

「そんなの自分の都合を相手に無理やり押し付けてるだけじゃないのか？」

「そうだな……だがそれで平和が手に入るのだ。その何が悪い？」

こいつは壊れてる。

世界が平和になるのならきつとこれから先も闇に染まり続けると言える自信がある。

「だから分からない。何故お前が仲間のためとくだらないことで戦っている？」

そんなものより世界平和の方が重要だろう」

「確かに……仲間と世界だったら……世界の方がデカイな。そもそも俺は世界平和とかあんまり考えたことがねえ……でもさ——」

揺らぐ体を抑えつけ、意識を留める。

「——仲間一人守れねエやつが世界を平和になんて出来るかよ」

ただの漫画の名ゼリフをパクっただけだが、ヤツの顔はまるで見たくないものを見てしまったという顔になった。

「それに俺は優しいんでね……女の涙は見過ごすわけにはいかない。ああ、俺は世界を救えない。だがそれよりも大事なちっぽけな世界は命をかけて守ろう」

「世迷言を……！」

ヤツは干将・莫耶を投影し、顔を怒りに染まらせ俺の元に近づく。

俺は震える手で刀を持ち上げ、前に構える。

ヤツの剣が振られ防御するが紙切れの様に吹き飛ばされた。

「仲間一人守れないものが正義の味方になれないだど!!? 正義とは秩序を示すものだッ！個人の救いと全体の救いは別物だ！」

既に体は動かない。

ただひたすらに切られ続けられる。

今は言葉を返すことも出来ない。

「それが分からないから貴様はそんな事を言える…！」

ドシュツ、と長剣が俺の腹に突き刺さった。

時間稼ぎは十分な筈だ。

意識が遠くなる。死というものには慣れてはないが結構頑張った方じゃないのか？

「貴様を殺し、俺はようやく正義の味方になれる…！」

肌が寒くなるのを感じながら俺はゆっくりと前に倒れるのだった。

「アハハハハハ!!こりや腹が痛い!散々カツコつけたのに殺されかけたとか冗談でも笑えねえ!」

暗い部屋に一人、男が手を顔に当てて爆笑していた。子供のように足を地面に叩きつけ狂ったように笑う。

「正義の味方になるとかほざきやがって超笑えるな。今時の小学生でも言わねえよそんなゴミみたいな夢」

部屋と同じ黒のソファから立ち上がり、首の骨を軽く鳴らす。

コツコツと靴音を響かせ少し歩くとシンプルなドアが一つあった。

男は何の躊躇する事なくドアを開けると、その先には赤い血のような鎖に全身を締め付けられた男がいた。

「全く感謝してくれよな…もうちよつとで死ぬところだったんだぜ?」

鎖に締め付けられた男の顔を軽く叩くが何の反応もしないことがつまらなかつたのか酷く冷たい顔をしてその場に座った。

「あー…でも久々に出て行くのに目の前に偽善野郎がいるのか…。あんなエミヤに憧れて『僕正義の味方になる!』とか言っただけだよお…。あー、ダルい」

血の鎖が一本溶ける。

ドロドロになった液体は血そのものであり、鉄の匂いが周りに蔓延した。

「はあー・・・仕方ねえ。このままじゃ死んじゃまうから出て行くか。あいつの体奪えば何とかなるだろ」

男は鎖に締め付けられた男の心臓があると思われる場所に鎖の上から手刀で突き刺した。

漏れ出した血は黒。まるで体の元から別のものに構成されたかのようにだった。

「待っているよゴミ偽善者・・・その腐りきった心、俺がテメエの命ごとぶっ壊してやるよ」

「終わったか・・・」

男は崩れ落ちたジョニーを見て一言つぶやいた。

手に持っていた剣を消し、遠目から確認したが死は確定だろう。

男にとってジョニーは自身の邪魔をする障害そのものだった。

正義の味方になると決めた彼にとってジョニーの言葉はあまりにも男の心を抉った。

「俺は貴様の言うことなど聞くんもりもない」

忘れるように自分に言い聞かせる。

自身の心象風景を解除しようとしたその時だった。

——ザシュ

自身の内側から聞こえた嫌な音。

その音の発生音は自身の右腕。

何事かと見てみると、肘の少し下から丸ごと切断されていた。

「なっ、クツ・・・まさか・・・!!」

零れ落ちる血液を止めるために礼装である自身の服を破り傷口に巻きつける。

男が前を見るとジョニーが馬鹿みたいな血を垂らしながら立って

いた。

だが様子がおかしい。体から黒い瘴気が溢れ出し、目が獣のように爛々と光っていた。

「アハ、ハハハハハ!!」

ジョニイは笑う。

理由もなくただ笑う。

存在していると言うことだけに対して笑っている。

「良い体になったもんだ…随分動きやすいじゃねえか…」

「貴様…何者だ…?」

「何者だア?ただのジョニイ君に決まってんじゃねえか偽善者野郎」

切断された右手をジョニイは真下に落とした。するとどう言うことだろうか。

影の中に右手が吸い込まれていった。

更に続いて滝のように流れ出していた血が止まった。

「取り敢えずは止血完了…後はお前から奪うだけだな…」

男はジョニイから醸し出される気に恐怖を覚えた。

狂気に飲み込まれた獣だ。

「——ツツ！トレース・オン投影、開始！」

空中に投影されたのは対魔の剣100本。

目の前にるのはジョニイであってジョニイではない。

あの馬鹿みたいに正直ものではなかった。

ただ自分の名前すら忘れてしまったかのような一匹の獣だった。

「フリーズアウト停止解凍、ソートパレルフルオープン全投影連続層写…！」

剣が射られる。

360度から迫る剣群を見ても逃げることはしない。それどころか笑っていた。

(何故避けないのだ——!??)

ジョニイは手を前に伸ばす。

奪い取った右手から情報を取り出すが圧倒的に少ない。目の前に

広がる無限の剣に対しては明らかに小規模。

——ならば自ら広めてしまえばいい。

「――トレース・オン投影、開始」

ジョニイの周りに揺らぎが現れたかと思えば剣が次々と現れ始めた。

1…10…100、数はドンドン増えていく。

「――飛べ」

ジョニイが腕を振ると、剣が弾けるように飛び出した。ジョニイに接近する剣を全て叩き落とす。

「馬鹿な…何故貴様が使えるのだ!」

「んなのどうだっていいだろうが…生きるか死ぬかの場面でそんな事を聞くのか?」

ジョニイは落ちてた自身の刀を持ち直し方に担ぐ。

「さてと、久しぶりだからあんまりもたねえ。その前にお前を殺させてもらうぞ」

黒い、黒い瘴気がジョニイの体から漏れ出した。

来る、と思ったその時にはジョニイは目の前にいた。

「死ねえええええええ!!」

満面の笑みで刀が叩きつけられた。

何とか投影した剣を間に入れることが出来たが――

（――重い…!）

心象世界の地面が爆発した。

男はあまりの威力に吹き飛ばされる。

今の一撃で残った腕一本にヒビが入った。

「アハハハ！何だよ！もつときつきみたいに力出してみろよ！」

黒い瘴気が影のようにユラユラと消えては現れる。

「クツ… 投影か——」

「——遅エんだよ」

顔に掌が叩きつけられた。

そのまま足を払い中に浮かせ、地面に叩きつける。

「おいおい… まだ時間があるんだよ… もっと楽しませてみるよッ  
！」

ジョニー顔面を掴んだまま前方にぶん投げた。ジョニーはその後を追う更に走る。

だが男も負けてはいられない。空中で剣を投影し即座に射出する。

「邪魔なんだよ——!!」

ジョニーが力強く足を一步踏み出すと地面が陥没し、次いで爆風を  
引き起こした。

飛来した剣は全て何処かに吹き飛び何一つ掠めない。

「——だが動きが雑だ！」

目の前に現れた刀を逸らしカウンター。

これで決まった、そう確信した。

「鈍いねえ…」

グジュ、という音は掌から聞こえた。

掌からは剣が突き出しており痛々しいが、致命傷は間逃れていた。

「隙あり、だぜ？」

もう片方の手で男の耳を素早く押しつぶすように叩く。

鼓膜というのは案外脆い。

これがいわゆる鼓膜裂きと呼ばれる技だ。

「グツ…！」



男は言葉を最後まで言えず、ただ暗い狂気に飲み込まれた。

### 39 君に幸あれ

「出しやがれこのやろオオオオオオ!!」

宇宙に似た空間に一人いるナツは出口が見つからず叫び散らしていた。

しかし音も反響せず、何も聞こえない。

ただ身を凍らすような冷気が体を支配する。

火竜の力を持つナツであるが、魔力が底をつきかけているため無駄な消費は避けなければならない。

「寒いな…」

宇宙空間に一人残されてたナツは体を震わせ、腕を組む。

すると自分を覆う大きな影が突如として現れた。

反射的に後ろを見るとそこには巨大な竜がいた。

赤い鱗を上回る炎のような赤い目。

力強い四肢、鋭い爪。そして何より呼吸するたびに口から炎が漏れ出していた。

「イグニール…?」

その姿は竜。

さらにつけ付け加えるならナツの育て親であるイグニールにそっくり…いや、本人そのものだった。

「久しぶりだな、ナツ」

「な、何でここにいるんだよ!??ずっと探してたんだぞ!??」

10年前に消えた父を探すためにギルドに入り、力をつけたというのにこんな所であつさりと会つてしまい驚いてしまった。

イグニールは前足を持ち上げて顎を擦る。

「所でナツ、ここは寒くないか？」

「そりや寒いけどさ！イグニールに会えたならそれでいい！」

「そうか寒いかなら——」

「——暖かくしてやろう」

ボツ、とイグニールの体から小さな炎が湧き上がった。

炎は体のあちこちに転移し、溶けないはずの鱗が溶け、皮膚は焼き落ちる。

「な、何してんだよイグニール!?？」

「暖かいだろう？」

「馬鹿言うな！やつと会えたのに何してんだよ!?？」

炎を喰らつて消そうとしたが何故か食べることは出来ない。そうしてる間にイグニールはせいぜい竜と言うことが分かるぐらいまで焼けており、形をギリギリで保っている所だった。

「イグニール——!!」

どうしようもなくその場に項垂れていると、炎は燃え上がり、ただ其処に焼けた死体が落ちていた。

「何で… イグニール…」

目から涙がぼろぼろと零れ落ちる。

自身を育てた親が死ぬ所を見て悲しくならない人間がいるわけがない。

「――ナツ」

焼け焦げた死体を見ていると後ろから声がした。

ナツは後ろを見るとルーシイが立っておりナツに向かって手を振っていた。

「る、ルーシイ… イグニールが…！」

「もうこんな泣いてたらカピカピになるわよ？」

ルーシイの体がナツに覆い重なる。

父親が目の前で亡くなった衝撃で、ここにはいないはずのルーシイが何故ここに？という疑問は考えつかなかった。

「ほら、これでも飲んで」

「は？何言って――」

ポタリと顔に何か落ちた。

手でぬぐってみるとそれは赤い液体。

更に赤い液体が自身に降り注ぐ。

見たくない、ナツはそう思ったが見ずにはいられない。まるでそう仕向けられているかのように。

「こんなものだけど我慢してね？」

笑顔でそう言うルーシイの手首からは赤い鮮血が盛大に漏れ出していた。

「ああ… ああああ…」

違った痛みが心を抉る。

焼いて止血しようとしたが何故か出来ない。

結局どうすることもなくイグニールと同じように死んだ。

青くなった体。漏れ出す鮮血は本物。

「嫌だ… ここから出してくれ」

「出すって言われてもな――」

またしても声。

見てみるとグレイが立っていた。

しかし自身の胸に切り口を入れ、自身の手で臓器を漁っていたが――

「内臓か？それとも腎臓か？」

「ああ…… あああああああ……」

背後からもまた自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。

それどころかどんどん名前を呼ぶ声が増え終わらない恐怖が始まろうとしていた。

「どうなっているんだ…… りっ？」

体に鞭を打ち何とか起き上がるが、目の前には小規模な宇宙が円状に形成されていた。

見たことも聞いたこともない魔法だが体を突き刺す魔力からかなり上位の魔法である事は容易に推測される。

「ジェラールを……！」

一般的に永続的な魔法はその場から動けないが、今のエルザの場合まずジェラールに行くまでの道が体力がなくなっている今は難しいだろう。

「こうなれば私が直接中に入るしか……！」

ふらつく足で宇宙空間に近づこうとするエルザの肩を力強く握る締める手があった。

とつさに後ろを振り返ると、親友であるシモンが傷口を抑えエルザを止めていた。

「何をするんだシモン…早くしないとナツが…！」

「…あの魔法は アルテアリス 暗黒の楽園。一度入ったら死ぬまで…いや、壊れるまで出てこれない最悪な魔法だ」

—— アルテアリス 暗黒の楽園

それは天体魔法の中で唯一精神に干渉する魔法である。一度決まると相手の友人、愛人などの大切に思っている人たちの死を永遠に見せ続けるという魔法だ。

だからこの魔法は殺す事を目的とせず、心を壊す事を目的とした魔法なのだ。

更に付け加えるなら アルテアリス 暗黒の楽園の中の空間は外の時間に比べて早い。

こちらの1分が アルテアリス 暗黒の楽園の中では5分。

——どんな豪傑な人間でも嫌なものを無限に見せられたらいつかは壊れるだろう。

「ではナツは…！」

「ああ、今もあの中で苦しんでるだろうな」

えらく簡単に言うシモン。

既にナツが閉じ込められてから3分。

人の死に触れたことがないナツが何処まで耐えられるか——

「待つんだエルザ。行ったらエルザまで——」

「仲間を見殺しにするぐらいなら死んだ方がマシだ！」

既に体はボロボロなのに、何故これだけ見せられるのだろうか。

シモンは軽く驚いてから、小さく笑った。

「な、何がおかしい…？」

「いや、エルザは心も体も強くなっただんなって。俺とは大違いだ」

シモンは一歩進む。

目の前に広がる虚無を前にしてもその背中には恐怖はない。

「し、シモン…？」

「大丈夫だ。あいつは連れてくる。なーに、心配するな。俺だって少

しは魔法が使えるからな」

まるでその言い方は死を覚悟したかのような――

「ダメだ！行くなシモン！」

手を前に伸ばそうとしたが、体全体が凍りついたかのように自身の動きが止まった。

体を見ると巻き付くように蛇の呪印が描かれていた。

「すまない……こうでもしないとエルザだったら来るからな」

「やめろ……やめてくれ……」

「そう泣かないでくれ。今のエルザには大切な仲間がいるだろう？」

それに俺はエルザを裏切る真似をしたから……これぐらいちっぽけなものだ」

また一歩進む。片足が宇宙空間に入った。

手を伸ばそうとしても、足を動かそうとしても全く動かす、唯一動く目からは涙がこぼれ落ちていた。

「妹は……妹はどうするんだ!?」

ずっと会いたいと言っていたらどう!?」

この言葉が通じなければきつと言ってしまうのだろう。

他人を天秤にかけるのはズルいと気づいていたが必死だった。

「そうだな……いつまでの家に帰らないダメ兄貴だから怒るだろうな。」

だから頼みたいんだ。――妹を、カグラに会ったなら……支えてやってくれ」

最後に振り向いたその顔は、いつまでも輝く――例え奴隷でも光り輝いていた笑顔。

そう言い残し、シモンの体は全て宇宙空間に消えて行った。

宇宙空間で一人恐怖を見せ続けられたナツは思考を停止していた。感覚機能は薄れ、感情を浮かべない。

しかしそれでも目の前の死体たちは消えない。それどころか更に増えて行く。

「――、――！」

自身を呼びかける声があった。

だが感情を表現する機能は既に失われてる。すると突然、自分の顔を力強く殴られた。

「イテエー！何すんだテメエー！」

「よし！起きたか」

よくよく顔を見るとエルザの親友であるシモンが目の前にいた。

「あれ？何でこんな所にいるんだ…ウツ――」

さつきまでの現象を思い出し、胃の中のものを全て吐き出した。

燃える死体も、冷たくなつた死体も全て本物だった。

「安心しろ。アレは全部幻だ。お前は魔法にかかっている状態なんだ」

「そう言うことか…じゃあとつとここから脱出するかって…」

「出口ねえじやねえかああああああ!!」

この魔法は術者がやめない限り永遠。

だが空間内に二人いる場合は魔法は発動されない。

「心配するな、出口は作ってやる」

「本当か!? 一体どうやって」

「俺はこんななりをしているが解析魔法が得意でな…それにジエラールにこの魔法も聞いた」

そう言うなりシモンは複雑な言葉を呟き始めた。

「だが出口を作るのはほんの一瞬でな…今の魔力ではそう持たん」  
「安心してくれ。俺は速エからな…ってそれだったらお前はどうか」

やって出るんだよ?」

ニツ、と笑うシモンの姿にナツは嫌な気がした。

「――俺はここに残る!後は任せたぞ!」

シモンの蹴りが背中に当たり、前のめりに倒れる。

丁度よくナツの体が完成された出口に入り、宇宙空間からの脱出に成功した。

そしてその出口に駆けつけたエルザが穴の向こうのシモンに手を伸ばす。

「早く来いシモン!」

だが魔力切れで動けないシモンは既に己の死を悟った。

ならば最後は悲しい顔なんてするべきじゃない。思いも伝えるのもこれが最後。

――・・・俺はエルザの事を

いや、そんな事はガラではない。

「いやだ・・・帰ってきてくれ」

自分の名前を呼ぶ大好きな声が聞こえた、

だから最後に、笑顔を浮かべた。

「――幸せになれ、エルザ」

その言葉を最後に出口は閉じ、完全に一人きりになったシモンはその場のため息を吐いた。

「これで…よかったんだ」

好きな人に最後まで尽くす。

男冥利に尽きるものだ。

後ろから足音が聞こえた。一人となったため魔法が再始動されたのだ。

「——おいちゃん」

その声を聞きたくて10年もたった。

だからその声が、形が虚構で作られた幻だったとしても笑顔でいなければならぬ。

「——なんだいカグラ？」

暗黒の楽園アルテアリスが解かれ、闇のとぼりが周り一体に弾け飛んだ。

その真ん中では白髪になり、魂が擦り切れた男の死体が転がっていた。

「チツ、ナツを狙ったが…余計なものが邪魔しやがって…」

エルザは枯れ果てた死体に顔を当て、体を震わせていた。

——もう彼は動かない。

言葉も発しない。

「お前が…エルザを泣かせた…！」

——炎が湧き上がる。

「お前がシモンを殺した…！」

だがその色は怒りではない。

何故なら…

「だけど後は任せたって言われたんだ——だから見てくれ… 約束だ！」

「来るかナツ・ドラグニル！殺してやるからかかってこい」

## 40 心の檻

——いいかナツ、お前の動きは雑だ。だから当たらない

少し前の事。サクラとジョニイの練習に乱入したナツは些細なきっかけで魔法なしの組み手をジョニイとしたのだが手も足も出なかった。まるで空に浮かぶホコリのように拳を振るってもするりと逃げる。

——俺の何十倍の魔力を持ってたとしてもそれじゃ使いこなせない。

——もつと体を、全てを使いこなせ

「——火竜の鉄拳！」

戦場をかける流れ星に拳がめり込む。

「カハッ——！」

「火竜の——」

体が浮き上がった瞬間を見逃さない。

一步踏み込み、少し飛び上がり足を叩きつける。

とんでもない速さで飛んだジェラルは水晶の壁に叩きつけられた。

「馬鹿な… 何故反応出来る!?？」

「言つたら… 任されたからには負けるわけにはいかねえんだよ…」

！」

足の裏から炎を噴射し、ロケットじみた速さで突撃。

「クッ——抉れ！」

ジェラールが指を上にとげると地面の水晶が歪み、先端が鋭く尖った水晶が飛びとってきた。

しかしそんなものを気にすることなく突撃し水晶を砕く。

「邪魔だあああああ!!」

ナツの周りに灯る炎は地面の水晶すら溶かす。

触れたもの全てを溶解する炎は止まる事を知らず。

ついにジェラールの元にたどり着いた。

「——七つの星に裁かれよ」

七つの魔法陣がジェラールの背後に現れた。

キン、と白く光り輝く。

「——七星剣！」

グランシヤリオ

光の剣が発射され、ナツの目の前が真っ白になる。

回避は既に不可能。

ならば打ち返すのみ。

「——紅蓮火竜拳！」

両手に炎を灯し、前に打ち出す。

光の剣は徐々にだが勢いを無くし、元の極光よりもかなり薄れたものとなった。

「だが後ろが空いているぞー！」

ガッ、と光の剣で背中を切りつけられた。

既に体はボロボロだが、意識を保ち裏拳をたたき込もうとしたが受け流されカウンターの蹴りを食らった。

「貴様如きに負けるわけにはいかない…！」

水晶に埋まったナツの体に更に追い討ちをかける。

身体向上魔法によって更に一撃が重たく、鋭くなるがナツだって負けはしない。

「——ラァー！」

マウントを取っていたジェラルルの服を掴み自分に近づけると同時に、自分の頭も近づけ思い付きり頭突きをかました。

痛みで力が抜けたジェラルルの一瞬の隙を尽き足を首に巻きつけ、掌を器用に使い体を浮かし回転し空中に放り投げた。

「——火竜の咆哮——」

猛炎が口から解き放たれた。

ジェラルルは空中でバランスを取り直し再び流星を使う事で逃げたが、それを追いかけるようにナツのブレスは続く。

「これ以上はもう…！」

水晶の塔が大きく揺れを起こした。

ナツが破壊しすぎたせいで魔力の塊である魔力石が欠損し、Rシステムを保てなくなったのだ。

Rシステムの崩壊は集めた27億イデアの暴走である。

「次は10年…いや、5年で完成させる。

だが貴様らは邪魔だ…ここで消えろ！」

煉獄の魔法陣が現れる。

その魔法陣は幽鬼の支配者の移動要塞で使っていた魔法である煉獄衝碎。

一度使うと街一つが消えてしまう禁忌魔法の一つ。

エルザに斬られた場所が痛んだが、無理やり押さえ込み最後の詠唱を唱えた。

「塵一つ残さず消えろ!!」

赤い地獄のような炎の光線が解き放たれた。

ここで逃げれば楽園の塔どころか、エルザも、外にいる皆の無事も怪しい。

全ての炎を右手に集中させ飛び上がる。

「ハアアアアアアアア!!」

炎と煉獄の光線が衝突し、爆風を生み出した。

水晶の塔にはもはや数えきれないほどのヒビが入り、今にも倒れそうだった。

「クツ…！」

「消えろ！ナツ・ドラグニル！」

光線がナツの体を押す。

手は焼け、焦げ始めているが逃げはしない。

何故なら託されたから。

託されたからには簡単には死ねない。

約束を果たしてこそ男の誓い——

「負けてたまるかああああああ!!」

押されていた炎は、勢いを取り戻す。

光線を退け、煉獄よりも尚赤く染まる炎はついにジエラールまで近づいた。

「馬鹿な… 何処からそんな力が…！」

「シモンに言われたんだ！だから負けられない！」

光線はついに掻き消され、ジエラールは空中で大きくノックバックし、ジエラールの少し上でナツは体全体に炎を纏う。

最後の言葉のその後、聞こえるか聞こえないぐらいで言った言葉をナツはちゃんと聞いていた。

——エルザを、ジエラールを任せた

「貴様アアアアア!!」

「自分を解放しろジェラール!」

滅竜奥義——紅蓮鳳凰剣

空に鳳凰の如き大きな火がジェラールを襲い、地上に叩きつけた。

コツン、コツンと音が反響する。

そこは男の精神世界。

男は手に持った何かを雑に部屋にある机に向かって投げ、ソファの上に座った。

「あー、暴れたりねえなあ…。」

男の精神世界は酷く真つ暗で、唯一置かれたライトだけが部屋を灯していた。

男が机に向かって投げたものを手に取るとボール遊びするように上に投げ掴むのを繰り返した。

「ま、一個奪えたからまあいいか」

ボールみたいに投げていたのは手だった。

手から血が流れているがそんなことも気にせず投げる。

男の背後にはドアが一つある。

男は面倒くさそうに魔法を唱えドアを開けた。

その先には真つ赤な地面に無限の剣が刺さった広野だった。

まるで怒りを表した赤は、触れたものを侵す力でも持っているのか  
本来美しい筈の剣が真っ赤に染まっていた。

「と言っても既に剣は持つてるからあんまりいらねえけどな…」

投げていた手を遠くに捨てる。

男はソファに横に座り、目を瞑った。

「さて、次が来るまで眠っておくとするか」

縛られていた鎖は溶け落ちる。

## 4 1 前日談

なんか知らんうちに楽園の塔編終わってんだけど…アーチャーもどきに腹刺された所まで覚えてるけどその先が全然思い出せない…これって俺の気づかない内に某カードゲームみたいにもう一人の僕！でも現れたのか…。

「いやいや…それは痛いな…人間大の絆創膏用意しなくちやならないな」

厨二病は卒業したから。

この世界では技名叫びまくってるけど…裏蓮華！とか螺旋丸！だとか。やつぱり男だから憧れるよね。

「さて…次はバトルオブフェアリーテイル編だな…」

机の中から秘密のメモ帳を取り出す。

と言つてもこれからの事を簡単に綴ったものではあるが…

バトルオブフェアリーテイル編。

それはラクサスの思春期によって引き起こされる話である。

簡単に言えば天下一武道会（フェアリーテイルのみ）みたいなものだ。

ただし最初にヒロイン達が石漬けになり、ラクサスが激おこして町中に雷落とす石みたいなのを設置するという…

ぶっちゃけた事を言うと今回俺の出る幕はマジでない。

だって身内戦だし…俺ラクサスとあんまり関係ないし…。

今回の話で俺にいい事って少ないんだよね。

例えば祭りがあるから食べ物値段が安いとかね。

「しかし流石にこれ以上オリジナル成分出たら困るぞ…」

絶対に一人は出てくるオリキャラ…。

俺も含めてララバイ編で出て来た銃使い、幽鬼の支配者編ではゲーティア、そして楽園の塔編ではエミヤもどき…もうわっかんねえな。

流星にバトルオブフェアリーテイル編では出てこないだろうが…というか今回俺はどっかでサボるつもりだから関係ない。

「となると…そうだな。見つからないような場所を探さなきゃな」

何故これだけ俺のギルドは面倒事を起こすのが天才なんだ？と呆れていると玄関のドアを叩く音がした。

N○Kの集金か!??と思ったがよくよく考えればテレビもないし、この世界に○HKもない。

となると俺の部屋を訪れるのは大体絞られる。

「アルさん！ミスコンです!??何着れば勝てると思いますか!??」

開口した途端にこれかよ…

両手に多種多様なコスプレを持っていた。

メイド服、チャイナ服、ドレス、ビキニetc…

「必勝法ね。それなら簡単。全ra——」

ドゴツ！と俺の腹に拳が入った。

しかし遅い！最近ガジルの技を見たおかげで俺にも鉄竜の力が使えるのだ！これによって俺の腹は鉄となりダメージを負うのはサクラ！

「残念だったなサクラ！我にその程度の攻撃効かおrrrrrrr…」

口から昼に食べたチャーハンが逆流し、地面にぶちまけられた【スタッフがこの後美味しくいただきました(!??)】。

「残念でしたね…私がついたのは点穴。硬い柔らかいは関係ありません」

「それ何て白がおrrrrr…」

サクラ、日○一族説が立ってしまった。

回天とか出来そう…命中率120%ぜよでもない限り勝てないぜ。(何を言ってるかわっかんないよ！)という方はナルト サス

ケ奪還編を見よう！)

「アルさんに聞いた私が馬鹿でした。いいです。エルザさんとルーシィに聞いて来ます」

最初からそうしろよ…と云う前に俺は倒れた。無念。

ドンドン、と部屋のドアが叩かれた。

まさかN○Kじゃ飽き足らずフジ○レビまで…！つて朝も同じことやったな。

次は誰だとドアを開けると見事俺のチャーハンを吐かせた当本人であるサクラがいた。

「お前…」

「…」

「次は俺に牛丼を吐かせるつもりか？」

「違います！」

顔を少し赤らめたままサクラは俺の部屋に乱入してきた。

面倒な事になりそうだなと思いつながら渋々後について行きいつもの定位置である椅子に座った。

「昼はごめんなさい…流石にやり過ぎました」

「仕方ねえから許してやるよ」

まあ全裸つて言った俺が悪いんだけどな！（愉悦）

なんか俺のほうが優位に立ってそうなので取り敢えず偉そうにしているが正直恥ずかしい。

「あ、そうそう！お前に似合いそうな服あったから見てくれるか？」「ええ？？わざわざ買ったんですか？？」

無理矢理話を断ち切り、その場から立ち上がる。

クローゼットに眠っていたそれを取り出し俺はサクラの目の前に  
おいた。

「こ、これは…！」

「ああ、これは——」

——F○○ 沖田○司コスプレセット！

「・・・はい？」

「いいか、お前絶対これ似合うから騙されたと思って着てみ？」

何故か待っていたようにクローゼットにかかっていたコスプレセット。

もちろん俺は買ってない。サクラは俺が買ったと勘違いしているが俺は買ってない。

俺の答えは変わらない。——全裸一択である。

「どうですか？」

俺のアヴァロンを妄想していたら別室で着替えていたサクラが戻ってきていたようだ。

目の前にいるのはF○○の桜セイバーそのものであった。

思わず神イ！と叫びたくなる。

「これであればみなさん喜んでくれるでしょうか？」

「ああ！（俺がな！）」

なんか色んな勘違いを起こしたまま当日がやってくるのだった。

42 寝る子は育つと言うが起こされては意味がない

た。エバーグリーンが石化を発動し、サクラ含めた女性陣が石になっ

ちなみにサクラは沖田コスプレで出演し、落ちてくる木の葉100枚切りをしていた。

凄かった（小並感）。

「しかし暇だねー・・・」

以前見つけておいた空き地に寝転がっているがする事がない。

バトルオブフェアリーテイルが始まってまだ30分も立っていないが、既に暇である。

今頃エバーグリーンは何処だ！とか名前わかんないけど緑色の触覚生えてる人と人形づかいみたいな人を探せ！ってなっているのだろう。

しかし何度でも言うが俺はやる気がない。

そのため前もって探した場所に、対魔法バリアを発生し寝転がっているのだ。

遠くからドガンとかバギーンって聞こえるけど気にしない気にならない。

「ま、する事もないから寝るか・・・」

遠くで聞こえる戦闘音をBGM代わりにして、俺は目をつぶった。

——少し離れたところで俺を見ている視線に気づく事なく。

「ああああ何で出れねえんだよおおお…！」

ジョニーがぐうすか眠っている頃ナツは障壁に阻まれ外に出れなかった。

ラクサスによって始まったバトルオブフェアリーテイル。そして石潰けにされたルーシイ達。

だと言うのにナツは一步も外に出れない。

「しかし80歳以上限定なのにナツが出れんのじゃ？」

「俺が聞きてえよー！」

フリード(ジョニーが言った緑色の触覚が生えてる人)の術式魔法により80歳以上は出れないという魔法に何故かナツは出ることが出来ない。

こうしている時でさえ脱落者はドンドン増えて行く。

最初は100近くいた人数も今では30を切ったところだ。

「そういえばジョニーの字を見ておらんが何をしておるのか…！」

ギルドを誇る面倒くさがり屋のジョニー。

普段はすぐに消え、変態ではあるが実力はあるが実力体術戦ならばギルド最強に近い。

「エバーグリーンを狙いに言ったんじゃねえか？魔法かけた張本人だし」

「そうじゃな…。サクラも石潰けになっておるしな」

ギルド内で出来てエる(巻き舌)と噂されてる二人であるが、少し離れたところでジョニーが爆睡しているなんて誰も知らなかった。

『ハッ！ジジイ随分困ってるじゃねえか！』

ブン！と電子音とともに現れたのはこの事件を起こした張本人であるラクサス。

「ラクサス！いい加減やめんか！こんな事をしても無駄じゃ！」

『分かってないなジジイ。無駄かどうか判断するのは俺だ。ジジイは大人しくそこで観てるんだな』

嘲笑うようにラクサスは頬を吊り上げた。

『さっさと俺にギルドを明け渡す準備でもしておくんだな』

『まだじゃ・・・まだジョニーが倒れておらん！』

『ジョニー？あああいつか・・・』

ラクサスが指を鳴らすとマカロフの前に小さな画面が現れた。

『俺もこいつがいなくてどこに行ったものか探してたんだが見つけた時は思わず笑っちゃったぜ』

ナツが覗き込むとそこには衝撃の光景が映し出されていた。

画面一体に広がる緑。その中心に人影が写り込んでいた。

服装は黒いジャージの中に「働いたら負け」と異国語で書かれたTシャツを着た男が横たわっていた。

「なっ、ジョニー！」

横たわった彼こそが「無の極み」と呼ばれた男、ジョニー・アルバート。

その彼が体を動かさず横たわっていたのだ。

「馬鹿な！ジョニーはまだ負けておらんかったはず！」

『ああ、負けてねえよこいつは。というかこいつはそもそも戦ってもいない』

「結局何が言いてエんだラクサス！」

『まだ気づかぬーのか？』

『うう・・・メル○リリス当たって・・・爆死勘弁・・・ZZZ』

『寝てるんだよこいつは』

「・・・はっ。」

ギルド内に静寂が訪れた。

「はあああああああああああああ!!?!」

と思えばすぐに五月蠅くなった。

「何してるんだよジョニー！お前サクラはどうすんだよ!？」

「立てええええええ！立つんだジョオオオオオオオ！」

画面に叫ぶが残念ながら画面なのだ。

声が届くわけもないのでジョニーはスヤスヤと眠っている。

『こいつは事が起きるのが知ってたみたいだに人気のない場所で、対魔法障壁を作りやがっていやがる…。何で寝てるかは知らないがな』

マカロフはララバイ事件の際に定例会場が壊れそうになった時の絶望感を覚えた。

生えていた髪の毛の右側は空気に流さる。

『だが安心しろ、今からこいつも敗北者になるんだからな』

『ジョニーは簡単には負けねえよ!…。寝てるとか怪しいけど』

『起きてても無理だな。なんせアイツを行かせたからな』

「アイツ…。アイツとはまさか…。！」

ナツは起き上がったマカロフの髪の毛が半分消えていたことに笑いそうになったがシリアスな空気と察したため何とか笑いを封じ込めた。

ふわり、と鼻に甘い香りが吸い込まれた。

それに気づいて目を開けると寝てたせいで体の疲労感が凄い。

首を鳴らして起き上がると、俺の横に白髪の美女がアイスクリームを舐めていた。

言っておくが俺は人攫いをしてなどない。

身長は俺より小さい…。150センチぐらい？

なんか見たことあるな…。あれだ。小○さんちのメイドラゴンの

カンナちゃんを成長させた感じ。つまり美人である。

「・・・起きた」

クリンとした目がこちらを見つめてた。

——可愛い！

俺の鼻から薔薇のように美しい赤（鼻血）が噴き出した。

「・・・えーつと・・・誰？」

「食べ終わってから言う・・・」

俺くアイスクリームという悲しい式。

というか本当誰？目覚めたら真横に美人がいるとか何処のラノベだよ。今作はソードでアートなオンラインでもアクセルなワールドでもないんだよ。

「食べた・・・」

「口の周りにチョコ付いてるぞ」

俺がそう言うとかンナちゃん（仮名）は手で口の周りを拭いた。

可愛い。

「それで、君は誰？」

「・・・カンナ、カンナ・ミラルーツ」

「ふーんカンナちゃんねえ・・・まさか仮名が当たるなんてな・・・ん？

ミラルーツ？」

なんか聞き覚えがあるけど何だったか・・・確かすごく嫌な思い出があるんだけど・・・

「・・・ラクサスからのお願いでここに来た」

「ちよつと待って、ラクサス？ねえラクサスって言ったの？」

「・・・悪いけどあなたを倒す」

何デエ・・・!?

というかミラルーツってあれだよね！モンハンの最強龍じゃねえか！

静まり返ったギルドの中、ラクサスは王手をかけるように言う。

『そうさ、妖精の尻尾四人目のS級魔道士』

『——祖龍の担い手、カンナ・ミラルート』

## 43 竜の支配者

「爆槌竜——ウラガンキン」

少女、カンナという女の子は右手の手首から指先が黒と金が混ざり合った色に変色した。

俺はその場から距離を取り写輪眼を発動させ、変色した腕を観察する。

「あれは…」

右手の手首から指先にかけてまでの魔力がおかしい。柔らかそうな手は硬質に、太く。

まるで砕くことに特化した手と化す。

「——爆槌竜の大地崩岩」

カンナという女のk… いちいちというのが面倒なので以後カンナ。そのカンナが硬質化し握った拳を地面に叩きつけると赤い、炎のよくな魔力が地面にほとぼしる。

そして次の瞬間地面が爆発した。

「うおお…！」

地面が捲り上がったと言うべきか、重力が逆になったと言うべきか。

まあ写輪眼があるのである程度のごとは避けられる。

捲り上がり、空中に浮遊する岩石の上に乗るバランスを取っていると、目先にある浮遊している岩石が何かに蹴られたみたいに地面に落ちていった。

「速っ——」

「——迅速竜の黒撃」

目の前にはカンナが。

右手は美しく黒に染まり、対照的に鋭利な爪が俺を穿とうとしていた。

というか何でウラガンキンの能力使えて、今もナルガクルガみたいになってんのさ。

「くっ…！」

体を半回転し、爪を回避すると同時に左腕を使いカンナの首にラリアットするように当て、足で大きくカンナの足を払う。

雑な大外刈りだがやらないよりはマシだろう。

「うっ…！」

背中から叩き落とすことに成功し、そのまま俺は前に飛び上がる。今のは偶然成功しただけでもう通用しないことは分かっている。

「技借りるぜグレイ…！」

右手を開き、左手を丸めて右手に乗せる。

「アイスメイク——騎兵槍——」

俺の手から無数の氷の槍が現れ出る。

360度全方向からの攻撃。

普通だったら食らうはずだが…！

「轟竜——ティガレックス」

ヤバイ。咄嗟的に耳を防いだのは幸運だったのか。

「――轟竜の咆哮！」

空気が震えた。

骨まで軋むその声は耳を抑えていなければ鼓膜が裂けていただろう。作られた氷は音に耐えきれず、粉々に砕けた。

音が消えるのを確認し、地面に降りる。

「おいおい……ミラルーツって名前についてるかと思っただらミラルーツ以外も使えんのかよ……」

「……知ってるの？」

「知ってるも何もそいつには苦戦したからな」

ただしゲームの中の話である。

「祖竜ミラルーツ……それはつまり全ての龍の起源。つまり元を辿れば全てミラルーツになる……だから」

「だから全部のモンハン関係の龍の力使えるってか……何だよそのチート。俺のと交換しやがれ」

一様前世ではモン○ン××までやったからそれなりの知識はあるつもりだ。

とは言えども写輪眼で見て分かるが俺の軽く20倍以上の魔力、加えてモンハン関係の龍使いたい放題……というか滅竜魔法？

「なあ一つ聞きたいんだが……あんたのその力って魔水晶とか埋め込んでないよな？」

「?……私の力は生まれた時から」

「そう……」

俺の予想ではあるがカンナは転生者……。

これは思ったよりも面倒な事になりそう……唯一の幸運は同じギルドであるということぐらいか。

「いや……待てよ……」

写輪眼で全部の技コピーしていったら俺の強化に繋がるんじゃないかね？

モンハンに登場した龍はおそらく30を優に超える……ならば出来るだけそれを出させてコピーしていったなら後々起こる厄介な出

来事も多少は楽になる…はず。

「…祈りは終わった？」

「残念ながら死ぬ気は無いんで…殺す気なの？」

換装を使い空間から神様から貰った刀を取り出す。

クルリと一回転させ手に収め、前に構える。

俺のやる事は一つ、カンナの力を出させ、それらを全て吸収すること。

「——行くぞ」

——八門遁甲第一門、開

脳のリミッターが外れる。

一步踏み出し飛び出した後に、地面が蹴られたことに気づき扱れた。

絶対に死なないなコイツという確信があつたから殺す気にかかる。

「——セイツ！」

踏み込みと同時に袈裟斬り。

黒い斬撃がカンナに迫るが1ミリたりとも動きやしない。

「鎧龍——グラビモス」

刀が接触した途端大きく弾かれる。

カンナの皮膚を見てみると白い肌の一部が灰色に染まり、岩のようにゴツゴツとした表面となっていた。

鎧龍——グラビモス。俺はモンハンを最初からしてたわけでは無いが、カニのように硬い外骨格に守られ容易に剣が通らない硬さを誇る。

「けど…！」

剣だけが俺の武器ではない。

手に持った刀を手放し、一步距離を縮める。

拳に水平に構え魔力を灯し、捻りながら打つ。  
ただの正拳突きだが甘くみるな。喰らえば心臓が爆発する可能性がある一撃だ。

「角竜——ディアボロス」

拳が届く数瞬、カンナは左腕の指を突き手の形にした。するとパキリパキリという音とともに岩の鎧でも、黒く染まった爪でもない。純粋な力だけによつて磨かれた自身の誇る最大の攻撃を表した一撃。

「——角竜の鋭突！」

拳と拳……いや、拳と角がぶつかり合う。

暴風が吹き荒れ地面は更に抉れる。

砂煙が晴れた先には二本の角と化した腕。

「あつぶねえ……拳でディアボロスの角なんて受けたら死ぬところだったわ」

表情をあまり出さないカンナが少し驚いていた。

それもそうだろう。自分一人だけが持っているはずなのに今知り合ったばかりの人間が使えるのだ。

「私さつき魔法教えた……だから貴方も何でこの滅竜魔法が使えるか言うべき」

「俺の目は特別製でな……この目で見た魔法は大抵真似できる……とは言っても滅竜魔法はかなり魔力使うけどな」

加えるなら滅竜魔法の使いすぎで自身が竜となる可能性もあるが……。

今はまだ言うべきではない。

「今見せた技だけで俺に勝てると思うなよ……少なくとも10種類は出させてやるぞ」

「私が本気を出せば……一瞬」

カンナの体にパチリと雷が宿る。  
俺はすぐさま距離を取り、手放していた刀を回収したが目の前にカンナの姿はいなかった。

——パチリ

背後から電が轟く音がした。

「雷狼竜——ジンオウガ」

赤く輝く目が技の軌道を予測する。

後はその軌道を逸らすためだけの手を置くだけだったがいつの間にか俺は蹴られていた。

激しく地面に打ち付けられ、骨が軋む。

「——雷狼竜の鉤爪」

宙を見るとカンナが手を掲げ、更にカンナの周囲には4本の雷が獣の爪のように舞っていた。

カンナの腕が振り落とされるとそれと連鎖し、雷の爪が落ちる。

「これはっ…っ！」

人差し指と中指を曲げ簡易魔法術を発動する。ギルドに入つて以来久しぶりではあるが指は覚えており俺の魔力を糧として土の魔法を引き起こす。

「重なれ！」

地面から土の壁が生え、俺を守るように重なる。

雷の爪は土の壁を抉る。性質上雷は土に相性が悪い。そのため俺

にはダメージが届かなかった。

「…これ以上見せたら危ない」

「危ないって…俺の方が危ないんですけど」

正直写輪眼がなかったら軽く10回ぐらい死んでる気がする。

「ちよつと強引だけど…仕方がない」

カンナの纏う魔力が黒く染まる。

体からは黒い瘴気がウイルスみたいに蔓延した。

「——ゴアラテンベスト黒い禍」

黒い瘴気を吸ってしまった途端、心臓が大きく飛び跳ねた。

「黒蝕竜ゴアマガラ鱗粉を吸った人はよつぽど強靱じゃなかったら  
気絶する…殺しはしないから安心して」

「そりゃ安心した…苦しいことには変わりはないけどな…！」

話している間に意識が消えそうになる。

10種類は出させてやるぞ、とカツコつけたのにこのザマだ。  
流星はS級魔道士だなど思い、俺は意識が途絶え——

——バキン

鎖が壊れた。

「おっと、早速出張かい？」

黒い部屋で男は一人笑っていた。

## 44 それは竜と竜の戦い

深い、深い、闇の中に落ちる。

果てしなく続く闇に向かい、意識が消えそうになる。

ただいつの間にか自分の腕には鎖が巻かれており落下は停止していた。

「成る程な…：ゴアマガラの鱗粉には獰猛化するって特性があったな…：それで俺が出て来ると…：面白い効果じゃねえか」

鎖が体に幾重にも巻きつく。

その度に意識が消えそうになり、視界と聴覚は遠ざかっていった。

「前のやつでは暴れ足りなかったからな…：今度こそ満足させてもらうぞ」

最後に残った視覚で目の前の男を見ると、その口元は大きく笑っていた。

カンナは目の前にいるジョニイの魔力が変わったことを肌で感じた。

黒く染まった魔力は体から漏れ出し暴れる。

空間が悲鳴をあげてるような風の音に耳を塞ぐ。

「ハハツ… いいねえ…」

「貴方は… 誰？」

カンナを見る目は赤黒い目に染まり、憎悪や怒りが込められた目。まるで嘲笑するように軽く笑うと大げさに手を開けた。

「誰だっがいいだろ？ 今から殺す奴の名前なんて聞いて何になる？」

赤黒く輝く目から見えたのは明らかかな負の感情。S級の魔道士であり、ラクサスの側にずっといたカンナはすぐにその危険性を感じ取った。

「… 貴方、危険… 倒す…！」

「倒すねえ… ヌルいこと言ってんじゃねえよ」

カンナの腕が黒く染まり、鋭利な爪が生えた。

迅竜ナルガクルガ。

圧倒的な速さを持ち、その速さは「影でさえも追いつくことが出来ない」と言われるほど。

地を蹴るとカンナの姿は消える。

ほんの一瞬でジョニイの背後に回り込むと鋭利な爪を向けた。

「——迅竜の鋭爪！」

黒い残像を残し、鋭い爪がジョニイの身に迫る。

しかし当たる直前に風に吹かれた紙のように体が左に動いた。

「わざわざ後ろから来るなんて死にたいのか？」

明らかに馬鹿にしたような発言をし、迅竜の手と化した腕を取り、そのまま後ろ蹴りを腹に叩き込む。

「うっ…！」

「ほらほらアー…もつと力出せよー」

腕を取った状態で回転し、大きく空に向かって投げた。

10メートル程カンナは飛び上がった。

「——モード 雷狼竜」

地上からジョニイの姿が消え、空中に青い雷が走った。

雷を体に纏うことで身体能力が向上することによって、目では追いつかずただ残像の雷しか捉える事は出来ない。

圧倒的な速さで獲物を狙う姿はまさしく狼。

「雷狼竜ジンオウガ…！」

カンナも自らの身に緑の雷を灯し宙を舞う。

もはやこれは人同士の戦いでなくなりかけている。

宙を踊るその姿はまさしく竜だった。

「らっしやいらっしやい！いいリンゴが置いてあるよ！今ならサービ  
スで1個おまけ付き！」

「あら？なら2つ——」

商店街が並ぶ街並みに突如、青も緑の雷が通り過ぎた。

「きやあああー！」

「うおおお?!?!」

あまりの速さで風が吹き荒れ積み上げられた果実が吹き飛び空高く舞い上がった。

過ぎた方向を急いで見るがもうそこには何も残っていないかった。

「一体何が起きたんだ…?」

店を営む男は落ちたリンゴを拾い上げた。

そのリンゴには焼き焦げた跡、そしてナイフのような鋭いモノで切られた跡が刻まれていた。

「——緑炎竜の毒爪！」

カンナの手が変化し、緑の甲殻に包まれた。

爪の先にはいかにも毒というような紫色の液体が付着しており、容赦なくそれをジョニイに向けて振るった。

「オイオイオイオイ！まさかそんな弱つちいパンチで俺を仕留めれるとでも思ったか?!?!」

赤の目が一層輝く。

迫り来る爪を紙一重で躲し、右手で手首を掴み取る。そしてもう片方の腕を使い掴んだ手首を押しすように捻り上げた。

「毒如きで俺を倒せると思ったか？殺さないようにと思って毒を選択したか？それとも俺を弱者と判断したか？——残念だな。俺は表ほど甘くは——」

手首を更に押す。

人体の構造上手首の関節を極めると肘と肩の関節も順に極まってい

いく。  
カンナの体制が崩れた。

「——ねえんだよオ!!」

関節を極めた状態で顔に蹴りを叩き込んだ。

面白いぐらいの勢いでカンナが前方に飛んで行きすぐに点ぐらいの大きさになった。

「女の顔には傷をつけるなっというが…そんなもん俺の辞書には書いてないんでな…これこそ男女平等…」

一人笑いながらカンナが飛んで行った方向にゆっくりと歩いて行く。

黒い瘴気と合わさってその様子はまるで死神のようだった。

「うっ…痛い…」

ジヨニイの蹴りを食らう直前に、石の鎧を纏う竜グラビモスの甲殻を纏っていたのでなんとか無事だがそれでもカンナは少女。痛みには敏感なのである。

ぐらつく足を支えながらその場から立ち上がる。

「よお、無事だったか？」

「…」

心配のカケラもないニヤけた笑いが向けられる。カンナは口から流れる血を袖で拭き、前に垂れてきた髪を後ろに流した。

「殺す気になったか？それでいい。甘ちゃん思考は捨てて飢えた獣みたいに戦え。」

いや、お前の場合は竜か？次は何を見せてくれる？アマツマガツチか？ウカムルバスか？それともアカムトルムか？早く見せてくれ。その度に俺は強くなれる」

「…」

自分の切り札とも言える滅竜魔法を次々と言いつつ当てた。

「ギルドの誇りにかけて貴方は殺さない…仲間を守るためにあるのだから」

「おいおい、今、仲間同士で戦い合ってるっていうのにそれ言うか？思わず笑っちゃうぜ」

「仲間は殺さない——」

「舐めたこと言ってるんじゃないよクソガキ」

地が碎け、風が吹き荒れた。

そこだけが暴風区域のように常に何か吹き飛んでいた。

「斬竜——デイノバルド！」

カンナの腕全体が青い刃と化した。  
それを地面に擦り付けることで摩擦による熱を刃に加える。

「——爆槌竜の石壁！」

ジョニイはコピーした爆槌竜ウラガンキンの力を手に宿し地面に叩きつけた。

魔力操作により地面から石の壁が無数に現れカンナの行く手をふさいだ。

「滅竜奥義……斬竜……！」

だがそんなもの斬竜にとってはないに等しい。竜の甲殻すら切り裂いた獄炎の刃は全てを両断する。

「——竜斬撃！」

カンナの腕が振るわれると同時に赤い斬撃が周りに奔る。  
赤い斬撃が触れた所から石壁は崩れ落ちた。

「いいねえ……！」

そう来なくちやなア……！」

ジョニイは身をかがめることで斬撃を回避していたのか傷はなかった。

代わりに闘争心に更に火がつき、まだ竜の戦いは終わる気配を見せなかった。

## 45 終幕

「おい!? あれは何だ!?」

商店街を通る人々が見たのは絶えることのない爆発音。

雷が、炎が、爆発が、斬撃が、水が… 世界の消滅を悟らせるような光景が目の前に広がっていた。

「一体どうなってんだ…?」

「覇竜の——」

体に宿すは厄災の炎。

生きとし生けるものを全て地獄に叩き落とす神に近い竜。

その咆哮は世界を裂き、鉄よりも硬い爪は大地を穿つ。

その名はアカムトルム。全てを制する霸王の称号を得た竜。

「——嵐轟——」

カンナの口から炎の代わりに質量を持った風が解き放たれた。

大地を穿ちジョニーへと突き進む風は止まることを知らず一瞬のうちに間を詰めた。

「しやらくせえ!!」

ジョニーは足を一步踏み出し拳を構える。

魔力によって強化され、シンオウガの雷で筋肉の力を拡大させ、更にはナルガクルガの速さ拳を撃ち放った。

空気の壁を叩く音がした。

カンナのブレスとジョニーの空気弾は互いに衝突しあい激しく暴

風が吹き荒れる。

だが二人は止まらない。

「モード 角竜！」

ジョニイの手が、強靱な角と化した。

ラビットステップを発動し、加速を開始する。

「——崩竜 ウカムルバス」

カンナの手が白に染まった。

覇竜の対をなす白き神と呼ばれた絶対零度の支配者。

声は世界を震わせ、一度尻尾を振るえば地形は変わる。

氷河に生息する為に進化したのはスコップのようになった顎。顎で氷を割り水中を進む竜。だがただ氷を割るためだけの顎ではない。人に振るえば勿論のこと、竜相手でも容赦なく貫く。

「——角竜の鋭突！」

「——崩竜のアギト！」

レベルの差ではなかった。竜としての格の差が広すぎた。

一瞬の抵抗もなくジョニイの角は破壊され、見るのも痛々しい手から血が溢れ出す。

「これで…！」

私の勝ち、と思った時には頭に鈍痛が奔っていた。

「ハハ… ハハハ…」

笑っていた。

手の骨は何本も折れてるだろう。

肉もぐちゃぐちゃだろう。

なのに何故その拳を握りしめている——？

「こんな痛み… あの時比べたら無いに等しいんだよ…」

「お前知ってるか？自分の存在を否定された時の心を」

カンナの心の中の警報が最大限に達した。

崩竜の手と化したまままで再び突きを放ったがジョニイのボロボロの手に止められた。

「強くならなくちゃ… だってそうしないと心が殺されるから… 殺される前に殺さなくちゃ… 俺は悪く無い。悪いのはいつもお前達だ」

ミシリと手が軋んだ。

「俺に向かう奴は全員死ぬ。皆死んでしまえ。地獄の果てで後悔しろ」

ついでバキンと手から音が響いた。

崩竜の鱗は拳による握力で粉碎され、ボロボロと崩れ落ちた。

「——フンッ！」

鋭い蹴りが腰に入った。

地面を滑り木にぶつかることで勢いは止まったが衝撃は大きい。

「何で俺だけが…」

「煌黒竜の——」

ジョニイの手が前方に伸びる。

それに対しカンナは手を再び竜へと変化させた。

宿したのは神をも恐れさせる最強の竜、アルバトリオン

如何なる攻撃も寄せ付けず、触れるものを無慈悲に切り裂く。

しかしアルバトリオンの真髄はそこでは無い。

身に宿す不安定かつ規格外の属性エネルギーが絶え間なく変化する事で、本来一属性しか持たないはずの竜が何種類もの属性を使えることが出来る。

「――殲滅槍！」

カンナの手の周りに雷、炎、氷、風の4種類の槍が現れた。大量の魔力が練られた槍は1つでも圧倒的火力を誇り、カンナの奥義でもある。

これを発動する時は本当に敵が危険な時だけ。ジョニイの口元が動いた。

「――I <sup>体</sup> am <sup>は</sup> the <sup>剣</sup> bone <sup>出</sup> of <sup>来</sup> my <sup>て</sup> sword <sup>る</sup>」

侵食されたようにジョニイの腕が浅黒く染まった。

本人にしては侵食されたのでは無いのだろう。ただ盗んだものを使っただけ。

リスクはない。何故ならもうその力は自分のものになっているのだから。

「――熾<sup>ロ</sup>天<sup>ア</sup>覆<sup>イ</sup>う七<sup>ア</sup>つの円<sup>ス</sup>環」

トロイア戦争における大英雄の投擲を防いだ盾。薄く輝く七色の花卉は一枚一枚が城壁と同じ強度を持ち、更に投擲などの攻撃を防ぐ場合は更に強度が増す。

全ての槍がアイアスの盾に衝突した。

だが花卉は一枚足りとも壊れない。

「終わりだ――」

技が終わり見たのは、光り輝く剣だった。

人を殺すのには十分。しかも対竜の属性を兼ねたモノ。

嗤ったその顔は、とても恐ろしく…… だけど何故か悲しみがあつた。

パリン、とガラス細工が欠けるような音が響いた。

カンナが目を開けると業物であろう剣がボロボロに砕け散っていたのだ。

「ちっ、時間切れか…今回は鱗粉だけだったからか…」

ジョニイの体から溢れ出す黒い瘴気が消えていくにつれて急激に魔力が低下した。

「ああ…クソッ…またこれか…」

憑き物でも取れたみたいに地面に倒れるジョニイの体にはあの膨大な魔力は無くなっていた。

目が覚めたら包帯でグルグルにされていた。

「あら、起きたか？」

声が聞こえる方に目を向けると今回大暴れして終盤かめはめ波みたいな技を使ったミラさんがいた。

「ここは…ってギルドの二階か…」

「流石よく来てるだけあるわね」

「来たくはないですけどね！」

エルザにボコられ、ナツにボコられることでお世話になったギルドの二階。

窓を見ると海が見えるが生憎景色だけ見ても何も感じない俺にとつては退屈な場所だ。

「そういえば…終わったんですか？」

「ええ、けど今回の事件を起こしたラクサスは…」

破門なのだろう。原作持ちの俺は既に知っているが、ラクサスは天狼島の時に来るから…だいたい5ヶ月ぐらいの別れである。

短いね！

「まあラクサスだったら問題ないでしょう」

「そうね、だってラクサスなもの」

痛む体を無理やり起こし、ゆっくりと背を伸ばす。背骨がポキポキと鳴り、心地よい感覚が体に響いた。

「それにしても凄かったわね。カンナとアレだけ張り合うなんて」

「え？そんなだけ張り合ってたか？」

「ええ、おかげで被害額がとんでもないことになってるわ♪」

「・・・」

忘れよう。

「でも俺3分ぐらいで気絶させられたような気がするんですけど・・・？」

「私途中から見てただけけど5分間以上は戦っていたわよ？」  
「？」

なんか食い違いがあるな・・・

「カンナは私と年の差はあったけど同じ時期にS級の魔道士になってね・・・ 当時はライバルだったのよ」

知っているとかが当時のミラさんは超DSである。

更にエルザとも仲が悪かった・・・ よくギルド原型保てたな。

「何だか最近ずっと格上ばかり相手だな・・・」

「いいじゃない。強い人と戦うのはいい経験よ。あ、そうだ。ジョ

ニイもこの後のフェスタに出ることになってるの」

「・・・ え？」

改めて自分の体を見て見た。

手、粉☆砕！ 肋も粉☆砕！

むしろ怪我してない所の方が少ない・・・

「いや・・・ 流石にそりゃ・・・」

「出来るわね？」

ミラさんの手の中にあつたリングゴが爆発した。単純な握力です。

これって脅迫ではなくて・・・？

「出ます」 ↑震え声

「分かればいいのよ♪」

ミラさんに逆らうのはやめよう…。改めてそう思った俺であった。この後フェスタに参加して傷口が開き、治りが遅くなっただけなら言う必要もないだろう。

街から離れた崖の上にラクサスは立っていた。

最後の眺めになるだろうフェスタをかつての思い出と共に見えた。

「行くか…。」

行くあてはない。

だがそれでいい。これは自分への罪だ。

ならばそれを受け入れるのみ。

踵を返し一步步こうとした時だった。

「何処行くの…?。」

思わずため息をつく。

顔だけ後ろに向けるとそこには思ってた通りカンナがいた。

「何処でもいいだろう」

「私もついてく…。」

雷神衆が出来る以前よりもラクサスと共に行動をしてきたカンナはギルド内でもっともラクサスとの交流が深かった。

何故この二人なのかという疑問が絶えないが性格的な相性は良かったのかも知れない。

「これは俺の罪だ。テメエは関係ねえ」

「ついて行くだけだったら何の罪でもない」

目が引かないと語っていた。

面倒くさいとため息をまた一つ吐きラクサスは歩き出した。

「勝手にしろ」

「…そうする」

二人の行く先は、誰も知らない。

## 46 善悪反転都市ニルヴァーナ ①

人を信用するのは嫌いだ。

だって裏切られた時に信用してた方が傷つくのだから。

——闇ギルド

解放令を出されたにも拘らず、それを守らずに裏で活動し続けているギルド。

今まで妖精の尻尾に関連したのはララバイ編で登場した鉄アイゼンヴァルトの森だ。

闇ギルドと言っているがもつと簡単に言えば犯罪者軍団である。そして闇ギルドは中心的な3つの存在があり、その派閥にそれぞれの闇ギルドが属しておりバラム同盟とも呼ばれている。

その1つが次の章で関わる六魔将軍<sup>オラシオンセイイス</sup>。

ギルドの総人数が6人（厳密には8人）しかないのだが一人一人

が強く、実際原作では艦隊一個を破壊された。

次に悪魔の心臓。<sup>グリモアハート</sup>

バラム同盟最強の一角。かなりのネタバレだがギルドマスターはなんと妖精の尻尾の2代目マスターであるプレヒト。闇ギルドに行つてからはハデス。煉獄の七眷属と呼ばれる7人の失われた魔法<sup>ロストマジック</sup>手がいる。

もし写輪眼で失われた魔法がコピー出来るのなら是非会っておきたい：・がまずそれにはS級昇格試験に受けなければならぬ。

しかもこのS級昇格試験に受けたら最後、約7年(?)の間死ぬことになる。

そして冥府の門。<sup>タルタロス</sup>

ギルドメンバー全員がゼレフの書から生まれた悪魔。

魔法とは違う系統の呪法を用いる。

触れたものを爆弾に変える某変態殺人鬼を思い出させるような敵キャラがいる。

この3つがバラム同盟である。

——しかしこのバラム同盟を統括する更に上の存在がある。

——「0 Level」

結成期不明。構成員不明。移動方法不明。使用魔法不明。

ギルドに関する情報が1ミリたりともない正体不明の闇ギルド。だがこの闇ギルドが動く場所には何も残らない。元々何も存在してなかったかのように何も残らないと言われている。

「以上が闇ギルドについての情報ね」

魔法のペンにキャップをして机の上に置いたミラさんの顔は妙な達成感が溢れ出していた。

俺は前世の知識があるので分かるが「0 Level」だけは全く知らない。

「グレイは<0 Level>ってギルドについて何も知らないのか？」

「名前だけだな… なり潜めてるんじゃないのか？」

「てか何があつてこのギルドは名前が好評されたんだ？」

「よくよく考えればそうだな… っていうか何でこんな正体不明の闇ギルドに興味持つてんだよ？」

「それは… まあ正体不明だから」

適当に言葉で誤魔化す。

「<0 Level>が表に名前が上がったのは… これね」

ミラさんが俺の話聞いていたみたいである一枚の写真を見せてくれた。

写真の中にはボロボロの紙が写っており目を凝らさないとよく見えない。

「我、全てを終わらせる者…？」

何だこの厨二病が必死こいて考えた痛いセリフは？」

「破壊された街に唯一残っていたものよ」

写真を返し、考えて見た。

街一個を壊滅させるぐらいの能力なら星の数ほどある。某聖剣や尾獣玉然り…

今度現地に行って調べてみるのも悪くない。

「しかし今更闇ギルドの説明なんかしてどうしたんだ？」

「それは——」

「ワシらが六魔將軍を打つことになったからじゃ」

オラシオンセイイス

ギルドの入り口から険しい顔をしてマスターであるマカロフが歩いて来た。

普段の陽気な様子はなく、真面目な態度……正直な事を言えば似合っていない……。

「嘘だろ……いや、でも6人だからいけるのか……？」

「バカ、6人で最大勢力の1つを担っているのよ」

周りがざわめく。

「先日の定例会で何やらオラシオン六魔将軍が動いていると議題に上がったのである……何処かのギルドがヤツらが派手に動く前に叩こうと言うことになったのじゃ」

「しかし我々だけでは残った2つのバラム同盟に狙われるのでは？」

幾ら精鋭揃いの妖精の尻尾とは言えどゼレフ大好き軍団とロストマジック大好き軍団が攻め込まれたらひとたまりも無い。

原作ではプレヒトの魔法で天狼島は半壊するし、タルタロスはタルタロスで爆弾1つでギルドが吹っ飛んだ。

「そこでじゃ……我々は連合を組むことになった」

ザワザワとまた騒ぎ立つ。

普段から暴れまくりのギルドが他のギルドと手を組むという異常さ……。

言ってる悲しいが事実なので仕方がない。

「妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗、化け猫の宿からそれぞれ何人か選出する」

「何人って……誰が行くのか決まっているのか？」

「おお、もう決まっておる」

この話では何時ものナツ、ルーシィ、グレイ、エルザが行くことが確定している。

だから俺が行く必要性は無いっていうか選ばれない。まあこの話で盗む価値がある技がないしな……。

「まずはナツ。あまり建造物を壊さないように」

「よっしやああああ!!」

「言ってるそばから屋根を燃やすな」

ナツの口から炎が噴出され軽く天井が焼けた（この後エルフマンが修理しました）

「次にグレイ。全裸にならないように」

「はっ、なるかよ」

「いやなってるから」

「嘘オ!??!」

「ここまでまともなやつがない件について…」

戦ってる時は真面目なのになあ…

「次、ルーシイ。頑張つて来なさい」

「私!??!何で!??!」

ルーシイは普通だから言うことなし。

だつてルーシイだし。

あつ、でも言うことがあるならポロリしないよう（ry

「そしてエルザ。リーダーとして頼むぞ」

「了解ですマスター」

これで原作通り。

俺はこの話の間爆睡かまして、のんびりする。

あ、この間に例の闇ギルドが襲った場所に行ってみるのも悪くはないな…

「そしてジョニイとサクラ」

「…へ?」

黄金の流れ星が何処かの山に落ちた。

瞬間音もなく、風が一带に吹き荒れる。

次いで山が爆発したように粉塵を舞い上げた。

砂煙が舞い上がり、木々がへし折れる。

砂煙の中から1つ何かが飛び出す。

「糞がアアア!!何なんだよテメエは?!?!」

口調を荒げ、叫ぶ男の名前は六魔將軍のギルドマスターであるブレイン……ではなく、あまりにも強大な力を持ったためブレイン自らが封印したもう1つの人格であるゼロ。

しかし、その強大な力を持つゼロが、手も足もです、ただひたすらに蹂躪されていた。

「くだらないね。この程度で自身の力を封印してたなんて……何？君痛い人なの？」

「黙れよ小僧がアアアアア!!」

話は変わるがブレインのもう1つの人格であるゼロは、六魔將軍が全て破れた時に封印が解けるシステムになっている。

つまりゼロと対峙してる少年は六魔將軍を全て破ったことになる。

「ほら、来てみなよ。君のそのチンチクリンな魔法を見せてくれよ」  
「言ったことを後悔しろ……!」

ゼロの体から魔力が零れ出した。  
抑えられていた魔力が悲鳴のように音を上げる。

「——ジェネシス・ゼロ!」

恨み積もった怨嗟が意思を持ち、数え切れないほどの魂が少年に襲いかかる。

敵を喰らい尽くすまで消えない魔法であり、並みの攻撃では掻消せない。

——しかし

「全く… 興ざめだ」

いつの間にかゼロに刺さっていた剣によって全て掻き消された。  
「グアア…！」

ガキイ… この俺を誰だと思ってやがる!？」

「はいはい、そう言うのはいいから、ね？」

「——早く死んでよ」

少年の背後に黄金の波紋が現れた。

1つ、2つ、3つ… まだまだ数は増えて行き100を超えた。

黄金の波紋から顔を覗かせ現れたのは剣、槍、斧、短剣、大剣、刺  
突剣 e t c e t c …

1つ1つが名のある武器なのか、肌を感じる魔力は異常だった。

「ハハ… アハハハ… ハハハハハハ!!」

ゼロは笑った。

壊れた心で唯一出来ることだった。

「では神判の時だ——散りざまぐらい美しくしてくれよっ。」

黄金の光が輝いた直後——山は崩壊した。

47 善悪反転都市ニルヴァーナ ②

だから俺は信じていない。

家族とも言える大事な仲間達を。  
だから見えない仮面で嘘を吐き続けた。

「うっぷ…。」

「エルザ、腹パンしてやれ」

揺れる馬車の中、俺は隣の席に座っているエルザに向けてそう言った。

吐きそうになるナツにはリバースする前に気絶してもらった方が手っ取り早い。

「まかせろ」

ドスツ！とウエイトの効いたパンチがナツの腹にクリーンヒットした。

会心の一撃。ナツは気絶した！

「前よりも慣れてない…？」

「この程度、幾らでも上達出来る」

ルーシイのツツコミにドヤ顔でエルザが返事したが気絶させるスキルっておおい…。

「と言うか私行く必要ありますか？」

隣の席に座っているサクラがヒョイと顔を出した。

俺はニヤリとわざとらしく笑みを作り返事を返した。

「ああ、俺の盾として働いてもらう」

「お前最低だな」

「冗談だよ。あとグレイ、服着ろ」

「おっと、いつの間に…」

いつの間に脱いでいたのかも分からないグレイの脱ぎ癖。もはやマジックの領域に達している。

「でも六魔将軍って闇ギルドはかなり強いんですよ？勝てるんですかね…？」

「おいおいルーシイ、何言っているんだ？」

「こつちにはエルザがいるんだぞ？」

「お前な…」

グレイの呆れた眼が突き刺さる。

俺は持ってきたポツキーもどきを口でくわえた。

「まあルーシイもそう自分を下卑するな。マスターが選んだ人選なのだから期待に応えるべきだろう？」

「そうだけど…」

まあ一人だけ星霊魔道士だから何か感じる事があるんだろうなあ…。

「でもバトルならジュビアやガジルがいるじゃない」

「二人とも別の仕事が入ったからね」

「来てしまったからには仕方ないですよ。私もギルドに入ってからまだ数ヶ月ですよ？」

「サクラはあれじゃない…必殺技とか持ってるでしょ？」

「ルーシイだつて持つてるだろ。ルーシイキック（笑）」

「ジョニーあんた馬鹿にしてるわね!？」

笑いを誤魔化すためにお茶を一口含む。

いいじゃないかルーシイキック。俺は好きだよルーシイキック（笑）。

「さて…そろそろ着く頃か？」

「あんた後で問い詰めてやるから覚えておきなさいよ…！」

話を捻じ曲げさも依頼に集中してるのを装う。実際目に集合場所が移り始めているのだからあながち間違いではないが…

「はあ…面倒だな…」

「そんな事を言うな。これも任務だ」

愚痴をこぼしているといつの間にかラブホみたいな家に到着した。

サクラに荷物を頼み、俺はナツを肩に乗せて一人遅れて歩く。

少し遅れて部屋に入ると既にホスト3人組がエルザ達をソファに連れて行っていた。

手早すぎだろあいつら。

「うっ…ここは、何処だ…？」

「あ、やっと起きたか」

やっとナツは目を覚まし、肩の自由が解放された。

視線を前に向けると完全ホスト状態になっており俺の心の中のイケメンへの憎しみが肥大化するのが分かった。

「お前からもなんか言ってやれよジョニー」

「イケメン死すべし慈悲はない」

今の俺は普段の俺より数倍強い自信がある。

「君達…その辺にしたまえ」

「二二、この声は!!?!」

スポットライトが階段の上を照らす。

原作を見て分かっているんで俺の顔は死んでいる。だってあの強烈なインパクトを持つ一夜だぞ？そりゃ顔だって死ぬわ。

「会いたかったよマイハニー…あなたの為の一夜でえす」

うわあ…生で見ると凄い…。

分かっていると思うがイケメンキャラ（笑）の一夜である。

イケメンと言っているがブサイクである。

ブサイクなのだ（重要なので2回言った）。

さて、急ではあるがニルヴァーナ編について説明しておこう。

六魔将軍と言う闇ギルドがニルヴァーナと言う人の善悪を反転させる禁忌魔法を復活させようとするのを止める話だ。

おおよそはこんな感じ。

最近妙なイレギュラーが発生してるから何が起きるか分からんが…。

もう正直なところ勘弁して欲しい。最初にエミヤで、次がモンハン関係の竜の力持つてるとかインチキにも程があるだろ。

「あ、あの…。」

「へ?。」

思いふけつてしていると話しかけられた。

目の前を見ても誰もいなかったので少し視線を下げるとロリがいた。

先に言っておくが私はロリコンではない。

本当に。もうこれマジだから。

「私ウエンディと言います…。足手まといになるかもしれないけどお願いします!。」

「——は、こちらこそよろしく。」

ああそうだ。俺の名前がまだだったな。ジョニーでもお兄ちゃー  
ーいや、ジョニーと呼んでくれ」

あぶねえ…。俺の内に眠るロリコン細胞が騒ぎ始めてやがるZ☆

「大丈夫なのこの人…。」

「失礼だよシャルル!。」

そうだよシャルル!確かに俺はロリコン疑惑があるしシャツには『働いたら負け』って書いてあるけどそんなの酷いや! (白目)

「ごめんなさい…。」

「いやいや、事実不審者みたいなものだし」

「言つて悲しくないの…?。」

「悲しいに決まってるだろ…。」

一人うずくまっていると新たな足音が聞こえた。顔を上げるとグレイの兄弟子であるリオンの姿があった。

ついでに俺はガルナ島編の時、俺はサクラの刀を作りに行く手伝いをしてたのでリオン含めその部下と会うのはこれが初めてである。

「お前がジョニイ・アルバートだな」

「そう言うお前はリオンだな。グレイから話は聞いてるよ」

ほとんどが愚痴ではあったが。

やれりオンは話すと面倒だとか、やれりオンはすぐに服を脱ぐだとか…… ついでにその事を話していた時のグレイは服を脱いでいた。

「グレイの事だ。どうせ俺に対する愚痴しか言っていないだろう?」

「ああ……ま、最後には頼もしい奴って友情漫画顔負けのセリフ言ってたけどな」

「らしくないな」

「全くだ」

お互いに笑う。

と、ここで一夜が手を叩き場の空気を引き戻した。

「さて……皆知っていると思うが今回集まったのは他でもない。闇ギ

ルド、バラム同盟の一角六魔將軍の撃退だ……ヒビキ君、アレを」

「ハッ、我が主よ」

「もう偉い言葉だったら何でもいいのかよ……」

ヒビキの魔法、古代書が<sup>アーカイブ</sup>発動し俺たちの前に6個の画像が現れた。

(しれっと写輪眼で古代書を発動するのを見てたのでコピーしてあるぜ!)

六魔將軍のメンバーをネタバレ込みで紹介すると――

毒蛇を操り、毒竜の力を持つコブラ。

一定範囲の体感を遅らせる魔法を使うレーサー。

地面をヌメヌメさせ、なんか某忍者漫画の白眼みたいに透視出来る

ホットアイ。

星霊使いのエンジェル。

物質を捻じ曲げる力と幻術を見せる能力を持つミッドナイト。

超頭がいい司令塔のブレイン。

ただし六魔將軍が全て倒されるともう1つの人格であるゼロが出てくる。

「…と言う事だ。更に今回は奴らが封印された魔法を封印させようとするのを阻止しなければならぬ」

「封印された魔法とは…？」

「ニルヴァーナ…強大過ぎる力を持つため封印された…が魔法の持つ力が何かは分からない」

ニルヴァーナ。

それは光と闇を入れ替える魔法である。

簡単に例えるならナルトが闇落ちして、サスケが某正義の味方になるみたいな感じだ。

確かヒビキがこの魔法の事を知ってたけど意識したら悪影響が出るとかうんたらかんたら言ってたので言わない方がいいだろう。

「知らねエ魔法だな」

「関係ねえよ！封印させる前に奴らを倒せばいいだけだろ？」

「というかそんな相手にどうするのよ!!？」

正直私頭数に入れて欲しくないんだけど…」

「私も戦うのは苦手です…」

「ウエンデイ！弱音はかないの！」

「それについては大丈夫だ。君達はヤツらがいる拠点を見つけさえすればいい。そうすれば後は我がギルドの誇る空中要塞…クリスティーナで吹き飛ばす！」

ただし数十分後には爆破している。

「てか…数人相手にそこまでやる？」

「そういう相手なのだ。仕方がない」

ボフツと炎がナツの拳から漏れ出した。

振り向くと既にいつもみたいに一人で爆走していた。

「オレが6人まとめて倒してやるぜエエエエエ!!」

「話聞けよ…」

ナツに引き続き一夜、ジユラ、俺を除いたメンバーが飛び出した。それを確認してから俺は目に魔力を込め写輪眼にし、一夜の方に振り向いた。

「むっ、その目が全てを見抜くと言う噂の——」

「オラアア！」

「メエエエン!？」

一夜のブサイクな顔に俺の拳が突き刺さった。

拳を振り抜くと、フルパワーだったせいか一夜がブロリーにダイナミック壁ドンされたベジータみたいになった。

「ジヨニイ!?!?何をしている!?!?」

「さあ…色々喋って貰おうかジエミニ…?」

「何を言っているんだね君は!?!?」

「素晴らしいのいいから。写輪眼で見抜けないものがないと思ったか?」

嘘である。

写輪眼は確かに魔力の流れや、相手の動きの予知などは出来るがジエミニのように魔力まで瓜二つにされたら見抜けない。

「ジヨニイ… どういうことだ?」

「これは偽物ですよ。コピーする魔法でも使ったのでしよう」

「いやいや!偽物も何も私は本物だ!このイケメンな顔を見て分からないのか!?!?」

「…イケメンかどうかは置いておいて…ジユラさん、お願いがあるんですけど男子トイレを見て来てくれませんか?」

「ん?まあその程度ならば…」

流石ジユラさん。超良い人。

俺蛇姫の鱗入っつけばよかったかな…

「君が何を誤解しているかは知らないが私は本物だ!」

「偽物は大体そう言うんだよ」

ロープで天井から吊るす。

これでエンジェルのやつも出てくるはず…

「すまない。何もなかったのだが」  
「へ…？」

あれ？また原作と変わってね？